

つてゐるやうに煩らはしく眺められた。出来る丈多くの注意を惹かうとする浮誇の活動さへ至る所に出現した。さうして次の色彩に席を譲るべくすぐ消滅した。眼中の小世界はたゞ動揺であつた、亂雑であつた、さうして何時でも粉飾であつた。

比較的静かな舞臺の裏側では、道具方の使ふ金槌の音が、一般の豫期を咬るべく、折々場内へ響き渡つた。合間々々には幕の後で拍子木を打つ音が、攪き廻された注意を一點に纏めやうとする警柝の如に聞こえた。

不思議なのは観客であつた。何もする事のない此長い幕間を、少しの不平も云はず、かつて退屈の色も見せず、さも太平らしく、空疎な腹に散漫な刺戟を盛つて、他愛なく時間のために流されてゐた。彼等は穩和かであつた。彼等は楽しさうに見えた。お互の吐く呼吸に酔つ拂つた彼等は、少し醒めかけると、すぐ眼を轉じて誰かの顔を眺めた。さうしてすぐ其所に陶然たる或物を認めた。すぐ相手の氣分に同化する事が出来た。

席に戻つた二人は愉快らしく四邊を見廻した。それから申し合せたやうに問題の吉川夫人の方を見た。夫人の双眼鏡はもう彼等を覗つてゐなかつた。其代り双眼鏡の主人も何處かへ行つて仕舞つた。

「あら居らつしやらないわ」
「本當ね」
「あたし探して上ませうか」
百合子はすぐ自分の手に持つた此方のオペラグラスを眼へ宛てがつた。
「居ない、居ない、何處かへ行つちまつた。あの奥さんなら二人前位肥つてるんだから、すぐ分る筈だけれども、矢張り居ないわよ」
さう云ひながら百合子は象牙の眼鏡を下へ置いた。綺麗な友染模様の脊中が隠れる程、帯を高く脊負つた令嬢としては、言葉が少しも餘所行でないので、姉は可笑しさを堪へるやうな口元に、年上らしい威厳を示して、妹を窘なめた。

「百合子さん」
妹は少しも應へなかつた。例の通り一寸小鼻を膨らませて、それが何うしたんだといつた風の表情をしながら、わざと繼子を見た。

「百合子さん」
妹は少しも應へなかつた。例の通り一寸小鼻を膨らませて、それが何うしたんだといつた風の表情をしながら、わざと繼子を見た。

「あたしもう歸りたくなつたわ。早くお父さまが来てくれると好いんだけどな」
「歸りたければお歸りよ。お父さまが入らつしやらなくつても構はないから」
「でも居るわ」

百合子は矢張り動かなかつた。子供でなくつては振舞ひにくい此腕白らしい態度の傍に、お延が年相應の分別を出して叔母に向つた。

「あたし一寸行つて吉川さんの奥さんに御挨拶をして來ませうか。澄ましてゐちや悪いわね」
實を云ふと彼女は此夫人をあまり好いてゐなかつた。向ふでも此方を嫌つてゐるやうに思へた。しかも最初先方から自分を嫌ひ始めたために、此不愉快な現象が二人の間に起つたのだといふ臆氣な理由さへあつた。自分が嫌はれるべき何等のきつかけも與へないのに、向ふで嫌ひ始めたのだといふ自信も伴つてゐた。先刻双眼鏡を向けられた時、既に挨拶に行かなければならないと氣の付いた彼女は、即座にそれを斷行する勇氣を起し得なかつたので、内心の不安を質問の形に引き直して叔母に相談しかけながら、腹の中では、其義務を容易く果させるために、叔母が自分と連れ立つて、夫人の所へ行つて呉れはしまいかと暗に願つてゐた。

叔母はすぐ返事をした。

「あゝ行つた方が可いよ。行つといでよ」

「でも今居らつしやらないから」

「なに屹度廊下にでも出ておいでなんだよ。行けば分るよ」

「でも、——ぢや行くから叔母さんも一所に入らつしやいな」

「叔母さんは——」

「入らつしやらない？」

「行つても可いがね。何うせ今に御飯を食べる時に、一所になる筈になつてゐるんだから、御免蒙つて其時にしやうかと思つてるのよ」

「あらそんなお約束があるの。あたしちつとも知らなかつたわ。誰と誰が一所に御飯を召上がの」

「みんなよ」

「あたしも？」

「あゝ」

意外の感に打たれたお延は、しばらくしてから答へた。

「そんならあたしも其時にするわ」

五十

岡本の来たのはそれから間もなくであつた。茶屋の男に開けて貰つた戸の隙間から中を覗いた彼は、お出々々々をして百合子を廊下へ呼び出した。其所で二人がみんなの邪魔にならないやうな小聲の立談を、二言三言取り換はした後で、百合子は約束通り男に送られてすぐ場外へ出た。さうして入れ代りに入つて来た彼が其後へ窮屈さうに坐つた。こんな場所では一寸身體の位置を變るのさへ億劫さうに見える肥満な彼は、坐つてしまつてから不圖氣の付いたやうに、半分ばかり背後を向いた。

「お延、代つてやらうか。あんまり大きいのが前を塞いで邪魔だらう」

一夜作りの山が急に出来上つたやうな心持のしたお延は、舞台へ氣を取られてゐる四邊へ遠慮

して動かかなかつた。毛織ものを肌へ着けた例のない岡本は、毛だらけな腕を組んで、是もお付合だと云つた風に、みんなの見てゐる方角へ視線を向けた。そこでは色の生つ白い變な男が柳の下をうろ／＼してゐた。荒い縞の着物をぞろりと着流して、博多の帯をわざと下の方へ締め、其色男は、素足に雪駄を穿いてゐるので、歩く度にちやらちやらいふ不愉快な音を岡本の耳に響かせた。彼は柳の傍にある橋と、橋の向ふに並んでゐる土藏の白壁を見廻して、それから其序に觀客の方へ眼を移した。然るに觀客の顔は悉く緊張してゐた。雪駄をちやらく／＼鳴らして舞台の上を往つたり來つたりする此若い男の運動に、非常な重大の意味でもあるやうに、満場は静まり返つて、咳一つするものがなかつた。急に表から入つて來た彼に取つて、すぐ此特殊な空氣に感染する事が困難であつたのか、又馬鹿らしかつたのか、少時すると彼は又窮屈さうに半分後を向いて、小聲でお延に話しかけた。

「何うだ面白いかね。——由雄さんは何うだ。——」

簡単な質問を次から次へと三つ四つ掛けて、一口づゝの返事をお延から受け取つた彼は、最後に意味ありげな眼をして更に訊いた。

「今日は何うだつたい。由雄さんが何とか云やしなかつたかね。大方愚圖々々云つたんだらう。己が病気で寐てゐるのに貴様一人芝居へ行くなんて不埒千萬だとか何とか。え？屹度さうだらう」
「不埒千萬だなんて、そんな事云やしないわ」
「でも何か云はれたらう。岡本は不都合な奴だ位云はれたに違あるまい。電話の様子が何うも變だつたぜ」

小聲でさへ話をするものが周圍に一人もない所で、自分丈長い受け答をするのは極りが悪かつたので、お延はたゞ微笑してゐた。

「構はないよ。叔父さんが後で話をして遣るから、そんな事は心配しないで可いよ」

「あたし心配なんかしちやゐないわ」

「さうか、それでも少しや氣がかりだらう。結婚早々旦那様の御機嫌を損じちや」

「大丈夫よ。御機嫌なんか損じちやゐないつて云ふのに」

お延は煩ささうに眉を動かした。面白半分調戲つて見た岡本は少し眞面目になつた。

「實は今日お前を呼んだのはね、たゞ芝居を見せるためばかりぢやない、少し呼ぶ必要があつ

たんだよ。それで由雄さんが病氣の所を無理に来て貰つた様な譯だが、其譯さへ由雄さんに後から話して置けば何でもない事さ。叔父さんが能く話して置くよ」

お延の眼は急に舞台を離れた。

「理由つて一體何」

「今此所ぢや話し悪いがね。いづれ後で話すよ」

お延は黙るより外に仕方なかつた。岡本は付け足すやうに云つた。

「今日は吉川さんと一所に食堂で晩食を食べる事になつてるんだよ。知つてるかね。そら吉川も彼所へ来てゐるだらう」

先刻迄眼に付かなかつた吉川の姿がすぐお延の眼に入つた。

「叔父さんと一所に来たんだよ。俱樂部から」

二人の會話は其所で途切れた。お延は又眞面目に舞台の方を見出した。然し十分経つか経たないうちに、彼女の注意が又そつと後の戸を開ける茶屋の男によつて亂された。男は叔母に何か耳語いた。叔母はすぐ叔父の方へ顔を寄せた。

「あのね吉川さんから、食事の用意を致させて置きましたから、此次の幕間に何うぞ食堂へ御出下さいますようにつて」

叔父はすぐ返事を傳へさせた。

「承知しました」

男は又戸をそつと閉て、出て行つた。是から何が始まるのだらうかと思つたお延は、黙つて會食の時間を待つた。

五十一

彼女が叔父叔母の後に隨つて、繼子と一所に、二階の片隅にある奥行の深い食堂に入るべく席を立つたのは、それから小一時間後であつた。彼女は自分と肩を並べて、すれ／＼に廊下を歩いて行く従妹に小聲で訊いて見た。

「一體是から何が始まるの」

「知らないわ」

繼子は下を向いて答へた。

「たゞ御飯を食べるぎりなの」

「左右なんでせう」

訊かうとすれば訊かうとする程、繼子の返事が曖昧になつてくるやうに思はれたので、お延はそれぎり口を閉ぢた。繼子は前に行く父母に遠慮があるのかも知れなかつた。又自分は何にも承知してゐないのかも分らなかつた。或は承知してゐても、お延に話したくないので、わざと短かい返事を小さな聲で與へないとも限らなかつた。

鋭い一瞥の注意を彼等の上に拂つて行きがちな、廊下で出逢ふ多數の人々は、みんなお延よりも繼子の方に餘分の視線を向けた。忽然お延の頭に彼女と自分との比較が閃めいた。姿恰好は繼子に立ち優つてゐても、服装や顔形では是非ひけを取らなければならなかつた彼女は、何時迄も子供らしく羞耻んでゐるやうな、又何所迄も氣苦勞のなさうに初々しく出来上つた、處女として水は滴たる許の、此従妹を軽い嫉妬の眼で視た。其所にはたとひ氣の毒だといふ侮蔑の意が全く打ち消されてゐないにした所で、一寸彼我の地位を易へて立つて見たい位な羨望の念が、著る

しく働らいてゐた。お延は考へた。

「處女であつた頃、自分にもかつて斯んなお嬢さんらしい時期があつたらうか」

幸か不幸か彼女は其時期を思ひ出す事が出来なかつた。平生繼子を標準に置かないで、何とも思はずに暮してゐた彼女は、今其従妹と肩を並べながら、賑やかな電燈で明るく照らされた廊下の上に立つて、また曾て感じた事のない一種の哀愁に打たれた。それは軽いものであつた。然し涙に變化し易い性質のものであつた。さうして今嫉妬の眼で眺めたばかりの相手の手を、固く握り締めたくなるやうな種類のものであつた。彼女は心の中で繼子に云つた。

「あなたは私より純潔です。私が羨やましがらる程純潔です。けれどもあなたの純潔は、あなたの未來の夫に對して、何の役にも立たない武器に過ぎません。私のやうに手落なく仕向けてすらいふ夫は、決して此方の思ふ通りに感謝して呉れるものではありません。あなたは今に夫の愛を繋ぐために、其貴い純潔な生地を失はなければならぬのです。それ丈の犠牲を拂つて夫のために盡してすら、夫はことによるとあなたに辛く中るかも知れません。私はあなたが羨ましいと同時に、あなたがお氣の毒です。近いうちに破壊しなければならぬ貴い寶物を、あなたはそれと心づか

ずに、無邪氣に有つてゐるからです。幸か不幸か始めから私には今あなたの有つてゐるやうな天然其儘の器が完全に具はつて居りませんでしたから、それ程の損失もないのだと云へば、云はれないこともないでせうが、あなたは私と違ひます。あなたは父母の膝下を離れると共に、すぐ天真の姿を傷けられます。あなたは私よりも可哀相です」

二人の歩き方は遅かつた。先に行つた岡本夫婦が人に遮ぎられて見えなくなつた時、叔母はわざ／＼取つて返した。

「早くお出なね。何を愚圖々々してゐるの。もう吉川さんの方ぢや先へ來て待つて入らつしやるんだよ」

叔母の眼は繼子の方ばかり注がれてゐた。言葉もとくに彼女に向つて掛けられた。けれども吉川といふ名前を聞いたお延の耳には、それが今迄の氣分を一度に吹き散らす風のやうに響いた。彼女は自分のあまり好いてゐない、又向ふでも自分をあまり好いてゐないらしい、吉川夫人の事をすぐ思ひ出した。彼女は自分の夫が、平生から一方ならぬ恩顧を受けてゐる勢力家の妻君として、今其人の前に、能ふ限りの愛嬌と禮儀とを示さなければならなかつた。平靜のうちに一種の

緊張を包んだ彼女は、知らん顔をして、みんなの後に隨いて食堂に入った。

五十二

叔母の云つた通り、吉川夫婦は自分達より一足早く約束の場所へ来たものと見えて、お延の目標にする其夫人は、入口の方を向いて叔父と立談をしてゐた。大きな叔父の後姿よりも、向ふ側に食み出してゐる大々した夫人のかつぶくが、まづお延の眼に入つた。それと同時に、肉付の豊かな頬に笑ひを漲らしてゐた夫人の方でも、すぐ眸をお延の眼の上に移した。然し咄嗟の電火作用は起ると共に消えたので、二人は正式に挨拶を取り換す迄、遂に互を認め合はなかつた。

夫人に投げかけた一瞥について、お延は又其傍に立つてゐる若い紳士を見ない譯に行かなかつた。それが間違もなく、先刻廊下で繼子と一所になつて、冗談半分夫人の双眼鏡をはしたなく批評し合つた時に、自分達を驚ろかした無言の男なので、彼女は思はずひやりとした。

簡単な挨拶が各自の間に行はれる間、控目にみんなの後に立つてゐた彼女は、やがて自分の番が廻つて来た時、たゞ三好さんとして此未知の人に紹介された。紹介者は吉川夫人であつたが、

夫人の用ひる言葉が、叔父に對しても、叔母に對しても、又繼子に對しても、みんな自分に對するのと同じ事で、其間に少しも變りがないので、お延は遂に其三好の何人であるかを知らずに仕舞つた。

席に着くとき、夫人は叔父の隣りに坐つた。一方の隣には三好が坐らせられた。叔母の席は食卓の角であつた。繼子のは三好の前であつた。餘つた一脚の椅子へ腰を下ろすべく餘儀なくされたお延は、少し躊躇した。隣りには吉川がゐた。さうして前は吉川夫人であつた。

「何うです掛けたら」

吉川は催促するやうにお延を横から見上げた。

「さあ何うぞ」と気軽に云つた夫人は正面から彼女を見た。

「遠慮しずにお掛けなさいよ。もうみんな坐つてゐるんだから」

お延は仕方なしに夫人の前に着席した。先を越す積でゐたのに、却つて先を越されたといふ拙い感じが胸の何處かにあつた。自分の態度を禮儀から出た本當の遠慮と解釋して貰ふやうに、是から仕向けて行かなければならないといふ意志もすぐ働らいた。其意志は自分と正反對な繼子の

初心らしい様子を、食卓越に眺めた時、益強固にされた。

繼子は又何時より大人し過ぎた。碌々口も利かないで、下ばかり向いてゐる彼女の態度の中には、殆んど苦痛に近い或物が見透された。氣の毒さうに彼女を一目見遣つたお延は、すぐ前にゐる夫人の方へ、彼女に特有な愛嬌のある眼を移した。社交に慣れ切つた夫人も黙つてゐる人ではなかつた。

調子の好い會話の断片が、二三度二人の間を往つたり來つたりした。然しそれ以上に發展する餘地のなかつた題目は、其所でびたりと留まつてしまつた。二人の間に共通な津田を話の種にしようと思つたお延が、それを自分から持ち出したものか何うかと遲疑してゐるうちに、夫人はもう自分を置き去りにして、遠くにゐる三好に向つた。

「三好さん、黙つてゐないで、ちつと彼地の面白い話でもして繼子さんに聞かせてお上げなさい」

丁度叔母と話を途切らしてゐた三好は夫人の方を向いて靜かに云つた。

「え、何でも致しませう」

「え、何でもなさい。黙つてちや不可せん」

命令的な此言葉がみんなを笑はせた。

「又獨逸を逃げ出した話でもするがい」

吉川はすぐ細君の命令を具體的にした。

「獨逸を逃げ出した話も、何度となく繰り返すんでね、近頃はもう他よりも自分の方が陳腐になつてしまひました」

「あなたの様な落付いた方でも、少しは周章たでせうね」

「少し所なら好いですが、殆んど夢中でしたらう。自分ぢやよく分らないけれども」

「でも殺されるとは思はなかつたでせう」

「左様」

三好が少し考へてゐると、吉川はすぐ隣りから口を出した。

「まさか殺されるとも思ふまいね。ことに此人は」

「何故です。人間がづう／＼しいからですか」

「といふ譯でもないが、兎に角非常に命を惜がる男だから」
繼子が下を向いた儘くすく笑つた。戦争前後に獨逸を引き上げて来た人だといふ事丈がお延に解つた。

五十三

三好を中心にした洋行談が一仕切弾んだ。相間々々に巧みなきつけを入れて話の後を釣り出して行く吉川夫人のお手際を、黙つて觀察してゐたお延は、夫人が何んな努力で、彼等四人の前に、此未知の青年紳士を押し出さうと試みつゝあるかを見抜いた。穩和といふよりも寧ろ無口な彼は、自分でさうと氣が付かないうちに、彼に好意を有つた夫人の口車に乗せられて、最も有利な方面から自分をみんなの前に説明してゐた。

彼女は此談話の進行中、殆んど一言も口を挟さむ餘地を與へられなかつた。自然の勢ひ沈黙の謹聽者たるべき地位に立つた彼女には批判の力ばかり多く働らいた。卒直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫も技巧の臭味なしに、着々成功して行く段取を、一步ごとに眺めた彼

女は、自分の天性と夫人のそれとの間に非常の距離がある事を認めない譯に行かなかつた。然しそれは上下の距離でなくつて、平面の距離だといふ氣がした。では恐るゝに足りないかといふと決して左右でなかつた。一部分は得意な現在の地位からも出て來るらしい命令的態度の外に、夫人の技巧には時として恐るべき破壊力が伴つて來はしまいかといふ危険の感じが、お延の胸の何所かでした。

「此方の氣の所爲かしらん」

お延が斯う考へてゐると、問題の夫人が突然彼女の方に注意を移した。

「延子さんが呆れてゐらつしやる。あたしが餘まり饒舌るもんだから」

お延は不意を打たれて退避ろいだ。津田の前でかつて挨拶に困つた事のない彼女の智慧が、何う働いて好いか分らなくなつた。たゞ空疎な薄笑が瞬間の虚を充たした。然しそれは御役目にもならない偽りの愛嬌に過ぎなかつた。

「いゝえ、大變面白く伺つて居ります」と後から付け足した時は、お延自分でももう時機の後れてゐる事に氣が付いてゐた。又遣り損なつたといふ苦い感じが彼女の口の先迄湧いて出た。今

日こそ夫人の機嫌を取り返して遣らうといふ氣込が一度に萎へた。夫人は殘酷に見える程早く調子を易へて、すぐ岡本に向つた。

「岡本さんあなたが外國から歸つて入らしつてから、もう餘程になりますね」

「ええ。何しろ一昔前の事ですから」

「一昔前つて何年頃なの、一體」

「左様西曆……」

自然だか偶然だか叔父は勿體ぶつた考へ方をした。

「普佛戰爭時分？」

「馬鹿にしちや不可せん。是でもあなたの旦那様を案内して倫敦を連れて歩いて上げた覺があるんだから」

「ぢや巴理で籠城した組ぢやないのね」

「冗談ぢやない」

三好の洋行談を一仕切で切り上げた夫人は、すぐ話頭を、それと關係の深い他の方面へ持つて

行つた。自然吉川は岡本の相手にならなければ濟まなくなつた。

「何しろ自動車の出來たで、あれが通ると、みんな振り返つて見た時分だつたからね」

「うん、あの鈍臭いバスがまだ幅を利かしてゐた時代だよ」

其鈍臭いバスが、さういふ交通機關を自分で利用した記憶のない外の者に取つて、何の思ひ出にならなかつたにも關はらず、當時を回顧する二人の胸には、矢張り淡い一種の感慨を惹き起すらしく見えた。繼子と三好を見較べた岡本は、苦笑しながら吉川に云つた。

「お互に年を取つたもんだね。不斷はちつとも氣が付かずに、まだ若い積かなんかで、頻りに乾燥ぎ廻つてゐるが、斯うして娘の隣に坐つて見ると、少し考へるね」

「ぢや始終その子の傍に坐つてゐらつたら好いでせう」
叔母はすぐ叔父に向つた。叔父もすぐ答へた。

「全くだよ。外國から歸つて來た時にや、この子がまだ」と云ひかけて一寸考へた彼は、「幾つだつけかな」と訊いた。叔母がそんな呑氣な人に返事をする義務はないといはぬ許の顔をして黙つてゐるので、吉川が傍から口を出した。

「今度はお爺さまへつて云はれる時機が、もう眼前に逼つて来たんだ。油断は出来ません」
繼子が顔を根くして下を向いた。夫人はすぐ夫の方を見た。

「でも岡本さんにや自分の年齒を計る生きた時計が付いてるから、まだ可いんです。あなたと来たら何にも反省器械を持つてゐらつしやらないんだから、全く手に餘る丈ですよ」

「其代りお前だつて何時迄もお若くつてゐらつしやるぢやないか」
みんなが聲を出して笑つた。

五十四

彼等ほど多人數でない、従つて比較的静かな外の客が、丸で舞台を餘所にして、氣樂さうな話ばかりしてゐるお延の一群を折々見た。時間を儉約するため、わざと軽い食事を取つたものたちが、珈琲も飲まずに、そろそろ立ち掛ける時が來ても、お延の前には夫から夫へと新しい皿が運ばれた。彼等はず途中で拭布を放り出す譯に行かなかつた。又そんな世話しない眞似をする氣もないらしかつた。芝居を観に來たといふよりも、芝居場へ遊びに來たといふ態度で、何處迄もゆ

つくり構へてゐた。

「もう始まつたのかい」

急に静かになつた食堂を見廻した叔父は、斯う云つて白服のボーイに訊いた。ボーイは彼の前に盥かい皿を置きながら、鄭寧に答へた。

「たゞ今開きました」

「いゝや開いたつて。此際眼よりも口の方が大事だ」

叔父はすぐ皮付の鶏の股を攻撃し始めた。向ふにゐる吉川も、舞台で何が起つてゐやうと丸で頓着しないらしかつた。彼はすぐ叔父の後へついて、劇とは全く無關係な食物の挨拶をした。

「君は相變らず旨さうに食ふね。——奥さん此岡本君が今よりもつと食つて、もつと肥つてた時分、西洋人の肩車へ乗つた話をお聞きですか」

叔母は知らなかつた。吉川はまた同じ間を繼子に掛けた。繼子も知らなかつた。

「さうでせうね、餘まり外聞の好い話ぢやないから、屹度隠してゐるんですよ」

「何が？」

叔父は漸く皿から眼を上げて、不思議さうに相手を見た。すると吉川の夫人が傍から口を出した。

「大方重過ぎて其外國人を潰したんでせう」

「そんならまだ自慢になるが、みんなに變な顔をしてじろく見られながら、倫敦の群衆の中で、大男の肩の上へ嚙り付いてゐたんだ。行列を見るためにね」

叔父はまだ笑ひもしなかつた。

「何を捏造する事やら。一體そりや何時の話だね」

「エドワード七世の戴冠式の時さ。行列を見やうとしてマンションハウスの前に立つてた所が、日本と違つて向ふのものがあんまり君より脊丈が高過ぎるもんだから、苦し紛れに一所に行つた下宿の亭主に頼んで、肩車に乗せて貰つたつて云ふぢやないか」

「馬鹿を云つちや不可い。そりや人達だ。肩車へ乗つた奴はちやんと知つてるが、僕ぢやない、あの猿だ」

叔父の辯解は寧ろ眞面目であつた。其眞面目な口から猿といふ言葉が突然出た時、みんなは一

度に笑つた。

「成程あの猿なら能く似合ふね。いくら英吉利人が大きいたつて、どうも君ぢや辻褄が合はな過ぎると思つたよ。——あの猿と來たら又随分矮小だから」

知つてゐながらわざと間違た振をして見せたのか、或は最初から事實を知らなかつたのか、とにかく吉川はやつと腑に落ちたらしい言葉遣ひをして、猶其當人の猿といふ渾名を、一座を賑はせる滑稽の餘音の如く繰り返した。夫人は半ば好奇的で、半ば戒飭的な態度を取つた。

「猿だなんて、一體誰の事を仰やるの」

「なにお前の知らない人だ」

「奥さん心配なさらないでも好ござんす。たとひ猿が此席にゐやうとも、我々は表裏なく彼を猿々と呼び得る人間なんだから、其代り向ふぢや私の事を豚々つて云つてるから、同なじ事です」

斯んな他愛もない會話が取り換はされてゐる間、お延は遂に社交上の一員として相當の分前を取る事が出来なかつた。自分を吉川夫人に賣り付ける機會は何時迄経つても來なかつた。夫人は彼女を眼中に置いてゐなかつた。或は寧ろ彼女を回避してゐた。さうして特に自分の一軒置いて

隣りに坐つてゐる繼子にばかり話しかけた。たとひ一分間でも此従妹を、注意の中心として、みんなの前に引き出さうとする努力の迹さへあり／＼と見えた。それを利用する事の出来ない繼子が、感謝とは反對に、却つて迷惑さうな表情を、遠慮なく外部に示すたびに、すぐ彼女と自分を比較したくなるお延の心には羨望の漣漪が立つた。

「自分もしあの従妹の地位に立つたなら」

會食中の彼女は屢ば斯う思つた。さうして其後から暗に人馴れない繼子を憐れんだ。最後には何といふ氣の毒な女だらうといふ輕侮の念が例もの通り起つた。

五十五

彼等の席を立つたのは、男達の燻らし始めた食後の葉巻に、白い灰が一寸近くも溜つた頃であつた。其時誰かの口から出た「もう何時だらう」といふきつかけが、偶然お延の位地に變化を與へた。立ち上る前の一瞬間を捉へた夫人は突然お延に話しかけた。

「延子さん。津田さんは何うなすつて」

いきなり斯う云つて置いて、お延の返事も待たずに、夫人はすぐ其後を自分で云ひ足した。

「先刻から伺はう／＼と思つてた癖に、つい自分の勝手な話ばかりして——」

此云譯をお延は腹の中で嘘らしいと考へた。それは相手の使ふ當座の言葉つきや態度から出た疑でなくつて、彼女に云はせると、もう少し深い根據のある推定であつた。彼女は食堂へ這入つて夫人に挨拶をした時、自分の使つた言葉を能く覚えてゐた。それは自分のためといふよりも、寧ろ自分の夫のために使つた言葉であつた。彼女は此夫人を見るや否や、恭しく頭を下げて、「毎度津田が御厄介になりました」と云つた。けれども夫人は其時其津田については一言も口を利かなかつた。自分が挨拶を交換した最後の同席者である以上、其所にはそれ文の口を利く餘裕が充分あつたにも關はらず、夫人は、すぐ餘所を向いてしまつた。さうして二三日前津田から受けた訪問などは、丸で忘れてゐるやうな風をした。

お延は夫人の此舉動を、自分が嫌はれてゐるからだと許解釋しなかつた。嫌はれてゐる上に、まだ何か理由があるに違ないと思つた。でなければ、いくら夫人でも、とくに津田の名前を回避するやうな素振を、彼の妻たるものに示す筈がないと思つた。彼女は自分の夫が此夫人の氣に入

つてゐるといふ事實を能く承知してゐた。然し單に夫を贖負にして呉れるといふ事が、何で其人を妻の前に談話の題目として憚られるのだらう。お延は解らなかつた。彼女が會食中、當然他に好かれべき女性としての自己の天分を、夫人の前に發揮するため、二人の間に存在する唯一の共通點とも見られる津田から出立しやうと試みて、遂に出立し得なかつたのも、一つは是が胸に痞へてゐたからであつた。それを愈席を立たうとする間際になつて、向ふから切り出された時のお延は、たゞ夫人の云譯に對してのみ、嘘らしいといふ疑を抱く丈では濟まなかつた。今頃になつて夫の病氣の見舞をいつてくれる夫人の心の中には、已を得ない社交上の辭令以外に、まだ何か存在してゐるのではなからうかと考へた。

「有難う御座います。お蔭さまで」

「もう手術をなすつたの」

「え、今日」

「今日？それであなただけ斯んな所へ來られましたね」

「大した病氣でも御座いませぬものですから」

「でも寐てゐらつしやるんでせう」

「寐ては居ります」

夫人はそれで構はないのかといふ様子をした。少なくとも彼女の黙つてゐる様子がお延にはさう見えた。他に對して男らしく無遠慮に振舞つてゐる夫人が、自分に丈は、丸で別な人間として出てくるのではないかと思はれた。

「病院へ御入りになつて」

「病院と申す程の所では御座いませぬが、丁度お醫者様の二階が空いて居るので、五六日其所へ置いて頂く事にして居ります」

夫人は醫者の名前と住所とを訊いた。見舞に行く積だとも何とも云はなかつたけれども、實はそのために、わざ／＼津田の話を持ち出したのぢやなからうかといふ氣のしたお延は、始めて夫人の意味が多少自分に呑み込めたやうな心持もした。

夫人と違つて最初から津田の事をあまり念頭に置いてゐなかつたらしい吉川は、此時始めて口を出した。

暗明

「當人に聞くと、去年から病氣を持ち越してゐるんだつてね。今の若さにさう病氣ばかりしちや仕方がない。休むのは五六日に限つた事もないんだから、癒る迄よく養生するやうに、さう云つて下さい」

お延は禮を云つた。

食堂を出た七人は、廊下で又二組に分れた。

五十六

残りの時間を叔母の家族とともに送つたお延には、それから何の波瀾も來なかつた。たゞ襦袢を着て横臥した寐卷姿の津田の面影が、熱心に舞臺を見詰めてゐる彼女の頭の中に、不意に出て來る事があつた。其面影は今迄讀み掛けてゐた本を伏せて、此所に坐つてゐる彼女を、遠くから眺めてゐるらしかつた。然しそれは、彼女が喜んで彼を見返さうとする刹那に、「いや疝違ひをしちや不可い、何をしてゐるか一寸覗いて見た丈だ。お前なんか用のある巳ぢやない」といふ意味を、眼付で知らせるものであつた。騙されたお延は何だ馬鹿らしいといふ氣になつた。する

と同時に津田の姿も幽靈のやうにすぐ消えた。二度目にはお延の方から「もう貴方のやうな方の事は考へて上げません」と云ひ渡した。三度目に津田の姿が眼に浮んだ時、彼女は舌打をしたくなつた。

食堂へ入る前の彼女は未だかつて夫の事を念頭に置いてゐなかつたので、お延に云はせると、斯ういふ不可抗な心の作用は、すべて夕飯後に起つた新しい經驗に外ならなかつた。彼女は黙つて前後二様の自分を比較して見た。さうして此急劇な變化の責任者として、胸のうちで、吉川夫人の名前を繰り返さない譯に行かなかつた。今夜もし夫人と同じ食卓で晚餐を共にしなかつたならば、こんな變な現象は決して自分に起らなかつたらうといふ氣が、彼女の頭の何處かでした。然し夫人の如何なる點が、此苦い酒を醸す醱酵分子となつて、何んな具合に彼女の頭のなかに入り込んだのかと訊かれると、彼女はとても判然とした返事を與へることが出來なかつた。彼女はたゞ不明瞭な材料をもつてゐた。さうして比較的明瞭な斷案に到着してゐた。材料に不足な掛念を抱かない彼女が、其斷案を不備として疑ふ筈はなかつた。彼女は總ての源因が吉川夫人にあるものと固く信じてゐた。

芝居が了ねて一旦茶屋へ引き上げる時、お延は其所で又夫人に會ふ事を恐れた。然し會つても少し突ツ込んで見たいやうな氣もした。歸りを急ぐ混雜した間に、そんな機會の來る筈もないと、始めから諦らめてゐる癖に、さうした好奇の心が、會ひたくないといふ回避の念の蔭から、ちよい／＼首を出した。

茶屋は幸にして異つてゐた。吉川夫婦の姿は何處にも見えなかつた。襟に毛皮の付いた重さうな二重廻しを引掛けたが岡本がコートに袖を通してゐるお延を顧みた。

「今日は宅へ來て泊つて行かないかね」

「え、有難う」

泊るとも泊らないとも片付かない挨拶をしたお延は、微笑しながら叔母を見た。叔母は又「貴方の氣樂さ加減にも呆れますね」といふ表情で叔父を見た。其所に氣が付かないのか、或は氣が付いても無頓着なのか、彼は同じ事を、前よりはもつと眞面目な調子で繰り返した。

「泊つて行くなら、泊つといでよ。遠慮は要らないから」

「泊つていけつたつて、貴方、宅にや下女がたつた一人で、此子の歸るのを待つてるんですも

の。そんな事無理ですわ」

「はあ、左右かね、成程。下女一人ぢや不用心だね」

そんなら止すが好からうと云つた風の様子をした叔父は、無論最初から何方でも構はないものを一寸問題にして見た丈であつた。

「あたし是でも津田へ行つてからまだ一晩も御厄介になつた事はなくつてよ」

「はあ、左右だつたかね。それは感心に品行方正の至だね」

「厭だ事。——由雄だつて外へ泊つた事なんか、まだ有やしないわ」

「いや結構ですよ。御夫婦お揃で、お堅くつてゐらつしやるのは——」

「何よりもつて恐悦至極」

先刻聞いた役者の言葉を、小さな聲で後へ付け足した繼子は、さう云つた後で、自分ながら其大膽さに呆れたやうに、薄赤くなつた。叔父はわざと大きな聲を出した。

「何ですつて」

繼子は極りが悪いので、聞こえない振をして、どん／＼門口の方へ歩いて行つた。みんなも其

後に隨いて表へ出た。

車へ乗る時、叔父はお延に云つた。

「お前宅へ泊れなければ、泊らないで可いから、其代り何時かお出よ、二三日中にね。少し訊きたい事があるんだから」

「あたしも叔父さんに伺はなくつちやならない事があるから、今日のお禮、旁是非上るわ。もしか都合が出来たら明日にでも伺つてよ、好くつて」

「オー、ライ」

四人の車は此英語を相圖に走け出した。

五十七

津田の宅と畧同じ方角に當る岡本の住居は、少し道程が遠いので、三人の後に隨いたお延の護謨輪は、小路へ曲る例の角迄一所に來る事が出来た。其所で別れる時、彼女は幌の中から、前に行く人達に聲を掛けた。けれどもそれが向ふへ通じたか通じないか分らないうちに、彼女の俤は

もう電車通りを横に切れてゐた。しんとした小路の中で、急に一種の淋しさが彼女の胸を打つた。今迄團體的に旋回してゐたものが、吾知らず調子を踏み外して、一人圈外に振り落された時のやうに、淡いながら頼りを失つた心持で、彼女は自分の宅の玄関を上つた。

下女は格子の音を聞いても出て來なかつた。茶の間には電燈が明るく輝やいてゐる文で、鐵瓶さへ何時ものやうに快い音を立てなかつた。今朝見たと何の變りもない室の中を、彼女は今朝と違つた眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い氣分を抱擁し始めた。その瞬間が過ぎて、たゞの淋しさが不安の念に變りかけた時、歡樂に疲れた身體を、長火鉢の前に投げ掛けやうとした彼女は、突然勝手口の方を向いて「時、時」と下女の名前を呼んだ。同時に勝手手の横に付いてゐる下女部の屋の戸を開けた。

二疊敷の眞中に縫物をひろげて、其上に他愛なく突ツ伏してゐたお時は、急に顔を上げた。さうしてお延を見るや否や、いきなり「はい」といふ返事を判然して立ち上つた。それと共に、針仕事のため、わざと低目にした電燈の笠へ、崩れかかつた束髪の頭を打つけたので、あらぬ方へ波をうつた電球が、猶の事彼女を狼狽させた。

お延は笑ひもしなかつた。叱る氣にもならなかつた。斯んな場合に自分ならといふ彼我が比較さへ胸に浮かばなかつた。今の彼女には寢ぼけたお時でさへ、其所にゐて呉れるのが頼母しかつた。

「早く玄關を締めてお寐。潜りの鏝はあたしが掛けて来たから」

下女を先へ寢かしたお延は、着物も着換へずに又火鉢の前へ坐つた。彼女は器械的に灰をほちくつて消えかゝつた火種に新しい炭を繼ぎ足した。さうして家庭としては缺くべからざる要件のごとくに、湯を沸かした。然し夜更に鳴る鐵瓶の音に、一人耳を澄ましてゐる彼女の胸に、何處からともなく逼つてくる孤獨の感が、先刻歸つた時よりも猶劇しく募つて来た。それが平生遅い夫の戻りを待ちあぐんで起す淋しみに比べると、遙かに程度が違ふので、お延は思はず病院に寐てゐる夫の姿を、懐かしさうに心の眼で眺めた。

「矢つ張りあなたが居らつしやらないからだ」

彼女は自分の頭の中に描き出した夫の姿に向つて斯う云つた。さうして明日は何を置いて、まづ病院へ見舞に行かなければならないと考へた。然し次の瞬間には、お延の胸がもうびたりと

夫の胸に食付いて居なかつた。二人の間に何だか挟まつてしまつた。此方で寄り添わうとすればする程、中間にある其邪魔ものが彼女の胸を突つついた。しかも夫は平氣で澄ましてゐた。半ば意地になつた彼女の方でも、そんなら宜しう御座いますといつて、夫に脊中を向けたくなかつた。斯ういふ立場迄来ると、彼女の空想は會釋なく吉川夫人の上に飛び移らなければならなかつた。芝居場で一度考へた通り、もし今夜あの夫人に會はなかつたなら、最愛の夫に對して、是程不愉快な感じを抱かずに済んだらうといふ氣ばかり強くした。

仕舞に彼女は何處かにゐる誰かに自分の心を訴へたくなつた。昨夜書きかけた里へ遣る手紙の續を書かうと思つて、筆を執りかけた彼女は、何時迄経つても、夫婦仲よく暮してゐるから安心して呉れといふ意味より外に、自分の思ひを卷紙の上に運ぶ事が出来なかつた。それは彼女が常に兩親に對して是非云ひたい言葉であつた。然し今夜は、何うしてもそれ丈では物足らない言葉であつた。自分の頭を纏める事に疲れ果た彼女は、とう／＼筆を投げ出した。着物も其所へ脱ぎ捨てた儘、彼女は遂に床へ入つた。長い間眼に映つた劇場の光景が、斷片的に幾通りもの強い色になつて、興奮した彼女の頭をちら／＼刺戟するので、彼女は焦らされる人のやうに、何時迄も

眠に落ちる事が出来なかつた。

五十八

彼女は枕の上で一時を聴いた。二時も聴いた。それから何時だか分らない朝の光で眼を覺ました。雨戸の隙間から射し込んで来る其光は、明らかに例もより寐過した事を彼女に物語つてゐた。彼女は其光で枕元に取り散らされた昨夕の衣裳を見た。上着と下着と長襦袢と重なり合つて、すぼりと脱ぎ捨てられたまゝ、疊の上に崩れてゐるので、其所には上下裏表の、しだらなく一度に入り亂れた色の塊りがある丈であつた。その色の塊りの下から、細長く折目の付いた端を出した金糸入りの檜扇模様の帯は、彼女の手の届く距離迄延びてゐた。

彼女は此亂雑な有様を、聊か呆れた眼で眺めた。是がかねてから、几帳面を女徳の一つと心掛けて来た自分の所作かと思ふと、少し淺間しいやうな心持にもなつた。津田に嫁いで以後、かつて斯んな不體裁を夫に見せた覺のない彼女は、其夫が今自分と同じ室の中に寐てゐないのを見て、ほつと一息した。

だらしのないのは着物の事ばかりではなかつた。もし夫が入院しないで、例もの通り宅にゐたならば、たとひ何んなに夜更しをしようとも、斯う遅く迄、氣を許して寐てゐる筈がないと思つた彼女は、眼が覺めると共に跳ね起きなかつた自分を、何うしても怠けものとして輕蔑しない譯に行かなかつた。

それでも彼女は容易に起き上らなかつた。昨夕の不首尾を償ふためか、自分の知らない間に起きて呉れたお時の足音が、先刻から臺所で聞こえるのを好い事にして、彼女は何時迄も肌觸りの暖かい夜具の中に包まれてゐた。

其内眼を開けた瞬間に感じた、濟まないといふ彼女の心持が段々弛んで来た。彼女はいくら女だつて、年に一度や二度此位の事をして差支なからうと考へ直すようになった。彼女の關節が樂々しだした。彼女は何時にない暢びりした氣分で、結婚後始めて經驗する事の出来た此自由を有難く味はつた。是も畢竟夫が留守のお蔭だと氣の付いた時、彼女は當分一人になつた今の自分を、寧ろ祝福したい位に思つた。さうして毎日夫と寐起を共にしてゐながら、つい心にも留めず、今日迄見過ごしてきた窮屈といふものが、彼女にとつて存外重い負擔であつたのに驚ろかされた。

暗明

然し偶發的に起つた此瞬間の覺醒は無論長く續かなかつた。一旦解放された自由の眼で、やきもきした昨夕の自分を嘲けるやうに眺めた彼女が床を離れた時は、もう既に違つた氣分に支配されてゐた。

彼女は主婦として何時も遣る通りの義務を遅いながら綺麗に片付けた。津田がゐないので、大分省ける手數を利用して、下女も煩はさずに、自分で自分の着物を疊んだ。それから軽い身仕舞をして、すぐ表へ出た彼女は、寄道もせず、通りから半丁程行つた所にある、新しい自動電話の箱の中に入つた。

彼女は其所で別々の電話を三人へ掛けた。其三人のうちで一番先に擇ばれたものは、やはり津田であつた。然し自分で電話口へ立つ事の出来ない横臥状態にある彼の消息は、間接に取次の口から聞くより外に仕方がなかつた。たゞ別に異状のある筈はないと思つてゐた彼女の豫期は外れなかつた。彼女は「順當で御座います、お變りは御座いませぬ」といふ保証の言葉を、看護婦らしい人の聲から聞いた後で、何の位津田が自分を待ち受けてゐるかを知るために、今日は見舞に行かなくつても可いかと尋ねて貰つた。すると津田が何故かと云つて看護婦に訊き返させた。夫

の聲も顔も分らないお延は、判断に苦しんで電話口で首を傾けた。こんな場合に、彼は是非來てくれと頼むやうな男ではなかつた。然し行かないと、機嫌を悪くする男であつた。それでは行けば喜ぶかといふと左右でもなかつた。彼はお延に親切の仕損をさせて置いて、それが女の義務ぢやないかといつた風に、取り澄ました顔をしなにと限らなかつた。不圖斯んな事を考へた彼女は、昨夕吉川夫人から受け取つたらしく自分では思つてゐる、夫に對する一種の感情を、つい電話口で洩らしてしまつた。

「今日は岡本へ行かなければならないから、其方へは参りませんつて云つて下さい」
それで病院の方を切つた彼女は、すぐ岡本へ掛け易へて、今に行つても可いかと聞き合せた。さうして最後に呼び出した津田の妹へは、彼の現状を一口報告的に通じた丈で、又宅へ歸つた。

五十九

お時の御給仕で朝食兼帯の午の膳に着くのも、お延にとつては、結婚以來始めての経験であつた。津田の不在から起る此變化が、女王らしい氣持を新らしく彼女に與へると共に、毎日の習慣

に反して貪り得た此自由が、何時もよりは却つて彼女を囚へた。身體の悠くりした割合に、心の落付けなかつた彼女は、お時に向つて云つた。

「旦那様が居らつしやらないと何だか變ね」

「へえ、御淋しう御座います」

お延はまだ云ひ足りなかつた。

「こんな寐坊をしたのは始めてね」

「え、其代り何時でもお早いんだから、偶には朝とお午と一所でも、宜しう御座いませう」

「旦那様が居らつしやらないと、すぐあの通りだなんて、思やしなくつて」

「誰がで御座います」

「お前がさ」

「飛んでもない」

お時のわざとらしい大きな聲は、下手な話し相手よりも非道くお延の趣味に應へた。彼女はすく黙つてしまつた。

三十分ほど経つて、お時の沓脱に揃へた餘所行の下駄を穿いて又表へ出る時、お延は玄關迄送つて来た彼女を顧みた。

「よく氣を付けてお呉れよ。昨夕見たいに寐てしまふと、不用心だからね」

「今夜も遅く御歸りになるんで御座いますか」

お延は何時歸るか丸で考へてゐなかつた。

「あんなに遅くはならない積だがね」

たまさかの夫の留守に、ゆつくり岡本で遊んで來たいやうな氣が、お延の胸の何處かでした。

「成るだけ早く歸つて來て上るよ」

斯う云ひ捨て、通りへ出た彼女の足は、すぐ約束の方角へ向つた。

岡本の住居は藤井の家と畧同じ見當にあるので、途中迄は例の川沿の電車を利用する事が出来た。終點から一つか二つ手前の停留所で下りたお延は、其所に掛け渡した小さい木の橋を横切つて、向ふ側の通りを少し歩いた。其通りは二三日前の晩、酒場を出た津田と小林とが、二人の境遇や性格の差違から來る纏れ合つた感情を互に抱きながら、朝鮮行きだの、お金さんだのを問題

にして歩いた往來であつた。それを津田の口から聞かされてゐなかつた彼女は、二人の様子を想像する迄もなく、彼等とは反對の方角に無心で足を運ばせた後で、叔父の宅へ行くには是非共上らなければならぬ細長い坂へ掛かつた。すると偶然向ふから來た繼子に言葉をかけられた。

「昨日は」

「何處へ行くの」

「お稽古」

去年女學校を卒業した此從妹は、餘暇に任せて色々なものを習つてゐた。ピアノだの、茶だの、花だの、水彩畫だの、料理だの、何へでも手を出したがる其人の癖を知つてゐるので、お稽古といふ言葉を聞いた時、お延は、つい笑ひたくなつた。

「何のお稽古？ トーダンス？」

彼等は斯んな樂屋落の笑談をいふ程親しい間柄であつた。然しお延から見れば、自分より餘裕のある相手の境遇に對して、多少の皮肉を意味しないとも限らない此笑談が、肝心の當人には、一向諷刺としての音響を傳へずに濟むらしかつた。

「まさか」

彼女はたゞ斯う云つて機嫌よく笑つた。さうして彼女の笑は、如何に鋭敏なお延でも、無邪氣其物だと許さない譯に行かなかつた。けれども彼女は遂に何處へ何の稽古に行くかをお延に告げなかつた。

「冷かすから厭よ」

「又何か始めたの」

「何うせ慾張だから何を始めるか分らないわ」

稽古事の上で、繼子が慾張といふ異名を取つてゐる事も、彼女の宅では隠れない事實であつた。最初妹から付けられて、忽ち家族のうちに傳播した此惡口は、近頃彼女自身によつて平氣に使用されてゐた。

「待つてゐらつしやい。ちぎ歸つて來るから」

軽い足でさつさと坂を下りて行く繼子の後姿を一度振り返つて見たお延の胸に、又尊敬と輕侮とを搗き交ぜた其人に對する何時もの感じが起つた。

岡本の邸宅へ着いた時、お延は又偶然叔父の姿を玄關前に見出した。羽織も着ずに、兵児帯をだらりと下げて、其結び目の所に、後へ廻した両手を重ねた彼は、傍で鋏を動かしてゐる植木屋としきりに何か話をしてゐたが、お延を見るや否や、すぐ向ふから聲を掛けた。

「来たね。今庭いぢりを遣つてる所だ」

植木屋の横には、大きな通草の蔓が巻いた儘、地面の上に投げ出されてあつた。

「そいつを今その庭の入口の門の上へ這はせようといふんだ。一寸好いだらう」

お延は網代組の竹垣の中程にある其茅門を支へてゐる鉾なぐりの柱と丸太の桁を見較べた。

「へえ。あの袖垣の所にあつたのを抜いて来たの」

「うん其代り彼所へは玉縁をつけた目關垣を拵へたよ」

近頃身體に暇が出来て、自分の意匠通り住居を新築した此叔父の建築に關する單語は、何時の間にか急に殖えてゐた。言葉を聞いた丈ではとても解らない其目關垣といふものを、お延はたゞ

「へえ」と云つて應答つてゐるより外に仕方がなかつた。

「食後の運動には好いわね。お腹が空いて」

「笑談ぢやない、叔父さんはまだ午飯前なんだ」

お延を引張つて、わざ／＼庭先から座敷へ上つた叔父は「住、住」と大きな聲で叔母を呼んだ。

「腹が減つて仕方がない、早く飯にして呉れ」

「だから先刻みんなと一所に召上がれば好いのに」

「所が、さう勝手元の御都合の可いやうに許は參らんです、世の中といふものはね。第一物に區切のあるといふ事をあなたは御承知ですか」

自業自得な夫に對する叔母の態度が澄ましたものであると共に、叔父の挨拶も相變らずであつた。久し振で故郷の空氣を吸つたやうな感じのしたお延は、心のうちで自分の目の前にお此一對の老夫婦と、結婚してからまだ一年と経たない、云はば新生活の門出にある彼等二人とを比較して見なければならなかつた。自分達も長の月日さへ踏んで行けば、斯うなるのが順當なのだらうか、又はいくら永く一所に暮らした所で、性格が違へば、互ひの立場も未始終迄變つて行かな

ければならないのか、年の若いお延には、それが智慧と想像で解けない一種の疑問であつた。お延は今の津田に満足してはゐなかつた。然し未來の自分も、此叔母のやうに膏氣が抜けて行くだらうとは考へられなかつた。もしそれが自分の未來に横はる必然の運命だとすれば、何時迄も現在の光澤を持ち續けて行かうとする彼女は、何時か一度悲しい此打撃を受けなければならなかつた。女らしい所がなくなつて仕舞つたのに、まだ女として此世の中に生存するのは、眞に恐ろしい生存であるとしか若い彼女には見えなかつた。

そんな距離の遠い感想が、此若い細君の胸に湧いてゐるとは夢にも氣の付きやう筈のない叔父は、自分の前に据ゑられた膳に向つて胡坐を搔きながら、彼女を見た。

「おい何をぼんやりしてゐるんだ。しきりに考へ込んでゐるぢやないか」

お延はすぐ答へた。

「久し振にお給仕でもしませう」

飯櫃が生憎其所にないので、彼女が座を立ちかけると叔母が呼び留めた。

「御給仕をしたくつたつて、麵麩だから出来ないよ」

下女が皿の上に狐色に焦げたトーストを持つて來た。

「お延、叔父さんは情けない事になつちまつたよ。日本に生れて米の飯が食へないんだから可

哀想だらう」

糖尿病の叔父は既定の分量以外に澱粉質を攝取する事を主治醫から嚴禁されてしまつたのである。

「斯うして豆腐ばかり食つてゐるんだがね」

叔父の膳には到底一人では平らげ切れない程の白い豆腐が生の儘で供へられた。

むく／＼と肥え太つた叔父の、わざとする情なさうな顔を見たお延は、大して氣の毒にならない許か、却つて笑ひたくなつた。

「少しや斷食でもした方が可いんでせう。叔父さんみたいに肥つて生きてるのは、誰だつて苦

痛に違ないから」

叔父は叔母を顧みた。

「お延は元から悪口やだつたが、嫁に行つてから一層達者になつたやうだね」

小さいうちから彼の世話になつて成長したお延は、色々の角度で出沒する此叔父の特色を他人より能く承知してゐた。

肥つた身體に釣り合はない神經質の彼には、時々自分の室に入つたぎり、半日位黙つて口を利かずにゐる癖がある代りに、他の顔さへ見ると、また何かしら喋舌らないでは片時も居られないといつた氣作な風があつた。それが元氣の遣り場所に困るからといふよりも、成るべく相手を不愉快にしたくないといふ對人的な想ひ遣や、又は客を前に置いて、唯のつそつしてゐる自分の手持無沙汰を避けるためから起る場合が多いので、用件以外の彼の談話には、彼の平生の心掛から來る一種の興味的中心があつた。彼の成効に少なからぬ貢獻をもたらしたらしく思はれる、社交上極めて有利な彼のこの話術は、其所有者の天から稟けた諧謔趣味のために、一層派出な光彩を放つ事が屢あつた。さうして夫が子供の時分から彼の傍にゐたお延の口には、何時の間にか乗り移つてしまつた。機嫌のいゝ時に、彼を向ふへ廻して輕口の吐き競をやる位は、今の彼女に取つて

何の努力も要らない第二の天性のやうなものであつた。然し津田に嫁いでからの彼女は、嫁ぐとすぐに此態度を改めた。所が最初慎みのために控えた悪口は、二ヶ月経つても、三ヶ月経つても中々出て來なかつた。彼女は遂に此點に於て、岡本に居た時の自分とは別個の人間になつて、彼女の夫に對しなければならなくなつた。彼女は物足らなかつた。同時に夫を欺むいてゐるやうな氣がしてならなかつた。偶に來て、故に變らない叔父の様子を見ると、其所に昔の自由を憶ひ出させる或物があつた。彼女は生豆腐を前に、胡坐を搔いてゐる剽輕な彼の顔を、過去の記念のやうに懐かし氣に眺めた。

「だつてあたしの悪口は叔父さんのお仕込ぢやないの。津田に教はつた覺なんか、ありやしないわ」

「ふん、左右でもあるめえ」

わざと江戸つ子を使つた叔父は、さういふ種類の言葉を、一切家庭に入れてはならないもの如くに忌み嫌ふ叔母の方を見た。傍から注意すると猶面白がつて使ひたがる癖を能く知つてゐるので、叔母は素知らぬ顔をして取り合はなかつた。すると目標が外れた人のやうに叔父は又お延

に向つた。

「一體由雄さんはそんなに厳格な人かね」

お延は返事をしすに、唯にや／＼してゐた。

「は、あ、笑つてる所を見ると、矢つ張嬉しいんだな」

「何がよ」

「何がよつて、そんなに白ばつくれなくつても、分つてゐらあな。——だが本當に由雄さんはそんなに厳格な人かい」

「何うだかあたし能く解らないわ。何故またそんな事を眞面目腐つてお訊きになるの」

「少し此方にも料簡があるんだ、返答次第では」

「お、怖い事。ぢや云つちまうわ。由雄は御察しの通り厳格な人よ。それが何うしたの」

「本當にかい」

「え、随分叔父さんも苦悩いのね」

「ぢや此方でも簡潔に結論を云つちまう。果して由雄さんが、お前のいふ通り厳格な人ならば

だ。到底悪口の達者なお前には向かないね」

斯う云ひながら叔父は、其所に黙つて坐つてゐる叔母の方を、領でしやくつて見せた。

「此叔母さんなら、丁度お誂らへ向かも知れないがね」

淋しい心持が遠くから來た風のやうに、不意にお延の胸を撫でた。彼女は急に悲しい氣分に囚へられた自分を見て驚ろいた。

「叔父さんは何時でも氣樂さうで結構ね」

津田と自分とを、好過ぎる程仲の好い夫婦と假定してかゝつた、調戲半分の叔父の笑談を、たゞ座興から來た出鱈目として笑つてしまふには、お延の心にあまり隙があり過ぎた。と云つて、其隙を飽く迄取り繕ろつて、他人の前に、何一つ不足のない夫を持つた妻としての自分を示さなければならぬとのみ考へてゐる彼女は、心に感じた通りの何物をも叔父の前に露出する自由を有つてゐなかつた。もう少しで涙が眼の中に溜まらうとした所を、彼女は瞬きで胡麻化した。

「いくらお誂らへ向でも、斯う年を取つちや仕方がない。ねえお延」

年の割に何處へ行つても若く見られる叔母が、斯う云つて水々した光澤のある眼をお延の方に

向けた時、お延は何にも云はなかつた。けれども自分の感情を隠すために、第一の機會を利用する事は忘れなかつた。彼女はたゞ面白さうに聲を出して笑つた。

六十二

親身の叔母よりも却つて義理の叔父の方を、心の中で好いてゐたお延は、其報酬として、自分も此叔父から特別に可愛がられてゐるといふ信念を常に有つてゐた。洒落でありながら神經質に生れ付いた彼の氣合を能く呑み込んで、その両面に行き渡つた自分の行動を、寸分違はず叔父の思ひ通りに樂々と運んで行く彼女には、何時でも年齢の若さから来る柔軟性が伴つてゐたので、殆んど苦痛といふものなしに、叔父を喜ばし、又自分に満足と與へる事が出来た。叔父が鑑賞の眼を向けて、常に彼女の所作を眺めてゐて呉れるやうに考へた彼女は、時とすると、變化に乏しい叔母の骨は何うしてあんなに堅いのだらうと怪しむ事さへあつた。

如何にして異性を取り扱ふべきかの修養を、斯うして叔父からばかり學んだ彼女は、何處へ嫁に行つても、それを其儘夫に應用すれば成効するに違ないと信じてゐた。津田と一所になつた時、

始めて少し勝手の違ふやうな感じのした彼女は、此生れて始めての經驗を、成程といふ眼付で眺めた。彼女の努力は、新しい夫を叔父のやうな人間に熟しつけるか、又は既に出来上つた自分の方を、新しい夫に合ふやうに改造するか、何方かにしなければならぬ場合によく出合つた。彼女の愛は津田の上にあつた。然し彼女の同情は寧ろ叔父型の人間に注がれた。斯んな時に、叔父なら嬉しがつて呉れるものと思ふ事がしばしば出て來た。すると自然の勢ひが彼女にそれを逐一叔父に話してしまへと命令した。其命令に背くほど意地の強い彼女は、今迄何うか斯うか我慢して通して來たものを、今更告白する氣には到底なれなかつた。

斯うして叔父夫婦を欺むいてきたお延には、叔父夫婦がまた何の掛念もなく彼女のために騙されてゐるといふ自信があつた。同時に敏感な彼女は、叔父の方でも亦彼女に打ち明けたくつて、しかも打ち明けれられない、津田に對する、自分のと同程度位なある祕密を有つてゐるといふ事を能く承知してゐた。有體に見透した叔父の腹の中を、お延に云はせると、彼は決して彼女に大切な夫としての津田を好いてゐなかつたのである。それが二人の間に横はる氣質の相違から來る事は、たとひ二人を比較して見た上でなくても、あまり想像に困難のかゝらない假定であつた。少

くとも結婚後のお延はちき其所に気が付いた。然し彼女はまだ其上に材料を有つてゐた。粗放のやうで一面に緻密な、無頓着のやうで同時に鋭敏な、口先は冷淡でも腹の中には親切氣のある此叔父は、最初會見の當時から、既に直觀的に津田を嫌つてゐたらしかつた。「お前はあゝいふ人が好きなのかね」と訊かれた裏側に、「ぢや己のやうなもの嫌だつたんだね」といふ言葉が、ともに響いたらしく感じた時、お延は思はずはつとした。然し「叔父さんの御意見は」と此方から問ひ返した時の彼は、もう其氣下味い關を通り越してゐた。

「お出よ、お前さへ行く氣なら、誰にも遠慮は要らないから」と親切に云つて呉れた。

お延の材料はまだ一つ残つてゐた。自分に對して何にも云はなかつた叔父の、津田に關するもつと露骨な批評を、彼女は叔母の口を通して聞く事が出来たのである。

「あの男は日本中の女がみんな自分に惚れなくつちやならないやうな顔付をしてゐるぢやないか」

不思議にも此言葉はお延にとつて意外でも何でもなかつた。彼女には自分が津田を精一杯愛し得るといふ信念があつた。同時に、津田から精一杯愛され得るといふ期待も安心もあつた。又叔

父の例の悪口が始まつたといふ氣が何より先に起つたので、彼女は聲を出して笑つた。さうして、此悪口はつまり嫉妬から來たのだと一人腹の中で解釋して得意になつた。叔母も「自分の若い時の己惚は、もう忘れてゐるんだからね」と云つて、彼女に相槌を打つて呉れた。……

叔父の前に坐つたお延は自分の後にある斯んな過去を憶ひ出さない譯に行かなかつた。すると「嚴格」な津田の妻として、自分が向くとか向かないとかいふ下らない彼の笑談のうちに、何か眞面目な意味があるのでなからうかといふ氣さへ起つた。

「己の云つた通りぢやないかね。なければ仕合せだ。然し萬一何かあるなら、又今ないにした所で、是から先ひよつと出て來たなら遠慮なく打ち明けなけりや不可いよ」

お延は叔父の眼の中に、斯うした慈愛の言葉さへ讀んだ。

六十三

暗明

感傷的の氣分を笑に紛らした彼女は、その苦痛から逃れるために、すぐ自分の持つて來た話題を叔父叔母の前に切り出した。

「昨日の事は全體何ういふ意味なの」
彼女は約束通り叔父に説明を求めなければならなかつた。すると返答を與へる筈の叔父が却つて彼女に反問した。

「お前は何う思ふ」

特に「お前」といふ言葉に力を入れた叔父は、お延の腹でも讀むやうな眼遣ひをして彼女を凝と見た。

「解らないわ。藪から棒にそんな事訊いたつて。ねえ叔母さん」

叔母はにやりと笑つた。

「叔父さんはね、あたしの様な空疎ものには解らないが、お延になら屹度解る。あいつは貴様より氣が利いてるからつて仰やるんだよ」

お延は苦笑するより外に仕方なかつた。彼女の頭には無論臆氣ながらある臆測があつた。けれども強ひられないのに、俐巧振つてそれを口外する程、彼女の教育は蓮葉でなかつた。

「あたしにだつて解りつこないわ」

「まあ中て、御覽。大抵見當は付くだらう」

何うしてもお延の方から先に何か云はせようとする叔父の氣色を見て取つた彼女は、二三度押問答の末、とう／＼推察の通りを云つた。

「見合ぢやなくつて」

「何うして。——お前には左右見えるかね」

お延の推測を首肯ふ前に、彼女の叔父から受けた反問が夫から夫へと續いた。仕舞に彼は大きな聲を出して笑つた。

「中つた、中つた。矢張りお前の方が住より俐巧だね」

斯んな事で、二人の間に優劣を付ける氣樂な叔父を、お住とお延が馬鹿にして冷評した。

「ねえ、叔母さんだつて其位の事なら大抵見當が付くわね」

「お前も御賞にあづかつたつて、あんまり嬉しくないだらう」

「え、些とも有難かないわ」

お延の頭に、一座を切り舞はした吉川夫人の斡旋振が又描き出された。

「何うもあたし左右だらうと思つたの。あの奥さんが始終繼子さんと、それからあの三好さんて方を、引き立てよう、引き立てようとして、骨を折つてゐらつしやるんですもの」

「所があの繼子と來たら、又引き立たない事夥しいんだからな。引き立てようとするれば、却つて引き下がる丈で、丸で紙袋を被つた猫見たいだね。其所へ行くと、お延のやうなのは何うしても得だよ。少くとも當世向だ」

「厭にしやあゝしてゐるからでせう。何だか賞められてるんだか、悪く云はれてるんだか分らないわね。あたし繼子さんのやうな大人しい人を見ると、何うかしてあんなになりたいと思ふわ」

斯う答へたお延は、叔父の所謂當世向を發揮する餘地の自分に興へられなかつた、従つて自分から見れば寧ろ不成効に終つた、昨夕の會合を、不愉快と不満足の眼で眺めた。

「何で又あたしがあの席に必要だつたの」

「お前は繼子の從姉ぢやないか」

たゞ親類だからといふのが唯一の理由だとすれば、お延の外にも出席しなければならぬ人が

まだ澤山あつた。其上相手の方では當人がたつた一人出て來た丈で、紹介者の吉川夫婦を除くと、向ふを代表するものは誰もゐなかつた。

「何だか變ぢやないの。さうすると若し津田が病氣でなかつたら、やつぱり親類として是非出席しなければ悪い譯になるのね」

「それや又別口だ。外に意味があるんだ」

叔父の目的中には、昨夕の機會を利用して、津田とお延を、一度でも餘計吉川夫妻に接近させて遣らうといふ好意が含まれてゐたのである。それを叔父の口から判切聽かされた時、お延は頃自分が考へてゐる通りの叔父の氣性が其所に現はれてゐるやうに思つて、暗に彼の親切を感謝すると共に、そんなら何故あの吉川夫人ともつと親しくなれるやうに仕向けて呉れなかつたのかと恨んだ。二人を近づけるために同じ食卓に坐らせたには坐らせたが、結果は却つて近づけない前より悪くなるかも知れないといふ特殊な心理を、叔父は丸で承知してゐないらしかつた。お延はいくら行き届いても男はやつぱり男だと批評したくなつた。然し其後から、吉川夫人と自分の間に横はる一種微妙な關係を知らない以上は、誰が出て來ても畢竟何うする事も出來ないのだ

から仕方がないといふ、嘆息を交へた寛恕の念も起つて來た。

六十四

お延はその問題を其所へ放り出した儘、まだ自分の腑に落ちずに残つてゐる要點を片付けようとした。

「成程さういふ意味合だつたの。あたし叔父さんに感謝しなくつちやならないわね。けどまだ外に何かあるんでせう」

「あるかも知れないが、假令ないにした所で、單にそれ丈でも、あゝしてお前を呼ぶ價値は充分あるだらう」

「えゝ、有るには有るわ」

お延は斯う答へなければならなかつた。然しそれにしては勧誘の仕方が少し猛烈過ぎると腹の中と思つた。叔父は果して最後の一物を胸に藏ひ込んでゐた。

「實はお前にお婿さんの眼利をして貰はうと思つたのさ。お前は能く人を見抜く力を有つてる

から相談するんだが、何うだらう彼の男は。お繼の未來の夫として可いだらうか悪いだらうか」

叔父の平生から推して、お延は何處迄が眞面目な相談なのか、一寸判断に迷つた。

「まあ大變な御役目を承はつたのね。光榮の至りだ事」

斯う云ひながら、笑つて自分の横にゐる叔母を見たが、叔母の様子が案外沈着なので、彼女はすぐ調子を抑えた。

「あたしの様なものが眼利をするなんて、少し生意氣よ。それにたゞ一時間位あゝして一所に坐つてゐた丈ぢや、誰だつて解りつこないわ。千里眼でもなくつちや」

「いやお前には一寸千里眼らしい所があるよ。だから皆なが訊きたがるんだよ」

「冷評しちや厭よ」

お延はわざと叔父を相手にしない振をした。然し腹の中では自分に媚びる一種の快感を味はつた。それは自分が實際他に左右思はれてゐるらしいといふ把握から來る得意に外ならなかつた。

けれどもそれは同時に彼女を失意にする觀面の事實で破壊されべき性質のものであつた。彼女は反對に近い例証としてその裏面にすぐ自分の夫を思ひ浮べなければならなかつた。結婚前千里眼

以上に彼の性質を見抜き得たとばかり考へてゐた彼女の自信は、結婚後今日に至る迄の間に、明らかかな太陽に黒い斑點の出来るやうに、思ひ違ひ疝違の痕迹で、既に其所此所汚れてゐた。畢竟夫に對する自分の直覺は、長い月日の經驗によつて、訂正されべく、補修されべきものかも知れないといふ心細い眞理に、漸く頭を下げ掛けてゐた彼女は、叔父に煽られてすぐ圖に乗る程若くもなかつた。

「人間はよく交際つて見なければ實際解らないものよ、叔父さん」

「其位な事は御前に教はらないだつて、誰だつて知つてらあ」

「だからよ。一度會つた位で何にも云へる譯がないつていふのよ」

「そりや男の云ひ草だらう。女は一眼見ても、すぐ何かいふぢやないか。又よく旨い事を云ふぢやないか。それを云つて御覽といふのさ、たゞ叔父さんの參考迄に。何にもお前に責任なんか持たせやしないから大丈夫だよ」

「だつて無理ですもの。そんな豫言者見たいな事。ねえ叔母さん」

叔母は何時ものやうにお延に加勢しなかつた。さればと云つて、叔父の味方にもならなかつた。

彼女の豫言を強ひる氣色を見せない代りに、叔父の悪強ひも留めなかつた。始めて嫁にやる可愛い長女の未來の夫に關する批判の材料なら、それが何んなに輕からうと、耳を傾むける値打は充分あるといつた風も見えた。お延は當り障りのない事を一口二口云つて置くより外に仕方がなかつた。

「立派な方ぢやありませんか。さうして若い割に大變落ち付いてゐらつしやるのね。……」

其後を待つてゐた叔父は、お延が何にも云はないので、又催促するやうに訊いた。

「それつ切かね」

「だつて、あたし彼の方の一軒置いてお隣へ坐らせられて、碌々お顔も拜見しなかつたんですもの」

「豫言者をそんな所へ坐らせるのは悪かつたかも知れないがね。——何かありさうなものぢやないか、そんな平凡な觀察でなしに、もつとお前の特色を發揮するやうな、たゞ一言で、すばりと向ふの急所へ中たるやうな……」

「六づかしいのね。——何しろ一度位ぢや駄目よ」

「然し一度丈で何か云はなければならぬ必要があるとしたら何うだい。何か云へるだらう」

「云へないわ」

「云へない？ちやお前の直覺は近頃もう役に立たなくなつたんだね」

「え、お嫁に行つてから、段々直覺が擦り減らされて仕舞つたの。近頃は直覺ぢやなくつて鈍覺丈よ」

六十五

口先で斯んな押問答を長たらしく繰り返してゐたお延の頭の中には、又別の考へが絶えず並行して流れてゐた。

彼女は夫婦和合の適例として、叔父から認められてゐる津田と自分を疑はなかつた。けれども初対面の時から津田を好いて呉れなかつた叔父が、其後彼の好悪を改める筈がないといふ事も能く承知してゐた。だから睦しき津田と自分を、彼は始終不思議な眼で、眺めてゐるに違ないと思つてゐた。それを他の言葉で云ひ換へると、何うしてお延のやうな女が、津田を愛し得る

のだらうといふ疑問の裏に、叔父は何時でも、彼自身の先見に對する自信を持ち續けてゐた。人間を見損なつたのは、自分でなくて、却つてお延なのだといふ断定が、時機を待つて外部に揺曳するために、彼の心の下層にいつも沈澱してゐるしかつた。

「それなのに叔父は何故三好に對する自分の評を、こんなに執濃く聽かうとするのだらう」

お延は解しかねた。既に自分の夫を見損なつたものとして、暗に叔父から目指されてゐるらしい彼女に、其自覺を差し置いて、おいそれと彼の要求に應ずる勇氣はなかつた。仕方がないので、彼女は仕舞に黙つてしまつた。然し年來遠慮のなさ過ぎる彼女を見慣れて來た叔父から見ると、此際彼女の沈黙は、不思議に近い現象に外ならなかつた。彼はお延を措いて叔母の方を向いた。

「この子は嫁に行つてから、少し人間が變つて來たやうだね。大分臆病になつた。それもやつぱり旦那様の感化かな。不思議なもんだな」

「貴方があんまり苛めるからですよ。さあ云へ、さあ云へつて、責めるやうに催促されちゃ、

誰だつて困りますよ」

叔母の態度は、叔父を窘めるよりも寧ろお延を庇護ふ方に傾いてゐた。然しそれを嬉しがりに

は、彼女の胸が、あまり自分の感想で、一杯になり過ぎてゐた。

「だけど是や第一が繼子さんの問題ぢやなくつて。繼子さんの考へ一つで極まる丈だとあたし思ふわ、あたしなんかが餘計な口を出さないだつて」

お延は自分で自分の夫を擇んだ當時の事を憶ひ起さない譯に行かなかつた。津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。さうして其許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。自分の料簡を餘所にして、他人の考へなどを頼りたがつた覺はいまだ嘗てなかつた。

「一體繼子さんは何と仰しやるの」

「何とも云はないよ。あいつはお前より猶臆病だからね」

「肝心の當人がそれぢや、仕方がないぢやありませんか」

「うん、あゝ臆病ぢや實際仕方がない」

「臆病ぢやないのよ、大人しいのよ」

「何方にしたつて仕方がない、何にも云はないんだから。或は何にも云へないのかも知れないね、種がなくつて」

さういふ二人が漫然として結び付いた時に、夫婦らしい關係が、果して兩者の間に成立し得るものかといふのが、お延の胸に横はる深い疑問であつた。「自分の結婚ですら斯うだのに」といふ論理がすぐ彼女の頭に閃めいた。「自分の結婚だつて畢竟は似たり寄つたりなんだから」といふ風に、此場合を眺める事の出来なかつた彼女は、一直線に自分の眼を付けた方ばかり見た。馬鹿らしいよりも恐ろしい氣になつた。なんといふ氣樂な人だらうとも思つた。

「叔父さん」と呼び掛けた彼女は、呆れたやうに細い眼を強く張つて彼を見た。

「駄目だよ。あいつは初めつから何にも云ふ氣がないんだから。元來はそれでお前に立ち合つて貰つたやうな譯なんだ、實を云ふとね」

「だつてあたしが立ち合へば何うするの」

「兎に角繼が是非さうして呉れつて己達に頼んだんだ。つまりあいつは自分よりお前の方を餘つ程伶俐だと思つてるんだ。さうしてたとひ自分は解らなくつても、お前なら後から色々云つて

呉れる事があるに違ないと思ひ込んでゐるんだ」

「ぢや最初からさう仰しやれば、あたしだつて其氣で行くの」

「所が又それは厭だといふんだ。是非黙つて、呉れといふんだ」

「何故でせう」

お延は一寸叔母の方を向いた。「極りが悪いからだよ」と答へる叔母を、叔父は遮つた。

「なに極りが悪いばかりぢやない。成心があつちや、好い批評が出来ないといふのが、あいつの主意なんだ。つまりお延の公平に得た第一印象を聞かして貰ひたいといふんだらう」

お延は初めて叔父に強ひられる意味を理解した。

六十六

お延から見た見た継子は特殊の地位を占めてゐた。此方の利害を心に掛けて呉れるといふ點に於て、彼女は叔母に及ばなかつた。自分と氣が合ふといふ意味では叔父よりもずつと縁が遠かつた。其の代り血統上の親和力や、異性に基く牽引性以外に、年齢の相似から來る有利な接觸面を有つてゐ

た。

若い女の心を共通に動かす色々な問題の前に立つて、興味に充ちた眼を見張る時、自然の勢として、彼女は叔父よりも叔母よりも、継子に近づかなければならなかつた。さうして其場合に於ける彼女は、天分から云つて、いつでも継子の優者であつた。經驗から推せば、勿論継子の先輩に違なかつた。少なくとも左右いふ人として、継子から一段上に見られてゐるといふ事を、彼女は能く承知してゐた。

此小さな嘆美者には、お延のいふ凡てを何でも眞に受ける癖があつた。お延の自覺から云へば、一つ家に寐起を共にしてゐる長い間に、自分の優越を示す浮誇の心から、柔軟性に富んだ此従妹を、何時の間にかさう育て上げてしまつたのである。

「女は一目見て男を見抜かなければ不可い」

彼女はかつて斯んな事を云つて、無邪氣な継子を驚ろかせた。彼女は又充分それを遣り終せるだけの活きた眼力を自分に具へてゐるものとして継子に對した。さうして相手の驚きが、羨みから嘆賞に變つて、仕舞に崇拜の間際迄近づいた時、偶然彼女の自信を實現すべき、津田と彼女と

の間に起つた相思の戀愛事件が、恰も神祕の謎の如く、繼子の前に燃え上つた。彼女の言葉は繼子にとつて遂に永久の眞理其物になつた。一般の世間に向つて得意であつた彼女は、とくに繼子に向つて得意でなければならなかつた。

お延の見た通りの津田が、すぐ繼子に傳へられた。日常接觸の機會を自分自身に有つてゐない繼子は、わが眼わが耳の範圍外に食み出してゐる未知の部分、すべて彼女から興へられた間接の知識で補なつて、容易に津田といふ理想的な全體を造り上げた。

結婚後半年以上を經過した今のお延の津田に對する考へは變つてゐた。けれども繼子の彼に對する考へは毫も變らなかつた。彼女は飽く迄もお延を信じてゐた。お延も今更前言を取り消すやうな女ではなかつた。何處迄も先見の明によつて、天の幸福を享ける事の出來た少數の果報者として、繼子の前に自分を標榜してゐた。

過去から持ち越した斯ういふ二人の關係を、餘儀なく記憶の舞台に躍らせて、此事件の前に坐らなければならなくなつたお延は、辛いよりも寧ろ快よくなかつた。それはみんなが寄つてたかつて、今迄糊塗して來た自分の弱點を、早く自白しろと間接に責めるやうに思へたからである。

此方の「我」以上に相手が意地の悪い事をするやうに見えたからである。

「自分の過失に對しては、自分が苦しみさへすれば夫で澤山だ」

彼女の腹の中には、平生から貯藏してある斯ういふ辯解があつた。けれどもそれは何事も知らない叔父や叔母や繼子に向つて叩き付ける事の出來ないものであつた。もし叩き付けるとすれば、彼等三人を無心に使喚して、自分に當擦りを遣らせる天に向つてするより外に仕方がなかつた。

膳を引かせて、叔母の新らしく淹れて來た茶をがぶく飲み始めた叔父は、お延の心にこんな交み入つた蟠まりが蜿蜒つてゐやうと思ふ筈がなかつた。造りたての平庭を見渡しながら、晴々した顔付きで、叔母と二言三言、自分の考案になつた樹や石の配置に就いて批評しあつた。

「來年はあの松の横の所へ楓を一本植ゑようと思ふんだ。何だか此所から見ると、あすこ丈穴が開いてるやうで可笑いからね」

お延は何の氣なしに叔父の指してゐる見當を見た。隣家と地續きになつてゐる塀際の土をわざと高く盛り上げて、其所へ小さな孟宗藪をこんもり繁らした根の邊が、叔父のいふ通り疎らに隙いてゐた。先刻から問題を變へよう變へようと思つて、暗に機會を待つてゐた彼女は、すぐ氣轉

を利かした。

「本當ね。彼所を塞がないと、さも／＼藪を拵へましたつて云ふやうで變ね」

談話は彼女の豫期した通り餘所の溝へ流れ込んだ。然しそれが再び故の道へ戻つて來た時は、前より急な傾斜面を通らなければならなかつた。

六十七

それは叔父が先刻玄關先で鉢を動かしてゐた出入の植木屋に呼ばれて、一寸席を外した後、また庭口から座敷へ上つて來た時の事であつた。

まだ學校から歸らない百合子や一の噂に始まつた叔母とお延の談話は、其時また偶然にも繼子の方に滑り込みつゝあつた。

「慾張屋さん、もう好い加減に歸りさうなもんだのにね、何をしてゐるんだらう」

叔母はわざ／＼百合子の命けた渾名で繼子を呼んだ。お延はすぐ其慾張屋の様子を思ひ出した。自分に許された小天地のうちでは飽く迄放恣な癖に、其所から一步踏み出すと、急に謹慎の模型

見たやうに疎んでしまふ彼女は、丸で父母の監督によつて仕切られた家庭といふ籠の中で、さも愉快らしく轉る小鳥のやうなもので、一旦戸を開けて外へ出されると、却つて何う飛んで可いか、何う鳴いて可いか解らなくなる丈であつた。

「今日は何のお稽古に行つたの」

叔母は「中て、御覽」と云つた後で、すぐ坂の途中から持つて來たお延の好奇心を満足させて呉れた。然しその稽古の題目が近頃熱心に始め出した語學だと聞いた時に、彼女は又改めて従妹の多慾に驚ろかされた。そんな色々なものに手を出して一體何にする積だらうといふ氣さへした。

「それでも語學丈には少し特別の意味があるんだよ」

叔母は斯う云つて、辯護かたがた繼子の意味をお延に説明した。それが間接ながら矢張今度の結婚問題に關係してゐるので、お延は叔母の手前殊勝らしい顔をして成程と首肯かなければならなかつた。

夫の好むもの、でなければ夫の職業上妻が知つてゐると都合の好いもの、それ等を豫想して

結婚前に習つて置かうといふ女の心掛は、未來の良人に對する親切に違なかつた。或は單に男の氣に入るためとしても有利な手段に違なかつた。けれども繼子にはまだそれ以上に、人間として又細君としての大事な稽古がいくらでも残つてゐた。お延の頭に描き出された其稽古は、不幸にして女を善くするものではなかつた。然し女を鋭敏にするものであつた。悪く摩擦するには相違なかつた。然し伶俐に研ぎ澄すものであつた。彼女は其初歩を叔母から習つた。叔父のお蔭でそれを今日に發達させて來た。二人はさういふ意味で育て上げられた彼女を、満足の眼で眺めてゐるらしかつた。

「それと同じ眼が何うしてあの繼子に満足出來るだらう」

從妹の何處にも不平らしい素振さへ見せた事のない叔父叔母は、此點に於てお延に不可解であつた。強ひて解釋しやうとすれば、彼等は姪と娘を見る眼に區別をつけてゐるとでも云ふより外に仕方がなかつた。斯ういふ考へに襲はれると、お延は突然口惜しくなつた。さういふ考へが又時々發作のやうにお延の胸を擱んだ。然し城府を設けない行き届いた叔父の態度や、取扱ひに公平を缺いた事のない叔母の親切で、それは何時でも燃え上る前に吹き消された。彼女は人に見え

ない袖を顔へ中て、内部の赤面を隠しながら、矢つ張不思議な眼をして、二人の心持を解けない謎のやうに不斷から見詰めてゐた。

「でも繼子さんは仕合せね。あたし見たいに心配性でないから」

「あの子はお前よりもずつと心配性だよ。たゞ宅にゐると、いくら心配したくつても心配する種がないもんだから、あゝして平氣でゐられる丈なのさ」

「でもあたしなんか、叔父さんや叔母さんのお世話になつてた時分から、もつと心配性だつたやうに思ふわ」

「そりやお前と繼とは……」

中途で止めた叔母は何をいふ氣か解らなかつた。性質が違ふといふ意味にも、身分が違ふといふ意味にも、また境遇が違ふといふ意味にも取れる彼女の言葉を追究する前に、お延ははつと思つた。それは今迄氣の付かなかつた或物に、突然ぶつかつたやうな動悸がしたからである。

「昨日の見たに引き出されたのは、容貌の劣者として暗に從妹の器量を引き立てるためではなかつたらうか」

お延の頭に石火のやうな此暗示が閃めいた時、彼女の意志も平常より倍以上の力をもつて彼女に逼つた。彼女は遂に自分を抑え付けた。どんな色をも顔に現さなかつた。

「繼子さんは得な方ね。誰にでも好かれるんだから」

「左右も行かないよ。けれども是は人の好々だからね。あんな馬鹿でも……」

叔父が縁側へ上つたのと、叔母が斯う云ひ掛けたのは、殆ど同時であつた。彼は大きな聲で「繼が何うしたつて」と云ひながら又座敷へ入つて來た。

六十八

すると今迄抑え付けてゐた一種の感情がお延の胸に盛り返して來た。飽く迄機嫌の好い、飽く迄元氣に充ちた、さうして飽く迄樂天的に肥え太つた其顔が、瞬間のお延を咄嗟に刺戟した。

「叔父さんも随分人が悪いのね」

彼女は藪から棒に斯う云はなければならなかつた。今日迄二人の間に何百遍となく取り換はされた此常套な言葉を使つたお延の聲は、何時もと違つてゐた。表情にも特殊な所があつた。けれ

ども先刻からお延の腹の中に何んな潮の満干があつたか、其所に丸で氣の付かずにゐた叔父は、平生の細心にも似ず、全く無邪氣であつた。

「そんなに人が悪うがすかな」

例の調子でわざと空つとぼけた彼は、澄まして刻烟草を雁首へ詰めた。

「おれの留守に又叔母さんから何か聞いたな」

お延はまだ黙つてゐた。叔母はすぐ答へた。

「あなたの人の悪い位今更私から聴かないでも能く承知してるさうですよ」

「成程ね。お延は直覺派だからな。左右かも知れないよ。何しろ一目見て此男の懐中には金が若干あつて、彼はそれを懐鼻禪のミツへ挟んでゐるか、又は胴巻へ入れて臍の上に乗つけてゐるか、ちやんと見分ける女なんだから、中々油断は出来ないよ」

叔父の笑談は決して彼の豫期したやうな結果を生じなかつた。お延は下を向いて眉と睫毛を一所に動かした。其睫毛の先には知らない間に涙が一杯溜つた。勝手を違へた叔父の悪口もぱたりと留まつた。變な壓迫が一度に三人を抑え付けた。

「お延何うかしたのかい」

斯う云つた叔父は無言の空虚を充たすために、烟管で灰吹を叩いた。叔母も何とか其場を取り繕ろはなければならなくなつた。

「何だね小供らしい。此位な事で泣くものがありますか。何時もの笑談ぢやないか」

叔母の小言は、義理のある叔父の手前を兼た挨拶とばかりは聞えなかつた。二人の關係を知り抜いた彼女の立場を認める以上、何處から見ても公平なものであつた。お延はそれを能く承知してゐた。けれども叔母の小言を尤もと思へば思ふ程、彼女は猶泣きたくなつた。彼女の唇が顫へた。抑え切れない涙が後から後からと出た。それにつれて、今迄堰き留めてゐた口の關も破れた。彼女はついに泣きながら聲を出した。

「何もそんなに迄して、あたしを苛めなくつたつて……」

叔父は當惑さうな顔をした。

「苛めやしないよ。賞めてるんだ。そらお前が由雄さんの所へ行く前に、あの人を評した言葉があるだらう。あれを皆な蔭で感心してゐるんだ。だから……」

「そんな事承はなくつても、もう澤山です。つまりあたしが芝居へ行つたのが悪いんだから。

……」

沈黙がすこし續いた。

「何だか飛んだ事になつちまつたんだね。叔父さんの調戲ひ方が悪かつたのかい」

「いゝえ。皆んなあたしが悪いんでせう」

「さう皮肉を云つちや不可い。何處が悪いか解らないから訊くんだ」

「だから皆なあたしが悪いんだつて云つてるぢやありませんか」

「だが譯を云はないからさ」

「譯なんかないんです」

「譯がなくつて、たゞ悲しいのかい」

お延は猶泣き出した。叔母は苦々しい顔をした。

暗明

「何だね此人は。駄々子ぢやあるまいし。宅にゐた時分、いくら叔父さんに調戲はれたつて、そんなに泣いた事なんか、ありやしない癖に。お嫁に行きたてで、少し旦那から大事にされると、

すぐ左右なるから困るんだよ、若い人は」

お延は唇を嚙んで黙つた。凡ての原因が自分にあるものとのみ思ひ込んだ叔父は却つて氣の毒さうな様子を見せた。

「そんなに叱つたつて仕様がなないよ。おれが少し冷評し過ぎたのが悪かつたんだ。——ねえお延さうだらう。屹度さうに違ない。よし／＼叔父さんが泣かした代りに、今に好い物を遣る」
漸く發作の去つたお延は、叔父から斯んな風に小供扱ひにされる自分を何う取り扱つて、跋の悪い此場面に、平靜な一轉化を與へたものだらうと考へた。

六十九

所へ何にも知らない繼子が、語學の稽古から歸つて來て、ひよつくり顔を出した。

「只今」

和解の心棒を失つて困つてゐた三人は、突然それを見出した人のやうに喜こんだ。さうして殆んど同時に挨拶を返した。

「お歸んなさい」

「遅かつたのね。先刻から待つてたのよ」

「いや大變なお待兼だよ。繼子さんは何うしたらう、何うしたらうつて」

神經質な叔父の態度は、先刻の失敗を取り戻す意味を帯びてゐるので、平生よりは一層快諧であつた。

「何でも繼子さんに逢つて、是非話したい事があるんださうだ」

斯んな餘計な事迄云つて、自分の目的とは反對な影を、お延の上に逆まに投げて置きながら、彼は却つて得意になつてゐるらしかつた。

然し下女が襖越に手を突いて、風呂の沸いた事を知らせに來た時、彼は急に思ひ付いたやうに立ち上つた。

「まだ湯なんかに入つちやゐられない。少し庭に用が残つてゐるから。——お前達先へ入るなら入るがい」

彼は氣に入りの植木屋を相手に、残りの秋の日を土の上に費やすべく、再び庭へ下り立つた。

けれども一旦脊中を座敷の方へ向けた後で又振り返つた。

「お延、湯に入つて晩飯でも食べておいで」

斯う云つて二三間歩いたかと思ふと彼は又引き返して來た。お延は頭の能く働くその世話しない様子を、如何にも彼の特色らしく感心して眺めた。

「お延が來たから晩に藤井でも呼んで遣らうか」

職業が違つても同じ學校出だけに古くから知り合の藤井は、津田との關係上、今では以前より餘程叔父に縁の近い人であつた。是も自分に對する好意からだと解釋しながら、お延は別に嬉しいと思ふ氣にもなれなかつた。藤井一家と津田、二つのものが離れてゐるよりも、はるか餘計に彼女は彼等より離れてゐた。

「然し來るかな」といつた叔父の顔は、正にお延の腹の中を物語つてゐた。

「近頃みんなおれの事を隠居々々つていふが、あの男の隠居主義と來たら、遠い昔からの事、到底おれ杯の及ぶ所ぢやないんだからな。ねえ、お延、藤井の叔父さんは飯を食ひに來いつたら、來るかい」

「そりや何うだかあたしにや解らないわ」

叔母は婉曲に自己を表現した。

「大方入らつしやらないでせう」

「うん、中々おいそれと遣つて來さうもないね。ぢや止すか。——だがまあ試しに一寸掛けて見るが可い」

お延は笑ひ出した。

「掛けて見るつたつて、あすこにや電話なんかありやしなわい」

「ぢや仕方がない。使でも遣るんだ」

手紙を書くのが面倒だつたのか、時間が惜しかつたのか、叔父はさう云つたなりさつさと庭口の方へ歩いて行つた。叔母も「ぢやあたしは御免蒙つてお先へお湯に入らう」と云ひながら立ち上つた。

叔父の潔癖を知つて、みんなが遠慮するのに、自分丈は平氣で、こんな場合に、叔父の言葉通り斷行して顧みない叔母の態度は、お延に取つて羨ましいものであつた。又忌はしいものであつ

た。女らしくない厭なものであると同時に、男らしい好いものであつた。あゝ出来たら嗜好からうといふ感じと、いくら年を取つてもあゝは遣りたくないといふ感じが、彼女の心に何時もの通り交錯した。

立つて行く叔母の後姿を彼女がぼんやり目送してゐると、一人残つた繼子が突然誘つた。

「あたしのお部屋へ来なくつて」

二人は火鉢や茶器で取り散らされた座敷を其儘にして外へ出た。

七十

繼子の居間は取りも直さず津田に行く前のお延の居間であつた。其所に机を並べて二人ゐた昔の心持が、まだ壁にも天井にも残つてゐた。硝子戸を箴めた小さい棚の上に行儀よく置かれた木彫の人形も其儘であつた。薔薇の花を刺繍にした籃入のピンクツシヨンも其儘であつた。二人してお對に三越から買つて来た唐草模様の染付の一輪挿も其儘であつた。

四方を見廻したお延は、従妹と共に暮した處女時代の匂を至る所に嗅いだ。甘い空想に充ちた

其匂が津田といふ對象を得て遂に實現された時、忽然鮮やかな燄に變化した自己の感情の前に舞したのは彼女であつた。眼に見えないでも、瓦斯があつたから、ばつと火が點いたのだと考へたのは彼女であつた。空想と現實の間には何等の差違を置く必要がないと論斷したのは彼女であつた。顧みると其時からもう半年以上経過してゐた。何時か空想は遂に空想に留まるらしく見え出して来た。何所迄行つても現實化されないものらしく思はれた。或は極めて現實化され悪いものらしくなつて来た。お延の胸の中には微かな溜息さへ宿つた。

「昔は淡い夢のやうに、次第々々に確實な自分から遠ざかつて行くのではなからうか」

彼女は斯ういふ觀念の眼で、自分の前に坐つてゐる従妹を見た。多分は自分と同じ徑路を踏んで行かなければならない、又ひよつとしたら自分よりもつと豫期に外れた未來に突き當らなければならぬ此處女の運命は、叔父の手にある諾否の賽が、疊の上に轉がり次第、今明日中にでも、永久に片付けられてしまふのであつた。

お延は微笑した。

「繼子さん、今日はあたしがお神籤を引いて上げませうか」

「なんで？」

「何でもないのでよ。たゞよ」

「だつて唯ぢや詰らないわ。何か極めなくつちや」

「さう。ぢや極めませう。何が可いでせうね」

「何が可いか、そりやあたしにや解らないわ。あなたが極めて下さらなくつちや」

繼子は容易に結婚問題を口へ出さなかつた。お延の方から無暗に云ひ出されるのも苦痛らしかつた。けれども間接に何處かで其所に觸れて貰ひたい様子がありありと見えた。お延は従妹を喜ばせて遣りたかつた。と云つて、後で自分の迷惑になるやうな責任を持つのは厭であつた。

「ぢやあたしが引くから、あなた自分でお極めなさい、ね。何でも今あなたのお腹の中で、一番知りたいと思つてる事があるでせう。それにするのよ、あなたの方で、自分勝手に。可くつて」お延は例の通り繼子の机の上に乗つてゐる彼等夫婦の贈物を取らうとした。すると繼子が急に其手を抑えた。

「厭よ」

お延は手を引込めなかつた。

「何が厭なの。可いから一寸お借しなさいよ。あなたの嬉しがるのを出して上げるから」

神籤に何の執着もなかつたお延は、突然斯うして繼子と戯れたくなつた。それは結婚以前の處女らしい自分を、彼女に憶ひ起させる良い媒介であつた。弱いものゝ虚を衝くために用ひられる腕の力が、彼女を男らしく活潑にした。抑えられた手を跳ね返した彼女は、もう最初の目的を忘れてゐた。たゞ神籤箱を繼子の机の上から奪ひ取りたかつた。若くはそれを言ひ前に、たゞ繼子と争ひたかつた。二人は争つた。同時に女性の本能から來るわざとらしい聲を憚りなく出して、遊技的な戦ひに興を添へた。二人は遂に硯箱の前に飾つてある大事な一輪挿を引つ繰り返した。紫檀の臺からころ／＼と轉がり出した其花瓶は、中にある水を所嫌はず打ち空けながら疊の上に落ちた。二人は漸く手を引いた。さうして自然の位置から不意に放り出された可愛らしい花瓶を、同じやうに黙つて眺めた。それから改めて顔を見合せるや否や、急に抵抗する事の出來ない衝動を受けた人のやうに、一度に笑ひ出した。

偶然の出来事がお延を猶小供らしくした。津田の前でかつて感じた事のない自由が瞬間に復活した。彼女は全く現在の自分を忘れた。

「繼子さん早く雑巾を取つて入らつしやい」

「厭よ。あなたが零したんだから、あなた取つて入らつしやい」

二人はわざと譲り合つた。わざと押問答をした。

「ぢやジャン拳よ」と云ひ出したお延は、織い手を握つて勢よく繼子の前に出した。繼子はすぐ應じた。寶石の光る指が二人の間にちらちらした。二人は其たんに笑つた。

「狡猾いわ」

「あなたこそ狡猾いわ」

仕舞にお延が負けた時には零れた水がもう机掛と疊の目の中へ綺麗に吸ひ込まれてゐた。彼女は落付き拂つて袂から出した手巾で、濡れた所を上から抑え付けた。

「雑巾なんか要りやしない。斯うして置けば、それで澤山よ。水はもう引いちまつたんだから」
彼女は轉がつた花瓶を元の位置に直して、摧けかゝつた花を鄭寧に其中へ挿し込んだ。さうして今迄の頓興を丸で忘れた人のやうに澄まし返つた。それが又堪らなく可笑しいと見えて、繼子は何時迄も一人で笑つてゐた。

發作が靜まつた時、繼子は帯の間に隠した帙入の神籤を取り出して、傍にある本箱の抽斗へ仕舞ひ易へた。しかも其上からびちんと錠を下して、わざとお延の方を見た。

けれども繼子に取つて何時迄も續く事の出来るらしい此無意味な遊技的感興は、さう長くお延を支配する譯に行かなかつた。一仕切我を忘れた彼女は、従妹より早く醒めて仕舞つた。

「繼子さんは何時でも氣樂で好いわね」

彼女は斯う云つて繼子を見返した。當り障りのない彼女の言葉は逆も繼子に通じなかつた。

「ぢや延子さんは氣樂でないの」

自分だつて氣樂な癖にと云はん許の語氣のうちには、誰からでも、世間見ずの御嬢さん扱ひにされる兼ての不平も交つてゐた。

「あなたとあたしと一體何處が違ふんでせう」
二人は年齢が違つた。性質も違つた。然し氣兼苦勞といふ點にかけて二人の何處に何んな違があるか、それは繼子のまだ考へた事のない問題であつた。

「ぢや延子さん何んな心配があるの。少し話して頂戴な」

「心配なんか無いわ」

「そら御覽なさい。あなただつて矢張氣樂ぢやないの」

「そりや氣樂は氣樂よ。だけどあなたの氣樂さとは少し譯が違ふのよ」

「何うしてでせう」

お延は説明する譯に行かなかつた。又説明する氣になれなかつた。

「今に解るわ」

「だけど延子さんとあたしとは三つ違よ、たつた」

繼子は結婚前と結婚後の差違を丸で勘定に入れてゐなかつた。

「たゞ年齢ばかりぢやないのよ。境遇の變化よ。娘が人の奥さんになるとか、奥さんがまた旦

那様を亡くなして、未亡人になるとか」

繼子は少し怪訝な顔をしてお延を見た。

「延子さんは宅にゐた時と、由雄さんの所へ行つてからと、何方が氣樂なの」

「そりや……」

お延は口籠つた。繼子は彼女に返答を拵へる餘地を與へなかつた。

「今の方が氣樂なんでせう。それ御覽なさい」

お延は仕方なしに答へた。

「さうばかりにも行かないわ。是で」

「だつてあなたが御自分で望んで入らした方ぢやないの、津田さんは」

「え、だからあたし幸福よ」

「幸福でも氣樂ぢやないの」

「氣樂な事も氣樂よ」

「ぢや氣樂は氣樂だけれども、心配があるの」

「さう繼子さんの様に押し詰めて来ちや敵はないわね」
「押し詰める氣ぢやないけれども、解らないから、ついさうなるのよ」

七十二

段々勾配の急になつて来た會話は、何時の間にか繼子の結婚問題に滑り込んで行つた。成るべくそれを避けたかつたお延には、今迄の行き掛り上、またそれを避ける事の出来ない義理があつた。経験に乏しい處女の期待するやうな豫言は兎も角も、男女關係に一日の長ある年上の女として、相當の注意を與へて遣りたい親切もないではなかつた。彼女は差し障りのない際どい筋の上を婉曲に渡つて歩いた。

「そりや駄目よ。津田の時は自分の事だから、自分に能く解つただけけれども、他の事になると丸で勝手が違つて、些とも解らなくなるのよ」

「そんなに遠慮しないでだつて可かないのよ」
「遠慮ぢやないのよ」

「ぢや冷淡なの」

お延は答へる前に少時間を置いた。

「繼子さん、あなた知つて。女の眼は自分に一番縁故の近いものに出會つた時、始めて能く働らく事が出来るのだといふ事を。眼が一秒で十年以上の手柄をするのは、其時に限るのよ。しかもそんな場合は誰だつて生涯にさう澤山ありやしないわ。ことによると生涯に一返も来ないで済んでしまふかも分らないわ。だからあたしなんかの眼はまあ盲目同然よ。少なくとも平生は」
「だつて延子さんは左右いふ明るい眼をちゃんと持つてゐらつしやるんぢやないの。そんなら何故それをあたしの場合に使つて下さらなかつたの」

「使はないんぢやない、使へないのよ」

「だつて岡目八目つて云ふぢやありませんか。傍にゐるあなたには、あたしより餘計公平に分る筈だわ」

「ぢや繼子さんは岡目八目で生涯の運命を極めてしまふ氣なの」

「さうぢやないけれども、参考にやなるでせう。ことに延子さんを信用してゐるあたしには」

お延は又少時黙つてゐた。それから少し前よりは改つた態度で口を利き出した。

「繼子さん、あたし今あなたにお話ししたでせう、あたしは幸福だつて」

「えゝ」

「何故あたしが幸福だかあなた知つてて」

お延は其所で句切を置いた。さうして繼子の何かいふ前に、すぐ後を繼ぎ足した。

「あたしが幸福なのは、外に何にも意味はないのよ。たゞ自分の眼で自分の夫を擇ぶ事が出来たからよ。岡目八目でお嫁に行かなかつたからよ。解つて」

繼子は心細さうな顔をした。

「ぢやあたしのやうなものは、とても幸福になる望はないのね」

お延は何とか云はなければならなかつた。然しすぐは何とも云へなかつた。仕舞に突然興奮したらしい急な調子が思はず彼女の口から迸り出した。

「あるのよ、あるのよ。たゞ愛するのよ、さうして愛させるのよ。さうさへすれば幸福になる見込は幾何でもあるのよ」

斯う云つたお延の頭の中には、自分の相手としての津田ばかりが鮮明に動いた。彼女は繼子に話し掛けながら、殆んど三好の影さへ思ひ浮べなかつた。幸ひそれを自分のためとのみ解釋した。繼子は、眞ともにお延の調子を受ける程感激しなかつた。

「誰を」と云つた彼女は少し呆れたやうにお延の顔を見た。「昨夕お目にかゝつたあの方の事？」

「誰でも構はないのよ。たゞ自分で斯うと思ひ込んだ人を愛するのよ。さうして是非其人に自分を愛させるのよ」

平生包み藏してゐるお延の利かない氣性が、次第に鋒鋭を露はして來た。大人しい繼子はそのたびに少しづつ後へ退つた。仕舞に近寄りにくい二人の間の距離を悟つた時、彼女は微かな溜息さへ吐いた。するとお延が忽然また調子を張り上げた。

「あなたあたしの云ふ事を疑つてゐらつしやるの。本當よ。あたし嘘なんか吐いちやゐないわ。本當よ。本當にあたし幸福なのよ。解つたでせう」

斯う云つて絶対に繼子を首肯はせた彼女は、後から又獨り言のやうに付け足した。

「誰だつて左右よ。たとひ今其人が幸福でないにした所で、其人の料簡一つで、未来は幸福になれるのよ。屹度なれるのよ。屹度なつて見せるのよ。ねえ繼子さん、左右でせう」
お延の腹の中を知らない繼子は、此豫言をたゞ漠然と自分の身の上に應用して考へなければならなかつた。然しいくら考へても其意味は殆んど解らなかつた。

七十三

其時廊下傳ひに聞こえた忙がしい足音の主ががらりと室の入口を開けた。さうして學校から歸つた百合子が、遠慮なくつか／＼入つて來た。彼女は重さうに肩から釣るした袋を取つて、自分の机の上に置きながら、たゞ一口「只今」と云つて姉に挨拶した。
彼女の机を据ゑた場所は、丁度もお延の坐つてゐた右手の隅であつた。お延が津田へ片付くや否や、すぐ其後へ入る事の出來た彼女は、従姉のゐなくなつたのを、自分にとつて大變な都合のやうに喜こんだ。お延はそれを知つてるので、わざと言葉を掛けた。

「百合子さん、あたしまたお邪魔に上りましたよ。可くつて」

百合子は「能く入らつしやいました」とも云はなかつた。机の角へ右の足を載せて、少し穴の開きさうになつた黒い靴足袋の親指の先を、手で撫でゝゐたが、足を疊の上へ卸すと共に答へた。

「好いわ、來ても、追ひ出されたんでなければ」

「まあ非道い事」と云つて笑つたお延は、少し間を置いてから、また彼女を相手にした。

「百合子さん、もしあたしが津田を追ひ出されたら、少しは可哀相だと思つて下さるでせう」

「え、そりや可哀相だと思つて上げて可いわ」

「そんなら、其時は又此お部屋へ置いて下さつて」

「さうね」

百合子は少し考へる様子をした。

「可いわ、置いて上げて。お姉さまがお嫁に行つた後なら」

「いえ繼子さんがお嫁にゐらつしやる前よ」

暗明

「前に追ひ出されるの？そいつは少し——まあ我慢して成る可く追ひ出されないようにしたら可いでせう、此方の都合もある事だから」

斯う云つた百合子は年上の二人と共に聲を揃へて笑つた。さうして袴も脱がずに、火鉢の傍へ来て其間に坐りながら、下女の持つてきた木皿を受取つて、すぐ其中にある餅菓子を食べ出した。

「今頃お八ツ？此お皿を見ると思ひ出すのね」

お延は自分が百合子位であつた當時を回想した。學校から歸ると、待ちかねて各自の前に置かれる木皿へ手を出した其頃の様子があり／＼と目に浮かんだ。旨さうに食べる妹の顔を微笑して見てゐた繼子も同じ昔を思ひ出すらしかつた。

「延子さんあなた今でもお八ツ召しやがつて」

「食べたり食べなかつたりよ。わざ／＼買ふのは億劫だし、さうかつて宅に何かあつても、昔しのやうに旨しくないのね、もう」

「運動が足りないからでせう」

二人が話してゐるうちに、百合子は綺麗に木皿を空にした。さうして木に竹を接いだやうな調子で、二人の間に割り込んで来た。

「本當よ、お姉さまはもうぢきお嫁に行くのよ」

「さう、何處へ入らつしやるの」

「何處だか知らないけれども行く事は行くのよ」

「ぢや何といふ方の所へ入らつしやるの」

「何といふ名だか知らないけれども、行くのよ」

お延は根氣よく三度目の間を掛けた。

「それは何んな方なの」

百合子は平氣で答へた。

「大方由雄さん見たいな方なんでせう。お姉さまは由雄さんが大好きなんだから。何でも延子さんの云ふ通りになつて、大變好い人だつて、さう云つてよ」

薄赤くなつた繼子は急に妹の方へ掛つて行つた。百合子は頓興な聲を出してすぐ其所を飛び退いた。

「おゝ大變々々」

入口の所で一寸立ち留まつて斯う云つた彼女は、お延と繼子を其所へ残した儘、一人で室を逃

げ出して行つた。

七十四

お延が下女から食事の催促を受けて、二返目に繼子と共に席を立つたのは、それから間もなくであつた。

一家のものは明るい室に晴々した顔を揃へた。先刻何かに拗ねて縁の下へ這入つたなり容易に出て來なかつたといふ一さへ、機嫌よく叔父と話をしてゐた。

「一さんは犬見たいよ」と百合子がわざわざ知らせに來た時、お延は此小さい従妹から、彼がばかりと口を開いて上から鼻の先へ出された餅菓子に食ひ付いたといふ話を聞いたのであつた。

お延は微笑しながら所謂犬見たいな男の子の談話に耳を傾けた。

「お父さま彗星が出ると何か悪い事があるんでせう」

「うん昔の人はさう思つてゐた。然し今は學問が開けたから、そんな事を考へるものは、もう一人もなくなつちまつた」

「西洋では」

西洋にも同じ迷信が古代に行はれたものか何うだか、叔父は知らないらしかつた。

「西洋？西洋にや昔からない」

「でもシーザーの死ぬ前に彗星が出たつていふぢやないの」

「うんシーザーの殺される前か」と云つた彼は、胡麻化すより外に仕方がないらしかつた。

「ありや羅馬の時代だからな。たゞの西洋とは譯が違ふよ」

一はそれで納得して黙つた。然しすぐ第二の質問を掛けた。前よりは一層奇抜な其質問は立派に三段論法の形式を具へてゐた。井戸を堀つて水が出る以上、地面の下は水でなければならぬ、地面の下が水である以上、地面は落ちなければならぬ。然るに地面は何故落ちないか。是が彼の要旨であつた。それに對する叔父の答辯が又頗るしどろもどろなので、傍のものはみんな可笑しがつた。

「そりやお前落ちないさ」

「だつて下が水なら落ちる譯ぢやないの」

「さう旨くは行かないよ」

女連が一度に笑ひ出すと、一は忽ち第三の問題に飛び移つた。

「お父さま、僕此宅が軍艦だと好いな。お父さまは？」

「お父さまは軍艦よりたゞの宅の方が好いね」

「だつて地震の時宅なら潰れるぢやないの」

「は、あ軍艦ならいくら地震があつても潰れないか。成程こいつは氣が付かなかつた。ふうん、成程」

本式に感服してゐる叔父の顔を、お延は微笑しながら眺めた。先刻藤井を晚餐に招待するといつた彼は、もう其事を念頭に置いてゐないらしかつた。叔母も忘れたやうに澄ましてゐた。お延はついに一に訊いて見たくなつた。

「一さん藤井の眞事さんと同級なんでせう」

「あゝ」と云つた一は、すぐ眞事に就いてお延の好奇心を満足させた。彼の話は、到底子供でなくては云へない、觀察だの、批評だの、事實だのに富んでゐた。食卓は一時彼の力で賑はつた。

みんなを笑はせた眞事の逸話の中に、下のやうなのがあつた。

ある時學校の歸りに、彼は一と一所に大きな深い穴を覗き込んだ。土木工事のために深く掘り返されて、往來の眞中に出来上つた其穴の上には、一本の杉丸太が掛け渡してあつた。一は眞事に、其丸太の上を渡つたら百圓遣ると云つた。すると無鐵砲な眞事は、背囊を背負つて、老犬の皮で拵へたといはれる例の靴を穿いた儘、「屹度呉れる？」と云ひながら、殆ど平たい幅を有つてゐない、つる／＼滑りさうな材木を渡り始めた。最初は今に落ちるだらうと思つて見てゐた一は、相手が一歩々々と、危ないながらゆつくり／＼自分に近づいて來るのを見て、急に怖くなつた。彼は深い穴の眞上にある友達を其所へ置き去りにして、どん／＼逃げだした。眞事は又始終足元に氣を取られなければならぬので、丸太を渡り切つてしまふ迄は、一が何處へ行つたか全く知らずにゐた。漸く冒險を仕遂げて、約束通り百圓貰はうと思つて始めて眼を上げると、相手は何時の間にか逃げてしまつて、一の影も形も丸で見えなかつたといふのである。

「一の方が少し小柄巧のやうだな」と叔父が評した。

「藤井さんは近頃あんまり遊びに來ないやうね」と叔母が云つた。

小供が一つ學校の同級にゐる事の外に、お延の關係から近頃岡本と藤井の間に起つた交際には多少の特色があつた。否でも顔を合せなければならぬ祝儀不祝儀の席を未來に控へてゐる彼等は、事情の許す限り、双方から接近して置く便宜を、平生から認めない譯に行かなかつた。ことに女の利害を代表する岡本の方は、藤井よりも餘計此必要を認めなければならぬ地位に立つてゐた。其上岡本の叔父には普通の成功者に附隨する一種の如才なさがあつた。持つて生れた樂天的な廣い横斷面もあつた。神經質な彼はまた誤解を恐れた。ことに生計向に不自由のないものが、比較的貧しい階級から受けがちな尊大不遜の誤解を恐れた。多年の多忙と勉強のために損なはれた健康を回復するために、當分閑地に就いた昨今の彼には、時間の餘裕も充分あつた。その時間の空虚な所を、自分の趣味に適ふ模細工で毎日埋めて行く彼は、今迄自分と全く縁故のないものとして、平氣で通り過ぎた人や物に段々接近して見ようといふ意志も有つてゐた。是等の原因が困絡がつて、叔父は時々藤井の宅へ自分の方から出掛けて行く事があつた。排外

的に見える藤井は、律義に叔父の訪問を返さうとしなかつたが、左右かと云つて彼を厭がる様子も見せなかつた。彼等は寧ろ快よく談じた。底迄打ち解けた話は出來ないにした所で、たゞ相互の世界を交換する丈でも、多少の興味にはなつた。其世界は又妙に食ひ違つてゐた。一方から見ると如何にも迂濶なものが、他方から眺めると如何にも高尚であつたり、片側で卑俗と解釋しなければならぬものを、向ふでは是非とも實際的に考へたがつたりする所に、思はざる發見がひよい／＼出て來た。

「つまり批評家つて云ふんだらうね、あゝ云ふ人の事を。然しあれぢや仕事は出來ない」

お延は批評家といふ意味を能く理解しなかつた。實際の役に立たないから、口先で偉さうな事を云つて他を胡麻化すんだらうと思つた。「仕事が出來なくつて、たゞ理窟を弄んでゐる人、さういふ人に世間は何んな用があるだらう。さういふ人が物質上相當の報酬を得ないで困るのは當然ではないか」。これ以上進む事の出來なかつた彼女は微笑しながら訊いた。

「近頃藤井さんへ入らしつて」

「うん此間も一寸散歩の歸りに寄つたよ。草臥れた時、休むには丁度都合の好い所にある宅だ

からね、彼所は」

「又何か面白いお話しでもあつて」

「相變らず妙な事を考へてるね、あの男は。此間は、男が女を引張り、女がまた男を引張るつて話をさかんに遣つて来た」

「あら厭だ」

「馬鹿らしい、好い年をして」

お延と叔母はこもごも呆れたやうな言葉を出す間に、継子文は餘所を向いた。

「いや妙な事があるんだよ。大將中々調べてゐるから感心だ。大將のいふ所によると、斯うなんだ。何處の宅でも、男の子は女親を慕ひ、女の子はまた反對に男親を慕ふのが當り前だといふんだが、成程左う云へば、さうだね」

親身の叔母よりも義理の叔父を好いてゐたお延は少し眞面目になつた。

「それで何うしたの」

「それで斯うなんだ。男と女は始終引張り合はないと、完全な人間になれないんだ。つまり自

分に不足な所が何處かにあつて、一人ぢやそれを何うしても充たす譯に行かないんだ」

お延の興味は急に退き掛けた。叔父の云ふ事は、自分の疾うに知つてゐる事實に過ぎなかつた。

「昔から陰陽和合つていふぢやありませんか」

「所が陰陽和合が必然でありながら、其反對の陰陽不和がまた必然なんだから面白いぢやない

か」

「何うして」

「いゝかい。男と女が引張り合ふのは、互に違つた所があるからだらう。今云つた通り」

「えゝ」

「ぢや其違つた所は、つまり自分ぢやない譯だらう。自分とは別物だらう」

「えゝ」

「それ御覽。自分と別物なら、何うしたつて一所になれつこないぢやないか。何時迄経つたつて、離れてゐるより外に仕方がないぢやないか」

叔父はお延を征服した人のやうに呵々と笑つた。お延は負けなかつた。

「だけどそりや理窟よ」
「無論理窟さ。何處へ出ても立派に通る理窟さ」
「駄目よ、そんな理窟は。何だか變ですよ。丁度藤井の叔父さんが振り廻しさうな屁理窟よ」
お延は叔父を遣り込める事が出来なかつた。けれども叔父のいふ通りを信ずる氣にはなれなかつた。又何うあつても信ずるのは厭であつた。

七十六

叔父は面白半分まだ色々な事を云つた。
男が女を得て成佛する通りに、女も男を得て成佛する。然しそれは結婚前の善男善女に限られた眞理である。一度夫婦關係が成立するや否や、眞理は急に寐返りを打つて、今迄とは正反對の事實を我々の眼の前に突き付ける。即ち男は女から離れなければ成佛出来なくなる。女も男から離れなければ成佛し悪くなる。今迄の牽引力が忽ち反撥性に變化する。さうして、昔から云ひ習はして來た通り、男はやつぱり男同志、女は何うしても女同志といふ諺を永久に認めなくなる。

つまり人間が陰陽和合の實を擧げるのは、やがて來るべき陰陽不和の理を悟るために過ぎない。

叔父の言葉の何處迄が藤井の受賣で、何處からが自分の考へなのか、又其考への何處迄が眞面目で、何處からが笑談なのか、お延には能く分らなかつた。筆を持つ術を知らない叔父は恐ろしく口の達者な人であつた。一寸した心棒があると、其上に幾枚でも手製の着物を着せる事の出来る人であつた。俗にいふ警句といふ種類のものが、いくらでも彼の口から出た。お延が反對すればする程、膏が乗つて留度なく出て來た。お延はとうとう好い加減にして切り上げなければならなかつた。

「随分のべつね、叔父さんも」

「口ぢやとても敵ひつこないからお止しよ。此方で何かいふと、猶意地になるんだから」

「え、わざ／＼陰陽不和を醸すやうに仕向けるのね」

お延が叔母と斯んな批評を取り換はせてゐる間、叔父はにこ／＼して二人を眺めてゐたが、やがて會話の途切れるのを待つて、徐ろに宣告を下した。

「とう／＼降参しましたかな。降参したなら、降参したで宜しい。敗けたものを追窮はしないから。——其所へ行くと男には又弱いものを憐れむといふ美點があるんだからな、斯う見えても」
彼は左も勝利者らしい顔を粧つて立ち上がった。障子を開けて室の外へ出ると、勿體振つた足音が書齋の方に向いて段々遠ざかつて行つた。しばらくして戻つて来た時、彼は片手に小型の薄つぺらな書物を四五冊持つてゐた。

「おいお延好いものを持つて来た。お前明日にでも病院へ行くなら、是を由雄さんの所へ持つてツてお遣り」

「何よ」

お延はすぐ書物を受け取つて表紙を見た。英語の標題が、外國語に熟しない彼女の眼を少し惱ませた。彼女は拾ひ讀にぼつ／＼讀み下した。ブック、オフ、ジョークス。イングリッシ、キツト、エンド、ヒュモア。……

「へえ、」

「みんな滑稽なもんだ。洒落だとか、謎だとかね。寐てゐて讀むには丁度手頃で好いよ、肩が

凝らなくつてね」

「成程叔父さん向のものね」

「叔父さん向でも此位な程度なら差支あるまい。いくら由雄さんが嚴格だつて、まさか怒りやしまし」

「怒るなんて、……」

「まあ可いや、是も陰陽和合のためだ。試しに持つてツて見るさ」

お延が禮を云つて書物を膝の上に置くと、叔父は又片々の手に持つた小さい紙片を彼女の前に出した。

「是は先刻お前を泣かした賠償金だ。約束だから序に持つてお出で」

お延は叔父の手から紙片を受取らない先に、その何であるかを知つた。叔父はことさらにそれを振り廻した。

「お延、是は陰陽不和になつた時、一番よく利く藥だよ。大抵の場合には一服吞むとすぐ平癒する妙藥だ」

お延は立つてゐる叔父を見上げながら、弱い調子で抵抗した。

「陰陽不和ぢやないのよ。あたし達のは本當の和合なのよ」

「和合なら猶結構だ。和合の時に呑めば、精神が益健全になる。さうして身體は愈強壯になる。何方へ轉んでも間違のない妙薬だよ」

叔父の手から小切手を受け取つて、じつとそれを見詰めてゐたお延の眼に涙が一杯溜つた。

七十七

お延は叔父の送らせるといふ俵を斷つた。然し停留所迄自身で送つて遣るといふ彼の好意を斷りかねた。二人は遂に連れ立つて長い坂を河縁の方へ下りて行つた。

「叔父さんの病氣には運動が一番可いんだからね。——なに歩くのは自分の勝手さ」

肥つてゐて呼吸が短いので、坂を上るとき可笑い程苦しがる彼は、丸で歸りを忘れたやうな事を云つた。

二人は途々夜の更けた昨夕の話をした。假寐をして突ツ伏してゐたお延の様子などがお延の口

に上つた。もと叔父の家におたといふ縁故で、新夫婦二人限の家庭に住み込んだ此下女に對して、叔父は幾分か周旋者の責任を感じなければならなかつた。

「ありや叔母さんが能く知つてるが、正直で好い女なんだよ。留守なんぞさせるには持つて來いだつて受合つた位だからね。だが獨りで寐ちまつちや困るね、不用心で。尤もまだ年齒が年齒だからな。眠い事も眠いだらうよ」

いくら若くつても、自分ならそんな場合にぐつすり寐込まれる譯のものでないといふ事を能く承知してゐたお延は、叔父の此想ひ遣りをたゞ笑ひながら聽いてゐた。彼女に云はせれば、斯うして早く歸るのも、あんなに遅くなつた昨日の結果を、今夜は繰り返させたくないといふ主意からであつた。

彼女は急いで其所へ來た電車に乗つた。さうして車の中から叔父に向つて「左様なら」といつた。叔父は「左様なら、由雄さんによろしく」といつた。二人が辛うじて別れの挨拶を交換するや否や、一種の音と動搖がすぐ彼女を支配し始めた。

車内のお延は別に纏まつた事を考へなかつた。入れ替り立ち替り彼女の眼の前に浮ぶ、昨日か

らの關係者の顔や姿は、自分の乗つてゐる電車のやうに早く廻轉する文であつた。然し彼女はさうした目眩しい影像を一貫してゐる或物を心のうちに認めた。若くは其或物が根調で、さうした断片的な影像が眼の前に飛び廻るのだとも云へた。彼女は其或物を拈定しなければならなかつた。然し彼女の努力は容易に成效をもつて酬ひられなかつた。團子を認めた彼女は、遂に個々を貰いてゐる串を見定める事の出来ないうちに電車を下りてしまつた。

玄關の格子を開ける音と共に、台所の方から駈け出して來たお時は、彼女の豫期通り「お歸り」と云つて、鄭重な頭を疊の上に押し付けた。お延は昨日に違つた下女の判切した態度を、左も自分の手柄でもあるやうに感じた。

「今日は早かつたでせう」

下女は夫程早いとも思つてゐないらしかつた。得意なお延の顔を見て、仕方なささうに、「へえ」と答へたので、お延は又讓歩した。

「もつと早く歸らうと思つたんだけどね、つい日が短かいもんだから」
自分の脱ぎ棄てた着物をお時に疊ませる時、お延は彼女に訊いた。

「あたしの居ない留守に何にも用はなかつたらうね」

お時は「いゝえ」と答へた。お延は念のためもう一遍問を改めた。

「誰も來やしなかつたらうね」

するとお時が急に忘れたものを思ひ出したやうに調子高な返事をした。

「あ、入らつしやいました。あの小林さんと仰しやる方が」

夫の知人としての小林の名はお延の耳に初めてではなかつた。彼女には二三度其人と口を利いた記憶があつた。然し彼女はあまり彼を好いてゐなかつた。彼が夫から甚だ軽く見られてゐるといふ事も能く呑み込んでゐた。

「何しに來たんだらう」

斯んなぞんざいな言葉さへ、つい口先へ出さうになつた彼女は、それでも尋常な調子で、お時に訊き返した。

「何か御用でもおありだつたの」

「えゝあの外套を取りに入らつしやいました」

夫から何にも聞かされてゐないお延に、此言葉は丸で通じなかつた。

「外套？誰の外套？」

周密なお延は色々な問をお時に掛けて、小林の意味を知らうとした。けれどもそれは全くの徒勞であつた。お延が訊けば訊く程、お時が答へれば答へる程、二人は迷宮に入る丈であつた。仕舞に自分達より小林の方が變だといふ事に氣の付いた二人は、聲を出して笑つた。津田の時々使ふノンセンスと云ふ英語がお延の記憶に蘇生へつた。「小林とノンセンス」斯う結び付けて考へると、お延は堪らなく可笑しくなつた。發作のやうに込み上げてくる滑稽感に遠慮なく自己を託した彼女は、電車の中から持ち越して歸つて來た、氣掛りな宿題を、しばらく忘れてゐた。

七十八

お延は其晩京都にゐる自分の兩親へ宛て、手紙を書いた。一昨日も昨日も書き掛けて止めにしたその音信を、今日は是非共片付けて仕舞はなければならぬと思ひ立つた彼女の頭の中には、決して兩親の事ばかり働いてゐるのではなかつた。

彼女は落付けなかつた。不安から逃れようとする彼女には注意を一つ所に集める必要があつた。先刻からの疑問を解決したいといふ切な希望もあつた。要するに京都へ手紙を書けば、ざわざわしがちな自分の心持を纏めて見る事が出來さうに思へたのである。

筆を取り上げた彼女は、例の通り時候の挨拶から始めて、無沙汰の申し譯迄を器械的に書き了つた後で、少時考へた。京都へ何か書いてやる以上は、是非共自分と津田との消息を的に置かなければならなかつた。それはどの親も新婚の娘から聞きたがる事項であつた。どの娘も亦生家の父母に知らせなくつては濟まない事項であつた。それを差し置いて里へ手紙を遣る必要は殆んどあるまいと迄平生から信じてゐたお延は、筆を持つた儘、目下自分と津田との間柄が、果して何んな所に何ういふ風に關係してゐるかを考へなければならなかつた。彼女は有の儘其物を父母に報知する必要に逼られてはゐなかつた。けれどもある男に嫁いだ一個の妻として、それを見極めて置く要求を痛切に感じた。彼女は凝と考へ込んだ。筆は其所で留つたぎり動かなくなつた。その動かなくなつた筆の事さへ忘れて、彼女は考へなければならなかつた。しかも知らうとすればする程、確とした所は手に摺めなかつた。

手紙を書く迄の彼女は、ざわざわした散漫な不安に悩まされてゐた。手紙を書き始めた今の彼女は、漸く一つ所に落付いた。さうして又一つ所に落付いた不安に悩まされ始めた。先刻電車の中で、ちら／＼眼先に付き出した色々の影は、みんな此一點に向つて集注するのだといふ事を、前後兩様の比較から發見した彼女は、やつと自分を苦しめる不安の大根に辿り付いた。けれども其大根の正體は何うしても分らなかつた。勢ひ彼女は問題を未來に繰り越さなければならなかつた。

「今日解決が出来なければ、明日解決するより外に仕方がない。明日解決が出来れば明日解決するより外に仕方がない。明後日解決が出来なければ……」

是が彼女の論法であつた。又希望であつた。最後の決心であつた。さうして其決心を彼女は既に継子の前で公言してゐたのである。

「誰でも構はない、自分の斯うと思ひ込んだ人を飽く迄愛する事によつて、其人に飽く迄自分を愛させなければ已まない」

彼女は此所迄行く事を改めて心に誓つた。此所迄行つて落付く事を自分の意志に命令した。

彼女の気分は少し軽くなつた。彼女は再び筆を動かした。成るべく父母の喜びさうな津田と自分の現況を憚りなく書き連ねた。幸福さうに暮してゐる二人の趣が、それからそれへと描出された。感激に充ちた筆の穂先がさら／＼と心持よく紙の上を走るのが彼女には面白かつた。長い手紙がたゞ一息に出来上つた。其一息が何の位の時間に相當してゐるかといふ事を、彼女は丸で知らなかつた。

仕舞に筆を擱いた彼女は、もう一遍自分の書いたものを最初から讀み直して見た。彼女の手に支配したと同じ気分が、彼女の眼を支配してゐるので、彼女は訂正や添削の必要を何處にも認めなかつた。日頃苦にして、使ふ時には屹度言海を引いて見る、うろ覚えの字さへ其儘で少しも氣に掛からなかつた。てには違のために意味の通じなくなつた所を、二三ヶ所ちよい／＼と取り繕つた丈で、彼女は手紙を巻いた。さうして心の中でそれを受取る父母に斷つた。

「この手紙に書いてある事は、何處から何處迄本當です。嘘や、氣休や、誇張は、一字もありません。もしそれを疑ふ人があるなら、私は其人を憎みます、輕蔑します、唾を吐き掛けます。其人よりも私の方が真相を知つてゐるからです。私は上部の事實以上の真相を此所に書いてゐま

す。それは今私に又解つてゐる真相なのです。然し未來では誰にでも解らなければならぬ真相なのです。私は決してあなた方を欺むには居りません。私があるあなた方を安心させるために、わざと欺騙の手紙を書いたのだといふものがあつたなら、其人は眼の明いた盲人です。其人こそ嘘吐です。どうぞ此手紙を上げる私を信用して下さい。神様は既に信用してゐらつしやるのですから」

お延は封書を枕元へ置いて寝た。

七十九

始めて京都で津田に會つた時の事が思ひ出された。久し振に父母の顔を見に歸つたお延は、着いてから二三日して、父に使を頼まれた。一通の封書と一帳の唐本を持つて、彼女は五六町隔つた津田の宅迄行かなければならなかつた。軽い神経痛に悩まされて、寐たり起きたりぶらぶらしてゐた彼女の父は、病中の徒然を慰めるために折々津田の父から書物を借り受けるのだといふ事を、お延は其時始めて彼の口から聞かされた。古いのを返して新しいのを借りて來るのが彼女

の用向であつた。彼女は津田の玄關に立つて案内を乞ふた。玄關には大きな衝立が立てゝあつた。白い紙の上に躍つてゐるやうに見える變な字を、彼女が驚ろいて眺めてゐると、其衝立の後から取次に現はれたのは、下女でも書生でもなく、丁度其時彼女と同じ様に京都の家へ來てゐた由雄であつた。

二人は固よりそれ迄に顔を合せた事がなかつた。お延の方ではたゞ噂で由雄を知つてゐる文であつた。近頃家へ歸つて來たとか、又は歸つてゐるとかいふ話は、其朝始めて父から聞いた位のものであつた。それも父に新しく本を借りようといふ氣が起つて、彼がそのための手紙を書いた、事の序に過ぎなかつた。

由雄は其時お延から帙入の唐本を受取つて、何故だか、明詩別裁といふ嚴めしい字で書いた標題を長らくの間見詰めてゐた。その見詰めてゐる彼を、お延は又何時迄も眺めてゐなければならなかつた。すると彼が急に顔を上げたので、お延が今迄熱心に彼を見てゐた事がすぐ發覺してしまつた。然し由雄の返事を待ち受ける位地に立たせられたお延から見れば、是も已を得ない所作に違なかつた。顔を上げた由雄は、「父は生憎今留守ですが」と云つた。お延はすぐ歸らうとした。

すると由雄が又呼び留めて、自分の父宛の手紙を、お延の見てゐる前で、断りも何にもせず、開封した。此平氣な舉動がまたお延の注意を惹いた。彼の遣口は不作法であつた。けれども果斷に違なかつた。彼女は何うしても彼を粗野とか亂暴とかいふ言葉で評する氣にならなかつた。手紙を一目見た由雄は、お延を玄關先に待たせた儘、入用の書物を探しに奥へ這入つた。然し不幸にして父の借らうとする漢籍は彼の眼の付く所になかつた。十分ばかりして又出て来た彼は、お延を空しく引き留めて置いた詫を述べた。指定の本は一寸見付からないから、彼の父の歸り次第、此方から届けるようにすると云つた。お延は失禮だといふので、それを断つた。自分が又明日にでも取りに来るからと約束して宅へ歸つた。

すると其日の午後由雄が向ふから望みの本をわざ／＼持つて来て呉れた。偶然にもお延が其取次に出た。二人は又顔を見合せた。さうして今度はすぐ兩方で兩方を認め合つた。由雄の手に提げた書物は、今朝お延の返しに行つたものに比べると、約三倍の量があつた。彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、恰も鳥籠でもぶら下げてゐるやうな具合にしてお延に示した。

彼は招ぜられるまゝに座敷へ上つてお延の父と話をした。お延から云へば、とても若い人には

堪へられさうもない老人向の雑談を、別に迷惑さうな様子もなく、方角違の父と取り換はせた。彼は自分の持つて来た本に就いては何事も知らなかつた。お延の返しに行つた本に就いては猶知らなかつた。劃の多い四角な字の重なつてゐる書物は全く讀めないのだと断つた。それでも此方から借りに行つた吳梅村詩といふ四文字を的に、書棚を彼方此方と探して呉れたのであつた。父はあつく彼の好意を感謝した。……

お延の眼には其時の彼がちら／＼した。其時の彼は今の彼と別人ではなかつた。といつて、今の彼と同人でもなかつた。平たく云へば、同じ人が變つたのであつた。最初無關心に見えた彼は、段々自分の方に牽き付けられるやうに變つて来た。一旦牽き付けられた彼は、また次第に自分から離れるやうに變つて行くのではなからうか。彼女の疑は殆んど彼女の事實であつた。彼女は其疑を拭ひ去るために、其事實を引ッ繰り返さなければならなかつた。

八十

強い意志がお延の身體全體に充ち渡つた。朝になつて眼を覺ました時の彼女には、怯懦ほど自

分に縁の遠いものはなかつた。寐起の悪過ぎた前の日の自分を忘れたやうに、彼女はすぐ飛び起きた。夜具を跳ね退けて、床を離れる途端に、彼女は自分で自分の腕の力を感じた。朝寒の刺戟と共に、締まつた筋肉が一度に彼女を緊縮させた。

彼女は自分の手で雨戸を手繰つた。戸外の模様は何時よりもまだ餘ツ程早かつた。昨日に引き換へて、今日は津田の居る時よりも却つて早く起きたといふ事が、何故だか彼女には嬉しかつた。怠けて寐過した昨日の償ひ、それも満足の一つであつた。

彼女は自分で床を上げて座敷を掃き出した後で鏡台に向つた。さうして結つてから四日目になる髪を解いた。油で汚れた所へ二三度櫛を通して、癖が付いて自由にならないのを、無理に廂に束ね上げた。それが濟んでから始めて下女を起した。

食事の出来る迄の時間を、下女と共に働いた彼女は、膳に着いた時、下女から「今日は大變お早う御座いましたね」と云はれた。何にも知らないお時は、彼女の早起を驚ろいてゐるらしくつた。また自分が主人より遅く起きたのを濟まない事でもしたやうに考へてゐるらしくつた。

「今日は旦那様のお見舞に行かなければならないからね」

「そんなにお早く入らつしやるんで御座いますか」

「えゝ。昨日行かなかつたから今日は少し早く出掛ませう」

お延の言葉遣は平生より鄭寧で片付いてゐた。其所に或落付きがあつた。さうして其落付を裏切る意氣があつた。意氣に伴なふ果斷も遠くに見えた。彼女の中にある心の調子がおのづと態度にあらはれた。

それでも彼女はすぐ出掛ようとはしなかつた。櫛を外して盆を持つたお時を相手に、しばらく岡本の話などをした。もと世話になつた覺のある其家族は、お時にとつても、興味に充ちた題目なので、二人は同じ事を繰り返すやうにして迄、よく彼等に就いて語り合つた。ことに津田のゐない時はさうであつた。といふのは、もし津田がゐると、ある場合には、彼一人が除外物にされたやうな變な結果に陥るからであつた。不圖した拍子からそんな氣下味い思ひを一二度経験した後で、其所に氣を付け出したお延は、その外にまだ、富裕な自分の身内を自慢らしく吹聴したがる女と夫から解釋される不快を避けなければならぬ理由もあつたので、お時にもかねて其旨を言ひ含めて置いたのである。

「御嬢さまはまだ何處へもお極りになりませんので御座いますか」

「何だかそんな話もあるやうだけれどもね、まだ何うなるか能く解らない様子だよ」

「早く好い所へ入らつしやるやうになると、結構で御座いますかね」

「大方もう直でせう。叔父さんはあんな性急だから。それに繼子さんはあたしと違つて、あゝいふ器量好しだしね」

お時は何か云はうとした。お延は下女のお世辭を受けるのが苦痛だつたので、すぐ自分で其後を付けた。

「女は何うしても器量が好くないと損ね。いくら伶俐でも、氣が利いてゐても、顔が悪いと男には嫌はれる丈ね」

「そんな事は御座いません」

お時が辯護するやうに強く斯ういつたので、お延は猶自分を主張しなくなつた。

「本當よ。男はそんなものなのよ」

「でも、それは一時の事で、年を取ると左うは参りますまい」

お延は答へなかつた。然し彼女の自信はそんな弱いものではなかつた。

「本當にあたしのやうな不器量なものは、生れ變つてでも來なくつちや仕方がない」

お時は呆れた顔をしてお延を見た。

「奥様が不器量なら、わたくしなんか何といへば可いので御座いませう」

お時の言葉はお世辭でもあり、眞實でもあつた。兩方の度合をよく心得てゐたお延は、それで満足して立ち上つた。

彼女が外出のため着物を着換へてゐると、戶外から誰か來たらしい足音がして玄關の號鈴が鳴つた。取次に出たお時に、「一寸奥さんに」といふ聲が聞こえた。お延は其聲の主を判斷しようとして首を傾けた。

八十一

暗明

袖を口へ當ててくすくす笑ひながら茶の間へ駆け込んで來たお時は、容易に客の名を云はなかつた。彼女はたゞ可笑しさを噛み殺さうとして、お延の前で悶え苦しんだ。わづか「小林」とい

ふ言葉を口へ出すのでさへ餘程手間取つた。

此不時の訪問者を何う取り扱つて可いか、お延は解らなかつた。厚い帯を締めかけてゐるので、自分がすぐ玄關へ出る譯に行かなかつた。といつて、掛取でも待たせて置くやうに、何時迄も彼を其所に立たせるのも不作法であつた。妾見の前に立ち竦んだ彼女は當惑の眉を寄せた。仕方がないので、今出掛だから、ゆつくり會つてはゐられないがとわざわざ斷らした後で、彼を座敷へ上げた。然し會つて見ると、滿更知らない顔でもないので、用丈聽いてすぐ歸つて貰ふ事も出来なかつた。其上小林は斟酌だの遠慮だのを知らない點にかけて、大抵の人に引を取らないように、天から生み付けられた男であつた。お延の時間が逼つてゐるのを承知の癖に、彼は相手さへ悪い顔をしなければ、何時迄坐り込んでゐても差支ないものと獨りで合點してゐるらしかつた。

彼は津田の病氣を能く知つてゐた。彼は自分が今度地位を得て朝鮮に行く事を話した。彼のいふ所によれば、其地位は未來に希望のある重要なものであつた。彼は又探偵に跟けられた話をした。それは津田と一所に藤井から歸る晩の出来事だと云つて、驚ろいたお延の顔を面白さうに眺めた。彼は探偵に跟けられるのが自慢らしかつた。大方社會主義者として目指されてゐるのなら

うといふ説明迄して聽かせた。

彼の談話には氣の弱い女に衝撃を與へるやうな部分があつた。津田から何にも聞いてゐないお延は、怖々ながらつい其所に釣り込まれて大切な時間を度外に置いた。然し彼の云ふ事を素直にはいはい聽いてゐると何處迄行つても果しがなかつた。仕舞には此方から催促して、早く向ふに用事を切り出させるやうに仕向けるより外に途がなくなつた。彼は少し極りの悪さうな様子をして漸く用向を述べた。それは昨夕お延とお時をさんざ笑はせた外套の件に外ならなかつた。

「津田君から貰ふつていふ約束をしたもんですから」

彼の主意は朝鮮へ立つ前一寸其外套を着て見て、もしあんまり自分の身體に合はないやうなら今のうちに直させたいといふのであつた。

お延はすぐ入用の品を箆笥の底から出して遣らうかと思つた。けれども彼女はまだ津田から何にも聞いてゐなかつた。

「何うせもう着る事なんかならうとは思ふんですが」といつて逡巡つた彼女は、こんな事に案外八釜しい夫の氣性を能く知つてゐた。着古した外套一つが本で、他日細君の手落呼はりなど

をされた日には耐らないと思つた。

「大丈夫ですよ、呉れるつて云つたに違ないんだから。嘘なんか吐きやしませんよ」
出して遣らないと小林を嘘吐としてしまふやうなものであつた。

「いくら酔拂つてゐたつて氣は確なんですからね。どんな事があつたつて貰ふ物を忘れるやうな僕ぢやありませんよ」

お延はとう／＼決心した。

「ぢや少時待つて、下さい。電話で一才病院へ聞き合せて遣りますから」

「奥さんは實に几帳面ですね」と云つて小林は笑つた。けれどもお延の暗に恐れてゐた不愉快さうな表情は、彼の顔の何處にも認められなかつた。

「たゞ念のためにですよ。あとでわたくしが又何とか云はれると困りますから」

お延はそれでも小林が氣を悪くしない用心に、斯んな辯解がましい事を附け加へずにはゐられなかつた。

お延が自働電話へ駈け付けて津田の返事を持つて來る間、二人は猶對坐した。さうして彼女の

歸りを待ち受ける時間を談話で繋いだ。所が其談話は突然な閃めきで、何にも豫期してゐなかつたお延の心臓を躍らせた。

八十二

「津田君は近頃大分大人しくなつたやうですね。全く奥さんの影響でせう」

お延が出て行くや否や、小林は藪から棒に斯んな事を云ひ出した。お延は相手が相手なので、當らず障らずの返事をして置くに限ると思つた。

「さうですか。私自身ぢや影響なんか丸でないやうに思つて居りますがね」

「何うして、何うして。丸で人間が生れ變つたやうなものです」

小林の云ひ方が餘り大袈裟なので、お延は却つて相手を冷評し返して遣りたくなつた。然し彼女の氣位がそれを許さなかつたので、彼女はわざと黙つてゐた。小林はまたそんな事を顧慮する男ではなかつた。秩序も段落も構はない彼の話題は、突飛に此所彼所を駈け回る代りに、時としては不作法な位一直線に進んだ。

「矢ッ張細君の力には敵いませんね、何んな男でも。——僕のやうな獨身ものには、殆んど想像が付かないけれども、何かあるんでせうね、其所に」

お延はとう／＼自分を抑える事が出来なくなつた。彼女は笑ひ出した。

「えゝあるわ。小林さんなんかには逆も見當の付かない神秘的なものが澤山あるわ、夫婦の間には」

「あるなら一つ教へて頂きたいもんですわ」

「獨りものが教はつたつて何にもならないぢやありませんか」

「参考になりますよ」

お延は細い眼のうちに、賢こさうな光りを見せた。

「それよりあなた御自分で奥さんをお貰ひになるのが、一番捷徑ぢやありませんか」

小林は頭を搔く眞似をした。

「貰ひたくつても貰へないんです」

「何故」

「來て呉れ手がなければ、自然貰へない譯ぢやありませんか」

「日本は女の餘つてる國よ、あなた。お嫁なんか何んなのでも其所いらにごろ／＼轉がつてるぢやありませんか」

お延は斯う云つたあとで、是は少し云ひ過ぎたと思つた。然し相手は平氣であつた。もつと強くて烈しい言葉に平生から慣れ抜いてゐる彼の神經は全く無感覺であつた。

「いくら女が餘つてゐても、是から駈け落しようといふ矢先ですからね、來ッこありませんよ」

駈落といふ言葉が、不圖芝居で遣る男女二人の道行をお延に想ひ起させた。左右した濃厚な戀愛を象どる艶めかしい歌舞伎姿を、ちらりと胸に描いた彼女は、それと全く縁の遠い、他の着古した外套を貰ふために、今自分の前に坐つてゐる小林を見て微笑した。

「駈落をなさるのなら、一層二人でなすつたら可いでせう」

「誰とです」

「そりや極つてゐますわ。奥さんの外に誰も伴れて入らつしやる方はないぢやありませんか」

「へえ」

小林は斯う云つたなり畏まつた。その態度が全くお延の豫期に外れてゐたので、彼女は少し驚ろかされた。さうして却つて豫期以上可笑しくなつた。けれども小林は眞面目であつた。しばらく間を置いてから獨り言のやうな口調で、彼は妙なことを云ひ出した。

「僕だつて朝鮮三界迄断落のお供をして呉れるやうな、實のある女があれば、斯んな變な人間にならないで、濟んだかも知れませんか。實を云ふと、僕には細君がないばかりぢやないんです。何にもないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もつと廣く云へば人間がないんだとも云はれるでせうが」

お延は生れて初めての人に會つたやうな氣がした。斯んな言葉をまだ誰の口からも聞いた事のない彼女は、其表面上の意味を理解する丈でも困難を感じた。相手を何う捌なして可いかの點になると、全く方角が立たなかつた。すると小林の態度は猶感慨を帯びて來た。

「奥さん、僕にはたつた一人の妹があるんです。外に何にもない僕には、其妹が非常に貴重に見えるのです。普通の人の場合より何の位貴重だか分りやしません。それでも僕は其妹を置いて

行かなければならないのです。妹は僕のとへ何處迄も喰ツ付いて來たがります。然し僕はまた妹をどうしても伴れて行く事が出來ないので。二人一所に居るよりも、二人離れ々々になつてゐる方が、まだ安全だからです。人に殺される危険がまだ少ないからです」

お延は少し氣味が悪くなつた。早く歸つて來て呉れ、ばいと思ふお時はまだ歸らなかつた。仕方なしに彼女は話題を變へて此壓迫から逃れようと試みた。彼女はすぐ成功した。然しそれがために彼女はまた飛んでもない結果に陥つた。

八十三

特殊の経過を有つた其時の問答は、まづお延の言葉から始まつた。

「然し貴方の仰しやる事は本當なんでせうかね」

小林は果して沈痛らしい今迄の態度をすぐ改めた。さうしてお延の思はく通り向ふから訊き返して來た。

「何がです、今僕の云つた事がですか」

「いゝえ、そんな事ぢやないの」

お延は巧みに相手を岐路に誘ひ込んだ。

「貴方先刻仰やつたでせう。近頃津田が大分變つて來たつて」

小林は元へ戻らなければならなかつた。

「えゝ云ひました。それに違ないから、さう云つたんです」

「本當に津田はそんなに變つたでせうか」

「えゝ變りましたね」

お延は腑に落ちないやうな顔をして小林を見た。小林はまた何か証據でも握つてゐるらしい様子をしてお延を見た。二人がしばらく顔を見合せてゐる間、小林の口元には始終薄笑ひの影が射してゐた。けれどもそれは終に本式の笑ひとなる機會を得ずに消えてしまはなければならなかつた。お延は小林なんぞに調戲はれる自分ぢやないといふ態度を見せたのである。

「奥さん、あなた自分だつて大概氣が付きさうなものぢやありませんか」

今度は小林の方から斯う云つてお延に働らき掛けて來た。お延はたしかに其所に氣が付けてゐ

た。けれども彼女の氣が付けてゐる夫の變化は、全く別のものであつた。小林の考へてゐる、少なくとも彼の口にしてゐる、變化とは丸で反對の傾向を帯びてゐた。津田と一所になつてから、臍氣ながら次第々々に明るくなりつゝあるやうに感ぜられる其變化は、非常に見分けにくい色調の階段をそりりと動いて行く微妙なものであつた。何んな鋭敏な觀察者が外部から覗いても到底判りこない性質のものであつた。さうしてそれが彼女の秘密であつた。愛する人が自分から離れて行かうとする毫釐の變化、もしくは前から離れてゐたのだといふ悲しい事實を、今になつて、そろゝ認め始めたといふ心持の變化。それが何で小林如きものに知れよう。

「一向氣が付きませぬね。あれで何處か變つた所でもあるんでせうか」

小林は大きな聲を出して笑つた。

「奥さんは中々空惚ける事が上手だから、僕なんざあとも敵はない」

「空惚けるつていふのはあなたの事ぢやありませんか」

暗明

「えゝ、まあ、そんなら左右にして置ませう。——然し奥さんはさういふ旨いお手際を有つてゐられるんですね。漸く解つた。それで津田君がああ變化して來るんですね、何うも不思議だ

と思つたら」

お延はわざと取り合はなかつた。と云つて別に煩さい顔もしなかつた。愛嬌を見せた平氣とでもいふやうな態度をとつた。小林はもう一步前へ進み出した。

「藤井さんでもみんな驚ろいてゐますよ」

「何を」

藤井といふ言葉を耳にした時、お延の細い眼が忽ち相手の上に動いた。誘き出されると知りながら、彼女はつい斯ういつて訊き返さなければならなかつた。

「あなたのお手際にです。津田君を手のうちに丸め込んで自由にするあなたの靈妙なお手際にです」

小林の言葉は露骨過ぎた。然し露骨な彼は、わざと愛嬌半分になんかそれをお延の前で披露するらしかつた。お延はつんとして答へた。

「さうですか。わたくしに夫丈の力があるんですかね。自分にや解りませんが、藤井の叔父さんや叔母さんがさう云つて下さるなら、大方本當なんでせうよ」

「本當ですとも。僕が見たつて、誰が見たつて本當なんだから仕方がないぢやありませんか」
「有難う」

お延は左も輕蔑した調子で禮を云つた。其禮の中に含まれてゐた苦々しい響は、小林にとつて全く豫想外のものであるらしかつた。彼はすぐ彼女を宥めるやうな口調で云つた。

「奥さんは結婚前の津田君を御承知ないから、それで自分の津田君に及ぼした影響を自覺なさらないんでせうが、——」

「わたくしは結婚前から津田を知つて居ります」

「然し其前は御存じないでせう」

「當り前ですわ」

「所が僕は其前をちゃんと知つてゐるんですよ」
話は斯んな具合にして、とう／＼津田の過去に溯つて行つた。

自分のまだ知らない夫の領分に這入り込んで行くのはお延にとつて多大の興味に違なかつた。彼女は喜んで小林の談話に耳を傾けようとした。所がいざ聴かうとすると、小林は決して要領を得た事を云はなかつた。云つても肝心の所はわざと畧してしまつた。例へば二人が深夜非常線にかゝつた時の光景には一口觸れるが、さういふ出来事に出合ふ迄、彼等が何處で夜深しをしてゐたかの點になると、彼は故意に暈し去つて、全く語らないといふ風を示した。それを訊けば意味ありげににや／＼笑つて見せる丈であつた。お延は彼がとくに斯うして自分を焦燥してゐるのではなからうかといふ氣さへ起した。

お延は平生から小林を軽く見てゐた。半ば夫の評價を標準に置き、半ば自分の直覺を信用して成立つた此侮蔑の裏には、まだ他に向つて公言しない大きな因子があつた。それは單に小林が貧乏であるといふ事に過ぎなかつた。彼に地位がないといふ點に外ならなかつた。賣れもしない雑誌の編輯、そんなものは極つた職業として彼女の眼に映る筈がなかつた。彼女の見た小林は、常に無籍ものゝやうな顔をして、世の中をうろ／＼してゐた。宿なしらしい愚癡を零して、厭がらせに其所いらをまご付き歩く丈であつた。

然し此種の輕蔑に、ある程度の不氣味は何時でも附物であつた。殊にさういふ階級に馴らされない女、しかも經驗に乏しい若い女には、猶更の事でなければならなかつた。少くとも小林の前には坐つたお延はさう感じた。彼女は今迄に彼位な貧しさの程度の人に合はないとは云へなかつた。然し岡本の宅へ出入りをするそれらの人々は、みんな其分を辨へてゐた。自分には段等があるものと心得て、みんな己れに許された範圍内に於てのみ行動を敢てした。彼女は未だかつて小林のやうに横着な人間に接した例がなかつた。彼のやうに無遠慮に自分に近付いて來るもの、富も位地もない癖に、彼のやうに大きな事を云ふもの、彼のやうに無暗に上流社會の惡體を吐くものには決して會つた事がなかつた。

お延は突然氣が付いた。

「自分の今相手にしてゐるのは、平生考へてゐた通りの馬鹿でなくつて、或は手に餘る擦れツ枯らしぢやなからうか」

輕蔑の裏に潜んでゐる不氣味な方面が強く頭を上げた時、お延の態度は急に改たまつた。すると小林はそれを見届けた証據にか、又はそれに全くの無頓着でか、アは／＼と笑ひ出した。

「奥さんまだ色々残つてますよ。あなたの知りたい事がね」

「さうですか。今日はもう其位で澤山でせう。あんまり一度きに伺つてしまふと、是から先の楽しみがなくなりますから」

「さうですね、ぢや今日は是で切り上げときますかな。あんまり奥さんに氣を揉ませて、歇斯的里でも起されると、後でまた僕の責任だなんて、津田君に恨まれる丈だから」

お延は後を向いた。後は壁であつた。それでも茶の間に近い其見當に、彼女はお時の消息を聞かうとする努力を見せた。けれども勝手口は今迄通り静かであつた。疾うに歸るべき筈のお時はまだ歸つて來なかつた。

「何うしたんでせう」

「なに今に歸つて來ますよ。心配しないで迷兒になる氣遣はないから大丈夫です」

小林は動かうともしなかつた。お延は仕方がないので、茶を淹れ代へるのを口實に、席を立たうとした。小林はそれさへ遮ぎつた。

「奥さん、時間があるなら、退屈凌ぎに幾らでも先刻の續きを話しますよ。喋舌つて潰すのも、

黙つて潰すのも、何うせ僕見たいな穀潰しにや、同なし時間なんだから、ちつとも御遠慮にや及びません。何うです、津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないやうな水臭い所が大分あるんでせう」

「あるかも知れせんね」

「あゝ見えて中々淡泊でないからね」

お延ははつと思つた。腹の中で小林の批評を首肯はない譯に行かなかつた彼女は、それが中つてゐる丈に猶の事感情を害した。自分の立場を心得ない何といふ不作法な男だらうと思つて小林を見た。小林は平氣で前の言葉を繰り返した。

「奥さんあなたの知らない事がまだ澤山ありますよ」

「あつても宜しいぢや御座いませんか」

「いや、實はあなたの知りたいと思つてる事がまだ澤山あるんですよ」

「あつても構ひません」

「ぢや、あなたの知らなければならぬ事がまだ澤山あるんだと云ひ直したら何うです。それ

でも構ひませんか」

「え、構ひません」

八十五

小林の顔には皮肉の渦が漲つた。進んでも退いても此方のものだといふ勝利の表情がありありと見えた。彼は其瞬間の得意を永久に引き延ばして、何時迄も自分で眺め暮したいやうな素振さへ示した。

「何といふ陋劣な男だらう」

お延は腹の中で斯う思つた。さうして少時の間凝と彼と睨めつ競をしてゐた。すると小林の方から又口を利き出した。

「奥さん津田君が變つた例証として、是非あなたに聴かせなければならぬ事があるんですが、餘まりおびえてゐらつしやる様だから、それは後廻しにして、其反對の方、即ち津田君がちつとも變らない所を少し御参考迄にお話して置きますよ。是は厭でも私の方で是非奥さんに聴いて頂

きたいのです。——何うです聴いて下さいますか」

お延は冷淡に「何うともあなたの御隨意に」と答へた。小林は「有難い」と云つて笑つた。

「僕は昔から津田君に輕蔑されてゐました。今でも津田君に輕蔑されてゐます。先刻からいふ通り津田君は大變變りましたよ。けれども津田君の僕に對する輕蔑丈は昔も今も同様なのです。毫も變らないのです。是丈はいくら伶俐な奥さんの感化力でも何うする譯にも行かないと見えま

すね。尤もあなた方から見たら、それが理の當然なんでせうけれどもね」

小林は其所で言葉を切つて、少し苦しうなお延の笑ひ顔に見入つた。それから又續けた。

「いや別に變つて貰ひたいといふ意味ぢやありませんよ。其點について奥さんの御盡力を仰ぐ氣は毛頭ないんだから、御安心なさい。實をいふと、僕は津田君にばかり輕蔑されてゐる人間ぢやないんです。誰にでも輕蔑されてゐる人間なんです。下らない女に迄輕蔑されてゐるんです。有體に云へば世の中全體が寄つてたかつて僕を輕蔑してゐるんです」

小林の眼は据わつてゐた。お延は何といふ事も出来なかつた。

「まあ」

「それは事實です。現に奥さん自身でもそれを腹の中で認めてゐらつしやるぢやありませんか」
「そんな馬鹿な事があるもんですか」

「そりや口の先では、さう仰しやらなければならぬでせう」

「あなたも随分僻んでゐらつしやるのね」

「え、僻んでるかも知れません。僻まうが僻むまいが、事實は事實ですからね。然しそりや何うでも可いんです。もと／＼無能に生れ付いたのが悪いんだから、いくら輕蔑されたつて仕方がありません。誰を恨む譯にも行かないのでせう。けれども世間からのべつにさう取り扱はれ付けて来た人間の心持を、あなたは御承知ですか」

小林は何時迄もお延の顔を見て返事を待つてゐた。お延には何もいふ事がなかつた。丸つ切り同情の起り得ない相手の心持、それが自分に何の關係があらう。自分には又自分で考へなければならぬ問題があつた。彼女は小林のために想像の翼さへ伸ばして遣る氣にならなかつた。其様子を見た小林はまた「奥さん」と云ひ出した。

「奥さん、僕は人に厭がられるために生きてゐるんです。わざ／＼人の厭がるやうな事を云つ

たり爲たりするんです。左うでもしなければ苦しくつて堪らないんです。生きてゐられないのです。僕の存在を人に認めさせる事が出来ないんです。僕は無能です。幾ら人から輕蔑されても存分な辭討が出来ないんです。仕方がないから責めて人に嫌はれてでも見ようと思ふのです。それが僕の志願なのです」

お延の前に丸で別世界に生れた人の心理状態が描き出された。誰からでも愛されたい、又誰からでも愛されるやうに仕向けて行きたい、ことに夫に對しては、是非共左右しなければならぬ、といふのが彼女の腹であつた。さうしてそれは例外なく世界中の誰にでも當て倅つて、毫も悖らないものだ、彼女は最初から信じ切つてゐたのである。

「吃驚した様ぢやありませんか。奥さんはまだそんな人に會つた事がないんでせう。世の中には色々の人がありますからね」

小林は多少溜飲の下りたやうな顔をした。

「奥さんは先刻から僕を厭がつてゐる。早く歸れば可い、歸れば可いと思つてゐる。所が何うした譯か、下女が歸つて來ないもんだから、仕方なしに僕の相手になつてゐる。それがちやんと

僕には分るんです。けれども奥さんはたゞ僕を厭な奴だと思ふ丈で、何故僕がこんな厭な奴になつたのか、其原因を御承知ない。だから僕が一寸其所を説明して上げたのです。僕だつてまさか生れたてから斯んな厭な奴でもなかつたんでせうよ、よくは分りませんけれどもね」
小林は又大きな聲を出して笑つた。

八十六

お延の心は此不思議な男の前に入り亂れて移つて行つた。一には理解が起らなかつた。二には同情が出なかつた。三には彼の眞面目さが疑はれた。反抗、畏怖、輕蔑、不審、馬鹿らしさ、嫌惡、好奇心、——雜然として彼女の胸に交錯した色々なものは決して一點に纏まる事が出来なかつた。従つてたゞ彼女を不安にする丈であつた。彼女は仕舞に訊いた。

「ぢやあなたは私を厭がらせるために、わざ／＼此所へ入らしたと言明なさるんですね」

「いや目的は左右ぢやありません。目的は外套を貰ひに来たんです」

「ぢや外套を貰ひに来た序に、私を厭がらせようと仰しやるんですか」

「いや左右でもありません。僕は是で天然自然の積なんですからね。奥さんよりも餘程技巧は少ないと思つてゐるんです」

「そんな事は何うでも、私の間にはつきりお答へになつたら可いぢやありませんか」

「だから僕は天然自然だと云ふのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるやうになるといふ丈なのです」

「詰りそれがあなたの目的でせう」

「目的ぢやありません。然し本望かも知れません」

「目的と本望と何所が違ふんです」

「違ひませんかね」

お延の細い眼から憎惡の光が射した。女だと思つて馬鹿にするなといふ氣性がありありと瞳子の裏に宿つた。

「怒つちや不可せん」と小林が云つた。「僕は自分の小さな料簡から敵打をしてるんぢやないといふ意味を、奥さんに説明して上げた丈です。天がこんな人間になつて他を厭がらせて遣れと

僕に命ずるんだから仕方がないと解釋して頂きたいので、わざ／＼さう云つたのです。僕は僕に悪い目的はちつともない事をあなたに承認して頂きたいのです。僕自身は始めから無目的だといふ事を知つて置いて頂きたいのです。然し天には目的があるかも知れません。さうして其目的が僕を動かしてゐるかも知れません。それに動かされる事が又僕の本望かも知れません」

小林の筋の運び方は、少し困絡かり過ぎてゐた。お延は彼の論理の間隙を突く丈に頭が鍊れてゐなかつた。といつて無條件で受け入れて可いか悪いかを見分ける程整つた脳力も有たなかつた。それでゐて彼女は相手の吹き掛ける議論の要點を掴む丈の才氣を充分に具へてゐた。彼女はすぐ小林の主意を一口に纏めて見せた。

「ぢやあなたは人を厭がらせる事は、いくらでも厭がらせるが、それに對する責任は決して負はないといふんでせう」

「え、其所です。其所が僕の要點なんです」

「そんな卑怯な——」

「卑怯ぢやありません。責任のない所に卑怯はありません」

「ありますとも。第一此私があなたに對して何んな悪い事をした覺があるんでせう。まあそれから伺ひますから、云つて御覽なさい」

「奥さん、僕は世の中から無籍もの扱ひにされてゐる人間ですよ」

「それが私や津田に何の關係があるんです」

小林は待つてたと云はぬ許りに笑ひ出した。

「あなた方から見たら大方ないでせう。然し僕から見れば、あり過る位あるんです」

「何うして」

小林は急に答へなくなつた。其意味は宿題にして自分でよく考へて見たら可からうと云ふ顔付をした彼は、黙つて烟草を吹かし始めた。お延は一層の不快感を感じた。もう好い加減に歸つて呉れと云ひたくなつた。同時に小林の意味もよく突き留めて置きたかつた。それを見抜いて、わざと高を括つたやうに落付いてゐる小林の態度がまた癢に障つた。其所へ先刻から心待ちに待ち受けてゐたお時が漸く歸つて來たので、お延の蟠まりは、一定した様式の下に表現される機會の來ない先に又崩されて仕舞はなければならなかつた。

お時は縁側へ坐つて外部から障子を開けた。

「只今。大變遅くなりました。電車で病院迄行つて参りましたものですから」

お延は少し腹立たしい顔をしてお時を見た。

「ぢや電話は掛けなかつたのかい」

「いゝえ掛けたんで御座います」

「掛けても通じなかつたのかい」

問答を重ねてゐるうちに、お時の病院へ行つた意味が漸くお延に呑み込めるやうになつて來た。

「始め通じなかつた電話は、仕舞に通じる丈は通じてても用を辨する事が出来なかつた。看護婦を呼び出して用事を取次いで貰はうとしたが、それすらお時の思ふようにはならなかつた。書生だか薬局員だか、始終相手になつて、何か云ふけれども、それが又ちつとも要領を得なかつた。第一言語が不明瞭であつた。それから判切聞こえる所も辻褄の合はない事だらけだつた。要する

に其男はお時の用事を津田に取次いで呉れなかつたらしいので、彼女はとう／＼諦らめて、電話箱を出てしまつた。然し義務を果さないで其儘宅へ歸るのが厭だつたので、すぐ其足で電車へ乗つて病院へ向つた。

「一旦歸つて、伺つてからにしようかと思ひましたけれども、たゞ時間が長く掛るぎりで御座いますし、それにお客さまが斯うして待つておいでの事をなまじい存じて居るもので御座いますから」

お時のいふ事は尤もであつた。お延は禮を云はなければならなかつた。然しそのために、小林から散々厭な思ひをさせられたのだと思ふと、氣を利かした下女が却つて恨めしくもあつた。

彼女は立つて茶の間へ入つた。すぐ其所に据ゑられた銅の金具の光る重ね箆笥の一番下の抽斗を開けた。さうして底の方から問題の外套を取り出して來て、それを小林の前へ置いた。

「是でせう」

「えゝ」と云つた小林はすぐ外套を手にとつて、品物を改める古着屋のやうな眼で、それを引ツ繰返した。

「思つたより大分汚れてゐますね」

「あなたにやそれで澤山だ」と云ひたかつたお延は、何にも答へずに外套を見詰めた。外套は小林のいふ通り少し色が變つてゐた。襟を返して日に當らない所を他の部分と比較して見ると、それが著るしく目立つた。

「何うせたく貫ふんだからさう贅澤も云へませんかね」

「お氣に召さなければ、何うぞ御遠慮なく」

「置いて行けと仰しやるんですか」

「えゝ」

小林は矢ツ張り外套を放さなかつた。お延は痛快な氣がした。

「奥さん一寸此所で着て見ても可ござんすか」

「えゝ、えゝ」

お延はわざと反對を答へた。さうして窮屈さうな袖へ、藻掻くやうにして手を通す小林を、坐つたまゝ皮肉な眼で眺めた。

「何うですか」

小林は斯う云ひながら、脊中をお延の方に向けた。見苦しい曇み皺が幾筋もお延の眼に入つた。アイロンの注意でもして遣るべき所を、彼女は又逆に行つた。

「丁度好いやうですね」

彼女は誰も自分の傍にゐないので、折角出来上つた滑稽な後姿も、眼と眼で笑つて遣る事が出来ないので物足りなく思つた。

すると小林がまたぐりと向き直つて、外套を着たなり、お延の前にどつさり胡坐をかいた。

「奥さん、人間はいくら變な着物を着て人から笑はれても、生きてゐる方が可いものなんですよ」

「さうですか」

お延は急に口元を締めた。

「奥さんのやうな窮つた事のない方にや、まだ其意味が解らないでせうがね」

「さうですか。私はまた生きてゝ人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好いと思ひま

す」

小林は何にも答へなかつた。然し突然云つた。

「有難う。御蔭で此冬も生きてゐられます」

彼は立ち上つた。お延も立ち上つた。然し二人が前後して座敷から縁側へ出ようとするとき、

小林は忽ち振り返つた。

「奥さん、あなたさういふ考へなら、能く氣を付けて他に笑はれないようにしないと不可ませんよ」

八十八

二人の顔は一尺足らずの距離に接近した。お延が前へ出ようとする途端、小林が後を向いた拍子、二人は其所で急に運動を中止しなければならなかつた。二人はびたりと止まつた。さうして顔を見合せた。といふよりも寧ろ眼と眼に見入つた。

其時小林の太い眉が一層際立つてお延の視覚を侵した。下にある黒瞳は凝と彼女の上に据ゑら

れた儘動かなくなつた。それが何を物語つてゐるかは、此方の力で動かして見るより外に途はなかつた。お延は口を切つた。

「餘計な事です。あなたからそんな御注意を受ける必要はありません」

「注意を受ける必要がないのぢやありませんまい。大方注意を受ける覺がないと仰しやる積なんでせう。そりやあなたは固より立派な貴婦人に違ないかも知れません。然し——」

「もう澤山です。早く歸つて下さい」

小林は應じなかつた。問答が咫尺の間に起つた。

「然し僕のいふのは津田君の事です」

「津田が何うしたといふんです。わたくしは貴婦人だけれども、津田は紳士でないと仰しやるんですか」

「僕は紳士なんて何んなものか丸で知りません。第一そんな階級が世の中に存在してゐる事を、僕は認めてゐないのです」

「認めようと認めまいと、そりやあなたの御隨意です。然し津田が何うしたといふんです」

「聞きたいですか」

鋭い稲妻がお延の細い眼からまともに迸しつた。

「津田はわたくしの夫です」

「さうです。だから聞きたいでせう」

お延は齒を嚙んだ。

「早く歸つて下さい」

「え、歸ります。今歸る所です」

小林は斯う云つたなりすぐ向き直つた。玄關の方へ行かうとして縁側を二足ばかりお延から遠ざかった。其後姿を見て堪らなくなつたお延は又呼び留めた。

「お待ちなさい」

「何ですか」

小林はのつそり立ち留つた。さうして袴の長過ぎる古外套を着た両手を前の方に出して、ポンチ繪に似た自分の姿を鑑賞でもするやうに眺め廻した後で、にやにやと笑ひながらお延を見た。

お延の聲は猶鋭くなつた。

「何故黙つて歸るんです」

「御禮は先刻云つた積ですがね」

「外套の事ぢやありません」

小林はわざと空々しい様子をした。はてなと考へる態度迄粧つて見せた。お延は詰責した。

「あなたは私の前で説明する義務があります」

「何をですか」

「津田の事をです。津田は私の夫です。妻の前で夫の人格を疑ぐるやうな言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗に説明するのは、あなたの義務ぢやありませんか」

「でなければそれを取消す丈の事でせう。僕は義務だの責任だのつて感じの少ない人間だから、あなたの要求通り説明するのは困難かも知れないけれども、同時に耻を耻と思はない男として、一旦云つた事を取り消す位は何でもありません。——ぢや津田君に對する失言を取消しませう。さうしてあなたに詫まりませう。左右したら可いでせう」

お延は黙然として答へなかつた。小林は彼女の前に姿勢を正しくした。
「こゝに改めて言明します。津田君は立派な人格を具へた人です。紳士です。(もし社會にさういふ特別な階級が存在するならば)」

お延は依然として下を向いた儘口を利かなかつた。小林は語を續けた。

「僕は先刻奥さんに、人から笑はれないように能く氣をお付けになつたら可からうといふ注意を與へました。奥さんは僕の注意などを受ける必要がないと云はれました。それで僕も其後を話す事を遠慮しなければならなくなりました。考へると是も僕の失言でした。併せて取消します。其他もし奥さんの氣に障つた事があつたら、總て取消します。みんな僕の失言です」

小林は斯う云つた後で、沓脱に揃へてある自分の靴を穿いた。さうして格子を開けて外へ出る最後に、また振り向いて「奥さんさよなら」と云つた。

微かに黙禮を返したぎり、お延は何時迄もぼんやり其所に立つてゐた。それから急に二階の梯子段を駆け上つて、津田の机の前に坐るや否や、其上に突ツ伏してわつと泣き出した。

八十九

幸ひにお時が下から上つて來なかつたので、お延は憚りなく當座の目的を達する事が出來た。彼女は他に顔を見られずに思ふ存分泣けた。彼女が満足する迄自分を泣き盡した時、涙はおのづから乾いた。

濡れた手巾を袂へ丸め込んだ彼女は、いきなり机の抽斗を開けた。抽斗は二つ付いてゐた。然しそれを順々に調べた彼女の眼には別段目新しい何物も映らなかつた。それも其筈であつた。彼女は津田が病院へ入る時、彼に入用の手荷物を纏めるため、二三日前既に其所を搜したのである。彼女は残された封筒だの、物指だの、會費の受取だのを見て、それを又一々鄭寧に揃へた。パナマや麥藁製の色々な帽子が石版で印刷されてゐる廣告用の小冊子めいたものが、二人で銀座へ買物に行つた初夏の夕暮を思ひ出させた。其時夏帽を買ひに立寄つた店から津田が貰つて歸つた此見本には、眞赤に咲いた日比谷公園の躑躅だの、突當りに霞が關の見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂よはせてゐる高い柳などが、離れにくい過去の匂のやうに、聯想として付

き纏はつてゐた。お延はそれを開いた儘、しばらく凝と考へ込んだ。それから急に思ひ立つたやうに机の抽斗をがちやりと閉めた。

机の横には同じく直線の多い様式で造られた本箱があつた。其所にも抽斗が二つ付いてゐた。机を棄てたお延は、すぐ本箱の方に向つた。然しそれを開けやうとして、手を環に掛けた時、抽斗は双方とも何の抵抗もなく、する／＼と抜け出したので、お延は中を調べない先に、まづ失望した。手應へのない所に、新しい発見のある筈はなかつた。彼女は書き古したノートブックのやうなものをいたづらに攪き廻した。それを一々讀んで見るのは大變であつた。讀んだ所で自分の知らうと思ふ事が、そんな筆記の底に潜んでゐやうとは想像出来なかつた。彼女は用心深い夫の性質を能く承知してゐた。錠を卸さない秘密を其所いらへ放り出して置くには、あまりに細か過ぎるのが彼の持前であつた。

お延は戸棚を開けて、錠を掛けたものが何處かにないかといふ眼付をした。けれども中には何にもなかつた。上には殺風景な我樂多が、無器用に積み重ねられてゐる丈であつた。下は長持で一杯になつてゐた。

再び机の前に取つて返したお延は、其上に乗せてある状態の中から、津田宛で来た手紙を抜き取つて、一々調べ出した。彼女はそんな所に、何にも怪しいものが落ちてゐる筈がないとは思つた。然し一番最初眼に付きながら、手さへ觸れなかつた幾通の書信は、矢つ張り最後に眼を通すべき性質を帯びて、彼女の注意を誘ひつゝ、何時迄も其所に残つてゐたのである。彼女はつい念のためといふ口實の下に、それへ手を出さなければならなくなつた。

封筒が次から次へと裏返された。中身が順々に繰りひろげられた。或は四半分、或は半分、残るものは全部、悉くお延によつて黙讀された。しかる後彼女はそれを元通りの順で、元通りの位置に復した。

突然疑惑の焰が彼女の胸に燃え上つた。一束の古手紙へ油を濺いで、それを綺麗に庭先で焼き盡してゐる津田の姿が、あり／＼と彼女の眼に映つた。其時めら／＼と火に化して舞ひ上る紙片を、津田は恐ろしさうに、竹の棒で抑へ付けてゐた。それは初秋の冷たい風が肌を吹き出した頃の出来事であつた。さうしてある日曜の朝であつた。二人差向ひで食事を済ましてから、五分と経たないうちに起つた光景であつた。箸を置くと、すぐ二階から細い紐で絡げた包を抱へて下り

て来た津田は、急に勝手口から庭先へ廻つたと思ふと、もう其包に火を點けてゐた。お延が縁側へ出た時には、厚い上包が既に焦げて、中にある手紙が少しばかり見えてゐた。お延は津田に何でそれを焼き捨てるのかと訊いた。津田は嵩ばつて始末に困るからだと答へた。何故反故にして、自分達の髪を結ふ時などに使はせないのかと尋ねたら、津田は何とも云はなかつた。たゞ底から現はれて来る手紙を無暗に竹の棒で突ツついた。突ツつたたびに、火になり切れない濃い烟が渦を巻いて棒の先に起つた。渦は青竹の根を隠すと共に、抑へつけられてゐる手紙をも隠した。津田は烟に咽ぶ顔をお延から背けた。……

お延が午飯の催促に上つて来る迄、お延は斯んな事を考へつゞけて作りつけの人形のやうに凝と坐り込んでゐた。

九十

時間はいつか十二時を過ぎてゐた。お延は又お時の給仕で獨り膳に向つた。それは津田の會社へ出た留守に、二人が毎日繰り返す日課に外ならなかつた。けれども今日のお延は何時ものお延

ではなかつた。彼女の様子は剛張つてゐた。其癖心は纏まりなく動いてゐた。先刻出掛ようとして着換へた着物迄、平生と違つた餘所行の氣持を餘分に添へる媒介となつた。

若し今の自分に觸れる問題が、お時の口から洩れなかつたなら、お延は遂に一言も云はずに、食事を済ましてしまつたかも知れなかつた。其食事さへ、實を云ふと、丸で氣が進まなかつたのを、お時に疑ぐられるのが厭さに、ほんの形式的に片付けようとして、膳に着いた丈であつた。お時何だか遠慮でもするやうに、わざと談話を控へてゐた。然しお延が一膳で箸を置いた時、漸く「何うか遊ばしましたか」と訊いた。さうしてたゞ「いゝえ」といふ返事を受けた彼女は、すぐ膳を引いて勝手へ立たなかつた。

「何うも済みませんでした」

彼女は自分の専斷で病院へ行つた詫を述べた。お延はお延でまた彼女に尋ねたい事があつた。

「先刻は随分大きな聲を出したでせう。下女部屋の方迄聞こえたかい」

「いゝえ」

お延は疑りの眼をお時の上に注いだ。お時はそれを避けるやうにすぐ云つた。

「あのお客さまは、随分——」

然しお延は何にも答へなかつた。靜かに後を待つてゐる丈なので、お時は自分の方で後を付けなければならなかつた。二人の談話は是が緒口で先へ進んだ。

「旦那様は驚ろいてゐらつしやいました。随分非道い奴だつて。此方から取りに來いとも何とも云はないのに、斷りもなく奥様と直談判を始めたり何かして、しかも自分が病院に入つてゐる事を能く承知してゐる癖につて」

お延は輕蔑んだ笑ひを微かに洩らした。然し自分の批評は加へなかつた。

「まだ外に何か仰しやりやしなかつたかい」

「外套丈遣つて早く返せつて仰しやいました。それから奥さんと話しをしてゐるかとお訊きになりますから、話しをしてゐらつしやいますと申し上げましたら、大變厭な顔をなさいました」

「さうかい。それぎりかい」

「いえ、何を話してゐるのかとお訊きになりました」

「それでお前は何とお答へをしたの」

「別にお答へをしようが御座いせんから、それは存じませんと申し上げました」

「さうしたら」

「さうしたら、猶厭な顔をなさいました。一體座敷なんかへ無暗に上り込ませるのが間違つてゐる——」

「そんな事を仰やつたの。だつて昔からのお友達なら仕方がないぢやないの」

「だから私もさう申し上げたので御座いました。それに奥さまは丁度お召換をしてゐらつしやいましたので、すぐ玄關へお出になる譯に行かなかつたのだから已を得ませんで」

「さう。さうしたら」

「さうしたら、お前はもと岡本さんにゐた丈あつて、奥さんの事といふと、何でも熱心に辯護するから感心だつて、冷評かされました」

お延は苦笑した。

「何うも御氣の毒さま。それつきり」

「いえ、まだ御座います。小林は酒を飲んでやしなかつたかとお訊きになるんです。私は能く

気が付きませんでしたけれど、お正月でもないのに、まさか朝つばらから酔拂つて、他の家へ
お客に入らつしやる方もあるまいと思ひましたから、――」

「酔つちやゐらつしやらないと云つたの」

「え、」

お延はまだ後があるだらうといふ様子を見せた。お時は果して話を其所で切り上げなかつた。

「奥さま、あの旦那様が、歸つたら能く奥さまに左右云へと仰やいました」

「なんと」

「あの小林つて奴は何をいふか分らない奴だ、ことに酔うとあぶない男だ。だから、あいつが
何を云つても決して取り合つちや不可い。まあみんな嘘だと思つてゐれば間違はないんだからつ
て」

「さう」

お延は是以上何も云ふ氣にならなかつた。お時は一人でげら／＼笑つた。

「堀の奥さまも傍で笑つてゐらつしやいました」

お延は始めて津田の妹が今朝病院へ見舞に来てゐた事を知つた。

九十一

お延より一つ年上の其妹は、もう二人の子持であつた。長男は既に四年前に生れてゐた。單
に母であるといふ事實が、彼女の自覺を呼び醒ますには充分であつた。彼女の心は四年以來何時
でも母であつた。母でない日はたゞの一日もなかつた。

彼女の夫は道樂ものであつた。さうして道樂ものに能く見受けられる寛大の氣性を具へてゐた。
自分が自由に遊び廻る代りに、細君にも六づかしい顔を見せない、と云つて無暗に可愛がりもし
ない。是が彼のお秀に對する態度であつた。彼はそれを得意にしてゐた。道樂の修業を積んで始
めてさういふ境界に達せられるもののやうに考へてゐた。人世觀といふ嚴めしい名を付けて然る
べきものを、もし彼が有つてゐるとすれば、それは取りも直さず、物事に生温く觸れて行く事
であつた。微笑して過ぎる事であつた。何にも執着しない事であつた。呑氣に、づぼらに、淡泊に、
鷹揚に、善良に、世の中を歩いて行く事であつた。それが彼の所謂通であつた。金に不自由のな

い彼は、今迄それ丈で押し通して来た。又何處へ行つても不足を感じなかつた。此好成績が益彼を樂天的にした。誰からでも好かれてゐるといふ自信を有つた彼は、無論お秀からも好かれてゐるに違ないと思ひ込んでゐた。さうしてそれは間違でも何でもなかつた。實際彼はお秀から嫌はれてゐなかつたのである。

器量望みで貰はれたお秀は、堀の所へ片付いてから始めて夫の性質を知つた。放蕩の酒で臟腑を洗濯されたやうな彼の趣も漸く解する事が出来た。斯んなに拘泥の少ない男が、また何の必要があつて、是非自分を貰ひたいなどと、真面目に云ひ出したものだらうかといふ不審さへ、すぐ有耶無耶のうちに葬られてしまつた。お延ほど根強くない彼女は、其意味を覺る前に、もう妻としての興味を夫から離して、母らしい輝やいた始めての眼を、新らしく生れた子供の上に注がなければならなくなつた。

お秀のお延と違ふ所は是丈ではなかつた。お延の新世帯が夫婦二人ぎり、家族は双方とも遠い京都に離れてゐるのに反して、堀には母があつた。弟も妹も同居してゐた。親類の厄介者迄ゐた。自然の勢ひ彼女は夫の事ばかり考へてゐる譯に行かなかつた。中でも母には、他の知らな

い氣苦勞をしなければならなかつた。

器量望みで貰はれた丈あつて、外側から見たお秀は何時迄経つても若かつた。一つ年下のお延に比べて見ても矢つ張り若かつた。四歳の子持とは何うしても考へられない位であつた。けれどもお延と違つた家庭の事情の下に、過去の四五年を費やして来た彼女は、何處かにまたお延と違つた心得を有つてゐた。お延より若く見られないとも限らない彼女は、ある意味から云つて、慥にお延よりも老けてゐた。言語態度が老けてゐるといふよりも、心が老けてゐた。いはゞ、早く世帯染みたのである。

斯ういふ世帯染みた眼で兄夫婦を眺めなければならぬお秀には、常に彼等に對する不満があつた。其不満が、何か事さへあると、兎角彼女を京都にゐる父母の味方にしたがつた。彼女はそれでも成るべく兄と衝突する機會を避けるやうにしてゐた。ことに嫂に氣不味い事をいふのは、直接兄に當るよりも猶悪いと思つて、平生から慎んでゐた。然し腹の中は寧ろ反對であつた。何かいふ兄よりも何も云はないお延の方に、彼女はいつでも餘分の非難を投げ掛けてゐた。兄がもしあれ程派手好きな女と結婚しなかつたならばといふ氣が、始終胸の底にあつた。さうしてそ

れは身最負に過ぎない、お延に氣の毒な批判であるといふ事には、かつて思ひ至らなかつた。

お秀は自分の立場を能く承知してゐる積でゐた。兄夫婦から烟たがられない迄も、決して快よく思はれてゐない位の事には、氣が付いてゐた。然し自分の立場を改めようといふ考は、彼女の頭の何處にも入つて來なかつた。第一には二人が厭がるから猶改めないのであつた。自分の立場を厭がるのが、結局自分を厭がるのと同じ事に歸着してゐるので、彼女は其所に反抗の意地を出したくなつたのである。第二には正しいといふ良心が働いてゐた。是はいくら厭がられても兄の爲だと思へば構はないといふ主張であつた。第三は單に派手好きなお延が嫌だといふ一點に纏められて仕舞はなければならなかつた。お延より餘裕のある、又お延より贅澤の出來る彼女にして、其點では自分以下のお延が何故氣に喰はないのだらうか。それはお秀にとつて何の問題にもならなかつた。但しお秀には姑があつた。さうしてお延は夫を除けば全く自分自身の主人公であつた。然しお秀は此問題に關聯して此相違すら考へなかつた。

お秀がお延から津田の消息を電話で訊かされて、其翌日病院へ見舞に出掛けたのは、お時の行く小一時間前、丁度小林が外套を受取らうとして、彼の座敷へ上り込んだ時分であつた。

九十二

前の晩能く寐られなかつた津田は、其朝看護婦の運んで來て呉れた膳に一寸手を出したぎり、又仰向になつて、昨夕の不足を取り返すために、重たい眼を閉つてゐた。お秀の入つて來たのは、丁度彼がうとくと半睡状態に入り掛けた間際だつたので、彼は襖の音ですぐ眼を覺ました。さうして病人に斟酌を加へる積で、わざとそれを靜かに開けたお秀と顔を見合せた。

斯ういふ場合に彼等は決して愛嬌を賣り合はなかつた。嬉しさうな表情も見合せ合はなかつた。彼等からいふと、それは寧ろ陳腐過ぎる社交上の形式に過ぎなかつた。それから一種の虚偽に近い努力でもあつた。彼等には自分等兄妹でなくては見られない、又自分等以外の他人には通用し悪い默契があつた。何うせお互ひに好く思はれよう、好く思はれようと意識して、上部の所作丈を人並に盡したところで、今更始まらないんだから、一層下手に騙し合ふ手数を省いて、良心に背かない顔其儘で、面と向き合はうぢやないかといふ無言の相談が、多年の間に何時か成立して仕舞つたのである。さうして其良心に背かない顔といふのは、取も直さず、愛嬌のない顔といふ

事に過ぎなかつた。

第一に彼等は普通の兄妹として親しい間柄であつた。だから遠慮の要らないといふ意味で、不愛嬌な挨拶が苦にならなかつた。第二に彼等は何處かに調子の合はない所を有つてゐた。それが災の元で、互の顔を見ると、互に弾き合ひたくなつた。

不圖首を上げて其所にお秀を見出した津田の眼には、正に斯うした二重の意味から来る不精と不關心があつた。彼は何物をか待ち受けてゐるやうに、一旦きつと上げた首を又枕の上に横たへて仕舞つた。お秀は又お秀で、それには一向頓着なく、言葉も掛けずに、そつと室の内に入つて来た。

彼女は何より先にまづ、枕元にある膳を眺めた。膳の上は汚ならしかつた。横倒しに引ッ繰り返された牛乳の罐の下に、鶏卵の殻が一つ、其重みで押し潰されて居る傍に、齒痕の付いた焼麵包が食缺の儘投げ出されてあつた。しかも外にまだ一枚手を付けないのが、綺麗に皿の上に載つてゐた。玉子もまだ一つ残つてゐた。

「兄さん、こりやもう済んだの。まだ食べ掛けなの」

實際津田の片付かたは、何方にでも取れる様な、だらしないものであつた。

「もう済んだんだよ」

お秀は眉をひそめて、膳を階子段の上り口迄運び出した。看護婦の手が隙かなかつたためか、何時迄も兄の枕元に取り散らかされてゐる朝食の残骸は、掃除の行き届いた自分の家を今出掛けて来たばかりの彼女に取つて、餘り見つとも可いものではなかつた。

「汚ならしい事」

彼女は誰に小言を云ふともなく、たゞ一人斯う云つて元の座に歸つた。然し津田は黙つて取り合はなかつた。

「何うして己の此所に居る事が知れたんだい」

「電話で知らせて下さつたんです」

「お延がかい」

「ええ」

「知らせないでも可いつて云つたのに」

今度はお秀の方が取り合はなかつた。

「すぐ来ようと思つたんですけれども、生憎昨日は少し差支があつて——」

お秀はそれぎり後を云はなかつた。結婚後の彼女には、斯ういふ風に物を半分ぎりしか云はな癖が何時の間にか出て来た。場合によると、それが津田には變に受取れた。「嫁に行つた以上、兄さんだつてもう他人ですからね」といふ意味に解釋される事が時々あつた。自分達夫婦の間柄を考へて見ても、其所に無理はないのだと思ひ返せない程理窟の徹らない頭を有つた津田では無論なかつた。それどころか、彼は此妹のやうな態度で、お延が外へ對して振舞つて呉れ、ば好いがと、暗に希望してゐた位であつた。けれども自分がお秀にさうした素振を見せられて見ると決して好い氣持はしなかつた。さうして自分こそ絶えずお秀に對してさういふ素振を見せてゐるのにと反省する暇も何にもなくなつて仕舞つた。

津田は後を訊かずに思ふ通りを云つた。

「なに今日だつて、忙がしい所をわざ／＼来て呉れるには及ばないんだ。大した病氣ぢやないんだから」

「だつて嫂さんが、もし閑があつたら行つて上げて下さいつて、わざ／＼電話で仰しやつたから」

「さうかい」

「それにあたし少し兄さんに話したい用があるんですの」

津田は漸く頭をお秀の方へ向けた。

九十三

手術後局部に起る變な感じが彼を襲つて来た。それはガーゼを詰め込んだ創口の周圍にある筋肉が一時に収縮するために起る特殊な心持に過ぎなかつたけれども、一旦始まつたが最後、恰も呼吸が脈搏のやうに、規則正しく進行して已まない種類のものであつた。

彼は一昨日の午後始めて第一の収縮を感じた。芝居へ行く許諾を彼から得たお延が、階子段を下へ降りて行つた拍子に起つた此經驗は、彼に取つて全然新しいものではなかつた。此前療治を受けた時、既に同じ現象の發見者であつた彼は、思はず「又始まつたな」と心の中で叫んだ。

すると苦い記憶をわざと彼の爲に繰り返して見せるやうに、収縮が規則正しく進行し出した。最初に肉が縮む、詰め込んだガーゼで荒々しく其肉を擦すられた氣持がする、次にそれが段々緩和されて来る、やがて自然の状態に戻らうとする、途端に一度引いた浪が又磯へ打ち上げるやうな勢で、収縮感が猛烈に振り返ってくる。すると彼の意志は其局部に對して全く平生の命令權を失つてしまふ。止めさせようと焦慮れば焦慮る程、筋肉の方で猶云ふ事を聞かなくなる。——是が過程であつた。

津田は此變な感じとお延との間に何んな連絡があるか知らなかつた。彼は籠の中の鳥見たやうに彼女を取扱ふのが氣の毒になつた。何時迄も彼女を自分の傍に引き付けて置くのを男らしくないと考へた。それで快よく彼女を自由な空氣の中に放して遣つた。然し彼女が彼の好意を感謝して、彼の病床を去るや否や、急に自分丈一人取り残されたやうな氣がし出した。彼は物足りない耳を傾むけて、お延の下へ降りて行く足音を聞いた。彼女が玄關の扉を開ける時、烈しく鳴らした號鈴の音さへ彼には餘り無遠慮過ぎた。彼が局部から受ける厭な筋肉の感じは丁度此時に再發したのである。彼はそれを一種の刺戟に歸した。さうして其刺戟は過敏にされた神経のお蔭に外

ならないと考へた。ではお延の行爲が彼の神経をそれ程過敏にしたのだらうか。お延の所作に對して突然不快を感じ出した彼も、其所迄は論斷する事が出来なかつた。然し全く偶然的暗合でない事も、彼に云はせると、自明の理であつた。彼は自分丈の料簡で、二つの間にある關係を拵へた。同時に其關係を後からお延に云つて聞かせて遣りたくなつた。單に彼女を氣の毒がらせるために、病氣で寐てゐる夫を捨て、一日の歡樂に走つた結果の悪かつた事を、彼女に後悔させるために。けれども彼はそれを適當に云ひ現はす言葉を知らなかつた。たとひ云ひ現はしても彼女に通じない事は慥であつた。通じるにしても、自分の思ひ通りに感じさせる事は六づかしかつた。彼は黙つて心持を悪くしてゐるより外に仕方がなかつた。

お秀の方を向き直つた咄嗟に、又感じ始めた局部の収縮が、すぐ津田に是丈の顛末を思ひ起させた。彼は苦い顔をした。

何にも知らないお秀にそんな細かい意味の分る筈はなかつた。彼女はそれを見が何時でも自分に文して見せる例の表情に過ぎないと解釋した。

「お厭なら病院をお出になつてから後にしませうか」

別に同情のある態度も示さなかつた彼女は、それでも幾分か斟酌しなければならなかつた。

「何處か痛い」

津田はたゞ首肯して見せた。お秀はしばらく黙つて彼の様子を見てゐた。同時に津田の局部で収縮が規則正しく繰り返され始めた。沈黙が二人の間に續いた。其沈黙の續いてゐる間彼は苦い顔を改めなかつた。

「そんなに痛くつちや困るのね。嫂さんは何うしたんでせう。昨日の電話ぢや痛みも何にもないやうなお話しだつたのにね」

「お延は知らないんだ」

「ぢや嫂さんが歸つてから後で痛み始めたの」

「なに本當はお延のお蔭で痛み始めたんだ」とも云へなかつた津田は、此時急に自分が自分に駄々つ子らしく見えて來た。上部は兎に角、腹の中が如何にも兄らしくないのが耻づかしくなつた。

「一體お前の用といふのは何だい」

「なに、そんなに痛い時に話さなくつても可いのよ。又にしませう」

津田は優に自分を偽る事が出來た。しかし其時の彼は偽るのが厭であつた。彼はもう局部の感じを忘れてゐた。収縮は忘れ、已み、已めば忘れるのを其特色にしてゐた。

「構はないからお話しよ」

「何うせあたしの話だから碌な事ぢやないのよ。可くつて」

津田にも大よその見當は付いてゐた。

九十四

「またあの事だらう」

津田はしばらく間を置いて、仕方なしに斯う云つた。然し其時の彼はもう例の通り聴きたくもないといふ顔付に返つてゐた。お秀は心で此矛盾を腹立たしく感じた。

「だからあたしの方ぢや先刻から用は今度の次にしようかと云つてるんぢやありませんか。それを兄さんがわざ／＼催促するように仰しやるから、ついお話しする氣にもなるんですわ」

「だから遠慮なく話したら可いぢやないか。どうせお前は其積で来たんだらう」
「だつて、兄さんがそんな厭な顔をなさるんですもの」

お秀は少くとも兄に對してなら厭な顔位で會釋を加へる女ではなかつた。従つて津田も氣の毒になる筈がなかつた。却つて妹の癖に餘計な所で自分を非難する奴だ位に考へた。彼は取り合はずに先へ通り過した。

「また京都から何か云つて来たのかい」

「えゝまあそんな所よ」

津田の所へは父の方から、お秀の許へは母の側から、京都の消息が重に傳へられる事に畧極つてゐたので、彼は文通の主を改めて聞く必要を認めなかつた。然し目下の境遇から云つて、お秀の母から受け取つたといふ手紙の中味にはまた冷淡であり得る筈がなかつた。二度目の請求を京都へ出してから以後の彼は、絶えず送金の有無を心のうちで氣遣つてゐたのである。兄妹の間に「あの事」として通用する事件は、成るべく聽くまいと用心しても、月末の仕拂や病院の入費の出所に多大の利害を感じない譯に行かなかつた津田は、また此二つのものが互に困絡かつて、離

す事の出来ない事情の下にある意味合を、お秀よりも能く承知してゐた。彼は何うしても積極的に自分から押して出なければならなかつた。

「何と云つて來たい」

「兄さんの方へもお父さんから何か云つて來たでせう」

「うん云つて來た。そりや話さないでも大抵お前に解つてらだらう」

お秀は解つてゐるともゐないとも答へなかつた。たゞ微かに薄笑の影を縮りの好い口元に寄せて見せた。それが如何にも兄に打ち勝つた得意の色をほのめかすやうに見えるのが津田には癪だつた。平生は單に妹であるといふ因縁づくで、少しも自分の眼に付かないお秀の器量が、斯う云ふ時に限つて、悪く彼を刺戟した。なまじい容色が十人並以上なので、此女は餘計他の感情を害するのではなからうかと思ふ疑惑さへ、彼に取つては一度や二度の經驗ではなかつた。「お前は器量望みで貰はれたのを、生涯自慢にする氣なんだらう」と云つて遣りたい事も屢あつた。

お秀はやがてきちりと整つた眼鼻を揃へて兄に向つた。

「それで兄さんは何うなすつたの」

「何うも仕様がなないぢやないか」

「お父さんの方へは何にも云つてお上にならなかつたの」

津田はしばらく黙つてゐた。それから左も巳を得ないといつた風に答へた。

「云つて遣つたさ」

「さうしたら」

「さうしたら、まだ何とも返事がないんだ。尤も家へはもう来てゐるかも知れないが、何しろお延が来て見なければ、其所も分らない」

「然しお父さんが何んなお返事をお寄せになるか、兄さんには見當が付いて」

津田は何とも答へなかつた。お延の拵らへて呉れた纏袍の襟を手探りに探つて、黒八丈の下から抜き取つた小楊枝で、頻りに前齒をほぐり始めた。彼が何時迄も黙つてゐるので、お秀は同じ意味の質問を外言葉で掛け直した。

「兄さんはお父さんが快よく送金をして下さると思つてゐらつしやるの」

「知らないよ」

津田はぶつきら棒に答へた。さうして腹立たしさうに後を付け加へた。

「だからお母さんはお前の所へ何と云つて来たかつて、先刻から訊いてるぢやないか」

お秀はわざと眼を反らして縁側の方を見た。それは彼の前であゝ、あゝと嘆息して見せる所作の代りに過ぎなかつた。

「だから云はない事ぢやないのよ。あたし始から斯うなるだらうと思つてたんですもの」

九十五

津田は漸くお秀宛で来た母の手紙の中に、何んな事柄が書いてあるかを聞いた。妹の口から傳へられた其内容によると、父の怒りは彼の豫期以上に烈しいものであつた。月末の不足を自分で才覚するなら格別、もしそれさへ出来ないといふなら、是から先の送金も、見せしめのため、當分見合わせるかも知れないといふのが父の實際の考へらしかつた。して見ると、此間彼の所へさう云つて来た垣根の繕ひだとか家賃の滞りだとかいふのは嘘でなければならなかつた。よし嘘でないにした所で、單に口先の云ひ前と思はなければならなかつた。父がまた何で彼に對してそんな

しらじらしい他人行儀を云つて寄こしたものだらう。叱るならもつと男らしく叱つたら宜さうなものだのに。

彼は沈吟して考へた。山羊髯を生やして、萬事に勿體を付けたがる父の顔、意味もないのに束髪を嫌つて鬚にばかり結ひたがる母の頭、その位の特色は此場合を解釋する何の手掛りにもならなかつた。

「一體兄さんが約束通りになさらないから悪いのよ」とお秀が云つた。事件以後何度となく彼女によつて繰り返される此言葉ほど、津田の聞きたくないものはなかつた。約束通りにしないのが悪い位は、妹に教はらないでも、能く解つてゐた。彼はたゞ其必要を認めなかつた丈なのである。さうして其立場を他からも認めて貰ひたかつたのである。

「だつてそりや無理だわ」とお秀が云つた。「いくら親子だつて約束は約束ですもの。それにお父さんと兄さん丈の事なら、何うでも可いでせうけれども」

お秀には自分の良人の堀がそれに關係してゐるといふ事が一番重要な問題であつた。

「良人でも困るのよ。あんな手紙をお母さんから寄こされると」

學校を卒業して、相當の職にありついて、新しく家庭を構へる以上、曲りなりにも親の厄介にならずに、獨立した生計を營んで行かなければならないといふ父の意見を翻がへさせたものは堀の力であつた。津田から頼まれて、また無雜作にそれを引き受けた堀は、物價の騰貴、交際の必要、時代の變化、東京と地方との區別、色々都合の好い材料を勝手に並べて、勤儉一方の父を口説き落したのである。其代り益暮に津田の手に渡る賞與の大部分を割いて、月々の補助を一度に幾分か償却させるといふ方針を立てたのも彼であつた。其案の成立と共に責任の出來た彼は又至極呑氣な男であつた。約束の履行などいふ事は、最初から深く考へなかつたのみならず、遂行の時期が來た時分には、もうそれを忘れてゐた。詰責に近い手紙を津田の父から受取つた彼は、殆んど此事件を念頭に置いてゐなかつた丈に、驚ろかされた。然し現金の綺麗に消費されてしまつた後で、氣が付いた所で、何うする譯にも行かなかつた。樂天的な彼はたゞ申し譯の返事を書いて、それを終了と心得てゐた。所が世間は自分のゾボラに適當するやうに出來上つてゐないといふ事を、彼は津田の父から教へられなければならなかつた。津田の父は何時迄経つても彼を責任者扱ひにした。

同時に津田の財力には不相应と見える位な立派な指輪がお延の指に輝き始めた。さうして始めにそれを見付け出したものはお秀であつた。女同志の好奇心が彼女の神経を鋭敏にした。彼女はお延の指輪を賞めた。賞めた序にそれを買つた時と所とを突き留めようとした。堀が保証して成り立した津田と父との約束を丸で知らなかつたお延は、平生の用心にも似ず、其點にかけて、全く無邪氣であつた。自分が何の位津田に愛されてゐるかを、お秀に示さうとする努力が、凡ての願慮に打ち勝つた。彼女は有の儘をお秀に物語つた。

不斷から派手過る女としてお延を多少悪く見てゐたお秀は、すぐ其顛末を京都へ報告した。しかもお延が盆暮の約束を承知してゐる癖に、わざと夫を唆のかして、返される金を返さないやうにさせたのだといふ風な手紙の書方をした。津田が自分の細君に對する虚榮心から、内狀をお延に打ち明けなかつたのを、お秀はお延自身の虚榮心でもあるやうに、頭から極めてかかつたのである。さうして自分の誤解を其儘京都へ傳へてしまつたのである。今でも彼女は其誤解から逃れる事が出来なかつた。従つて此事件に關係していふと、彼女の相手は兄の津田よりも寧ろ嫂のお延だと云つた方が適切かも知れなかつた。

「一體嫂さんは何ういふ積でゐらつしやるんでせう。こんだの事に就いて」

「お延に何にも關係なんかありやしないぢやないか。あいつにや何にも話しやしないんだもの」

「さう。ぢや嫂さんが一番氣樂で可いわね」

お秀は皮肉な微笑を見せた。津田の頭には、芝居に行く前の晩、これを質にでも入れようかと云つて、びか／＼する厚い帯を電燈の光に差し突けたお延の姿が、鮮かに見えた。

九十六

「一體何うしたら可いんでせう」

お秀の言葉は不謹慎な兄を困らせる意味にも取れるし、又自分の當惑を洩らす表現にもなつた。彼女には夫の手前といふものがあつた。夫よりも猶遠慮勝な姑さへ其奥には控へてゐた。

「そりや良人だつて兄さんに頼まれて、口は利いたやうなもの、其所迄責任を有つ積でもなかつたんでせうからね。と云つて、何もあれは無責任だと今更お断りをする氣でもないでせうけれども。兎に角萬一の場合には斯う致しますからつて證文を入れた譯でもないんだから、さうお

父さんの様に、法律づくめに解釋されたつて、あたしが良人へ對して困る丈だわ」

津田は少くとも表面上妹の立場を認めるより外に道がなかつた。然し腹の中では彼女に對して氣の毒だといふ料簡が何處にも起らないので、彼の態度は自然お秀に反響して來た。彼女は自分の前に甚だ横着な兄を見た。其兄は自分の便利より外に殆んど何にも考へてゐなかつた。もし考へてゐるとすれば新らしく貰つた細君の事丈であつた。さうして彼は其細君に甘くなつてゐた。寧ろ自由にされてゐた。細君を満足させるために、外部に對しては、前よりは一層手前勝手にならなければならなかつた。

兄を斯う見てゐる彼女は、津田に云はせると、最も同情に乏しい妹らしからざる態度を取つて兄に向つた。それを遠慮のない言葉で云ひ現はすと、「兄さんの困るのは自業自得だから仕様がなけれども、あたしの方の始末は何う付けて呉れるのですか」といふやうな露骨千萬なものになつた。

津田は何うするとも云はなかつた。又何うする氣もなかつた。却つて想像に困難なものとして父の料簡を、お秀の前に問題とした。

「一體お父さんこそ何ういふ積なんだらう。突然金を送らないとさへ宣告すれば、由雄は工面するに違ないとも思つてゐるのか知ら」

「其所なのよ、兄さん」

お秀は意味ありげに津田の顔を見た。さうして又付け加へた。

「だからあたしが良人に對して困るつて云ふのよ」

微かな暗示が津田の頭に閃めいた。秋口に見る稲妻のやうに、それは遠いものであつた、けれども鋭いものに違なかつた。それは父の品性に關係してゐた。今迄全く氣が付かずにゐたといふ意味で遠いといふ事も云へる代りに、一旦氣が付いた以上、父の平生から押して、それを是認したくなるといふ點では、子としての津田に、随分鋭く切り込んで來る性質のものであつた。心のうちで劈頭に「まさか」と叫んだ彼は、次の瞬間に「ことによると」と云ひ直さなければならなくなつた。

臆斷の鏡によつて照らし出された、父の心理状態は、下のやうな順序で、豫期通りの結果に到着すべく仕組まれてゐた。——最初に體よく送金を拒絶する。津田が困る。今迄の行掛り上堀に

譯を話す。京都に對して責任を感じずべく餘儀なくされてゐる堀は、津田の窮を救ふ事によつて、始めて父に對する保証の義務を果す事が出来る。それで否應なしに例月分を立て替へて呉れる。父はたゞ禮を云つて澄ましてゐる。

斯う段落を付けて考へて見ると、そこには或種の要心があつた。相當な理窟もあつた。或程度の手腕は無論認められた。同時に何等の淡泊さがそこには存在してゐなかつた。下劣と迄行かないでも、狐臭い狡猾な所も少しはあつた。小額の金に對する度外れの執着心が殊更に目立つて見えた。要するに凡てが父らしく出来てゐた。

外の點で何う衝突しやうとも、父の斯うした遣口に感心しないのは、津田と雖もお秀に譲らなかつた。有ゆる意味で父の同情者でありながら、此一點になると、流石のお秀も津田と同じやうに眉を擧めなければならなかつた。父の品性。それは寧ろ別問題であつた。津田はお秀の補助を受ける事を快よく思はなかつた。お秀は又兄弟夫婦に對して好い感情を有つてゐなかつた。其上夫や姑への義理もつらく考へさせられた。二人はまづ實際問題を何う片付けて可いかに苦しんだ。其癖口では双方とも底の底迄突き込んで行く勇氣がなかつた。互ひの忖度から成立つた父の料簡

は、たゞ會話の上で默認し合ふ程度に發展した丈であつた。

九十七

感情と理窟の纏れ合つた所を解ごしながら前へ進む事の出来なかつた彼等は、何處迄もうね／＼歩いた。局所に觸るやうな又觸らないやうな双方の態度が、心のうちで双方を焦烈つたくした。然し彼等は兄妹であつた。二人共ね／＼した性質を共通に具へてゐた。相手の淡泊しない所を暗に非難しながらも、自分の方から爆發するやうな不體裁は演じなかつた。たゞ津田は兄丈に、又男丈に、話を一點に括る手際をお秀より餘計に有つてゐた。

「つまりお前は兄さんに對して同情がないと云ふんだらう」

「左右ぢやないわ」

「でなければお延に同情がないといふんだらう。そいつはまあ何方にしたつて同なじ事だがね」

「あら、嫂さんの事をあたし何とも云つてやしませんわ」

「要するに此事件に就いて一番悪いものは己だと、結局斯うなるんだらう。そりや今更説明を

伺はなくつても能く兄さんには解つてる。だから好いよ。兄さんは甘んじて其罰を受けるから。今月はお父さんからお金を貰はないで生きて行くよ」

「兄さんにそんな事が出来て」

お秀の兄を冷笑けるやうな調子が、すぐ津田の次の言葉を喚び起した。

「出来なければ死ぬ迄の事さ」

お秀は遂にきりりと緊つた口元を少し緩めて、白い齒を微かに見せた。津田の頭には、電燈の下で光る厚帯を弄くつてゐるお延の姿が、再び現れた。

「いつそ今迄の經濟事情を残らずお延に打ち明けてしまはうか」

津田に取つてそれ程容易い解決法はなかつた。然し行き掛りから云ふと、是程また困難な自白はなかつた。彼はお延の虚榮心をよく知り抜いてゐた。それに出來る丈の満足と與へる事が、また取も直さず彼の虚榮心に外ならなかつた。お延の自分に對する信用を、女に大切な其一角に於て突き崩すのは、自分で自分に打撲傷を與へるやうなものであつた。お延に氣の毒だからといふ意味よりも、細君の前で自分の器量を下げなければならぬといふのが彼の大きな苦痛になつた。

其位の事と他から笑はれるやうな斯んな小さな場合ですら、彼はすぐ動く氣になれなかつた。家には現に金がある、お延に對して自己の體面を保つには有餘の程の金がある。のにといふ勝手な事實の方が何うしても先に立つた。

其上彼は何んな時にでもむかつ腹を立てる男ではなかつた。己れを忘れるといふ事を非常に安つぱく見る彼は、また容易に己れを忘れる事の出來ない性質に父母から生み付けられてゐた。

「出来なければ死ぬ迄」と放り出すやうに云つた後で、彼はまだお秀の様子を窺つてゐた。腹の中に言葉通りの斷乎たる何物も出て來ないのが耻づかしいとも何とも思へなかつた。彼は寧ろ冷やかに胸の天秤を働かし始めた。彼はお延に事情を打ち明ける苦痛と、お秀から補助を受ける不愉快とを商量した。さうして一層二つのうちで後の方を冒したら何んなものだらうかと考へた。それに應ずる力を充分有つてゐたお秀は、第一兄の心から後悔してゐないのを嫌らなく思つた。兄の後に御本尊のお延が澄まして控へてゐるのを悪んだ。夫の堀を此事件の責任者でもあるやうに見做して、京都の父が遠廻しに持ち掛けて來るのが如何にも業腹であつた。そんなこんなな蟠まりから、津田の意志が充分見え透いて來た後でも、彼女は容易に自分の方で積極的な好

意を示す事を敢てしなかつた。

同時に、器量望みで比較的富裕な家に嫁に行つたお秀に對する津田の態度も、また一種の自尊心に充ちてゐた。彼は成上りものに近いある臭味を結婚後の此妹に見出した。或は見出したと思つた。何時か兄といふ嚴めしい具足を着けて彼女に對するやうな氣分に支配され始めた。だから彼と雖も妄りにお秀の前に頭を下げる譯には行かなかつた。

二人はそれで何方からも金の事を云ひ出さなかつた。さうして兩方共兩方で云ひ出すのを待つてゐた。其煮え切らない不徹底な内輪話の最中に、突然下女のお時が飛び込んで来て、二人の拵らへ掛けてゐた局面を、一度に崩してしまつたのである。

九十八

然しお時のちかに来る前に、津田へ電話の掛つて来た事も慥であつた。彼は階子段の途中で藥局生の面倒臭さうに取り次ぐ「津田さん電話ですよ」といふ聲を聞いた。彼はお秀との對話を一寸已めて「何處からです」と訊き返した。藥局生は下りながら、「大方お宅からでせう」と云つた。

冷淡な此挨拶が、つい込み入つた話に身を入れ過ぎた津田の心を横着にした。芝居へ行つたぎり、昨日も今日も姿を見せないお延の仕うちを暗に快よく思つてゐなかつた彼を猶不愉快にした。

「電話で釣るんだ」

彼はすぐ斯う思つた。昨日の朝も掛け、今日の朝も掛け、ことによると明日の朝も電話文掛けて置いて、散々人の心を自分の方に惹き着けた後で、ひよつくり本當の顔を出すのが手だらうと鑑定した。お延の彼に對する平生の素振から推して見ると、此類測に滿更な無理はなかつた。彼は不用意の際に、突然としてしかも靜肅に自分を驚ろかして這入つて來るお延の笑顔さへ想像した。その笑顔が又變に彼の心に影響して來る事も彼には能く解つてゐた。彼女は一刹那に閃めかす其鋭どい武器の力で、何時でも即座に彼を征服した。今迄持ち應へに持ち應へ抜いた心機をひらりと轉換させられる彼から云へば、見す／＼彼女の術中に落ち込むやうなものであつた。

彼はお秀の注意にも拘はらず、電話を其儘にして置いた。

「なに何うせ用ぢやないんだ。構はないよ。放つて置け」

此挨拶が又お秀には丸で意外であつた。第一はゾボラを忌む兄の性質に釣り合はなかつた。第

二には何でもお延の云ひなり次第になつてゐる兄の態度でなかつた。彼女は兄が自分の手前を憚かつて、不斷の甘い所を押し隠すために、わざと嫂に對して無頓着を粧ふのだと解釋した。心のうちで多少それを小氣味よく感じた彼女も、下から電話の催促をする薬局生の大きな聲を聞いた時には、それでも兄の代りに立ち上らない譯に行かなかつた。彼女はわざ／＼下迄降りて行つた。然しそれは何の役にも立たなかつた。薬局生が好い加減にあしらつて、荒らし抜いた後の受話器はもう不通になつてゐた。

形式的に義務を済ました彼女が元の座に歸つて、再び二人に共通な話題の緒口を取り上げた時、一方では急込んだお時が、とうとう我慢し切れなくなつて自働電話を棄て、電車に乗つたのである。それから十五分と経たないうちに、津田は又豫想外な彼女の口から豫想外な用事を聞かされて驚ろいたのである。

お時の歸つた後の彼の心は容易に元へ戻らなかつた。小林の性格は能く知り抜いてゐるといふ自信はありながら、不意に自分の留守宅に押し掛けて来て、それ程懇意でもないお延を相手に、話し込まうとも思はなかつた彼は、驚ろかざるを得ないのみならず、又考へざるを得なかつた。

それは外套を遣る遣らないの問題ではなかつた。問題は、外套とは丸で縁のない、しかし他の外套を、平氣で能く知りもしない細君の手からぢかに貰ひ受けに行くやうな彼の性格であつた。もしくは彼の境遇が必然的に生み出した彼の第二の性格であつた。もう一步押して行くと、其性格がお延に向つて何う働らき掛けるかが彼の問題であつた。其所には突飛があつた。自暴があつた。満足の人間を常に不満足さうに眺める白い眼があつた。新らしく結婚した彼等二人は、彼の接觸し得る満足した人間のうちで、得意な代表者として彼から選擇される恐れがあつた。平生から彼を輕蔑する事に於て、何の容赦も加へなかつた津田には、又さういふ素地を作つて置いた自覺が充分あつた。

「何をいふか分らない」

津田の心には突然一種の恐怖が湧いた。お秀はまた反對に笑ひ出した。何時迄も其小林といふ男を何とか彼とか批評したがる兄の意味さへ彼女には殆んど通じなかつた。

「何を云つたつて、構はないぢやありませんか、小林さんなんか。あんな人のいふ事なんぞ、誰も本氣にするものはありやしないわ」